

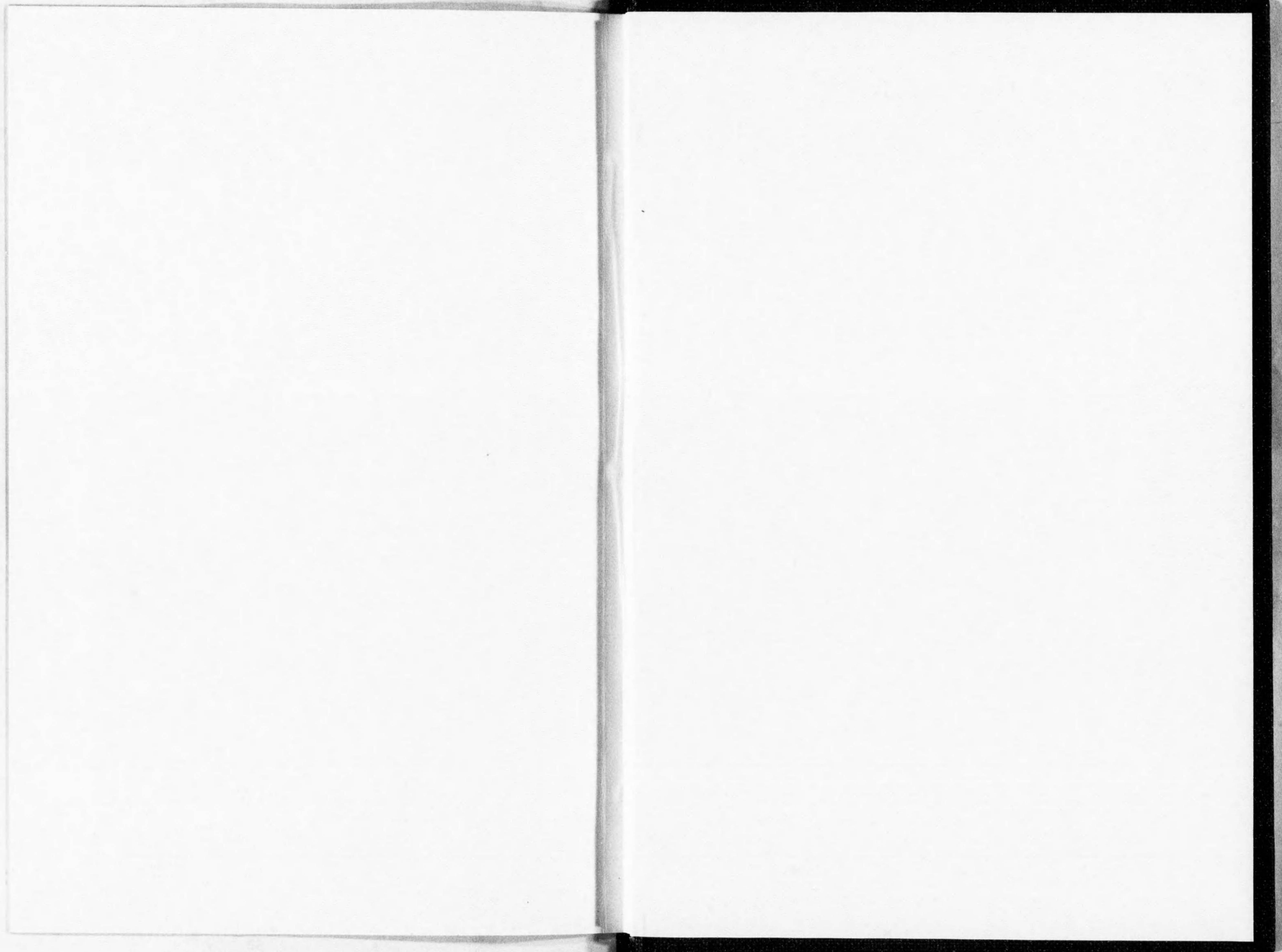
335  
a  
149

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始









6p117

大阪商科大学高商部教授  
大阪商科大学助教授

松井辰之助著

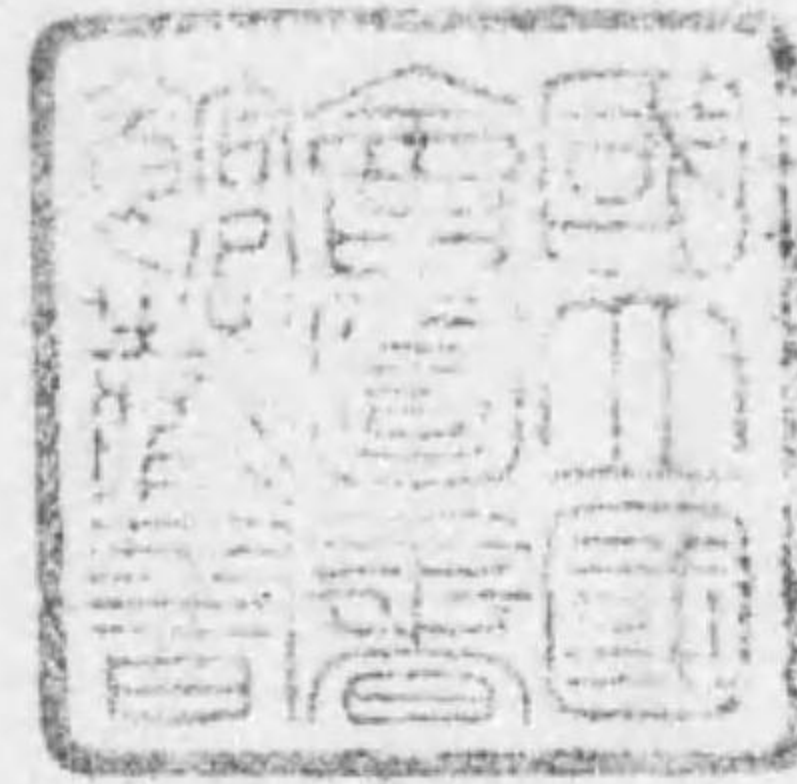
經營經濟學原論

第一分冊

大同書院發兌



530  
149



1026

### 再版への序

昨初夏、兎も角も分冊のかたちで上梓した本書のこの部分が、揣らずも秋以来重版の請求をうけつゝそれを決行しかねてゐた理由は、極めて貧弱ながら、もともと全體として始めて思想上の體系を形づくるべきものを分冊の體裁で公刊することが元來本意ではなかつたからである。しかるにいま初版のまま再びこの不本意を敢てするに至つたのは、世間一部の要求と授業上の參考に供すべき必要に迫られたからに他ならぬ。

著者の確信に従へば、經濟生活の『經營學的』研究の存在理由と可能性とは、經濟生活を動機論的に究明し、主體的過程に即しつゝ經濟社會を説明せむとするところにある。主體的經濟をその動機—經過—結果の環流的發展として、これを、全き社會經濟の内的關聯において歴史的社會的に闡明するにある。經濟經營生活は、經濟的利益心と經濟的構造との、對立物の主體的な統一、主體的な止揚の生活である。その恣意性と主觀性を理由として、ひ



さしく餘りにも抑壓されて來た主體性の原理は、いまや一つの經濟學——經營經濟學によつて再檢され、反省されやうとしてゐる。

言ふ迄もなく、類型的にみてもろもろの主體的經濟は、孤立せず、相互に交渉し對立しつゝ、歴史的には、或る主體的經濟は抑壓され、或る主體的經濟は自らを促進する。かくて、經濟における社會自然律的法則に規制されながらも、つねに何らか主體的なるものこそが、經濟生活を實現しようとするのである。人間が、一つの自然史的には必然的な經濟的運動法則から、その合目的性を取戻し、主體的に經濟を克服すべく、昂揚せられた高次のな主體を豫定することは必然的な過程に屬する。かゝる昂揚せられた主體こそわれわれの側において國民主義的な經濟への相である。

著者がこの書において事象を取扱ふ態度は、能ふ限り、現實的、非規範的ならうとするにある。例へば、企業をもつて利益を目的とするものと概念する如きはその一例である。かくて、本書における概念の構成と關係の認定の仕方とは、つねに能ふ限り實在科學的に、云はば「下より」のそれである。

しかし乍ら、それにも拘らず、著者の究局において所念する經營經濟學は時間的歴史性と恐らくは特定の空間性とにも一定の國民社會的規範性とをもつに至るであらう。經營經濟學は、われわれにとつては、畢竟、日本國民經濟社會がそれ自體としての、すなはち、その構成的諸經濟者の社會的歴史的實踐性と結びつかねばならない。かくて斯の學問に對する私の意圖が最後に辿りつくであらう到達點は、恐らく日本國民經濟經營學とでも名付くべきものであらうか。この國民主義的性格の故に、かかる經營經濟學觀が科學性を拒まれるならば、それは致し方のないところである。空間的に無限定的な一般的經營學への要求は著者の場合かかるものへの中間的過程に屬する。

おもふに、經營經濟學は、その特殊の學問的性格からして、何らか限定的具體者の經營經濟に直接の關心をもたうとする。この點、純粹に考へて社會經濟學（理論經濟學）が經濟の空間無限定的な綜合的自然層的统一象に直接關心を凝つめて、言はば客觀者的（社會自然的）な理論を目的とするのと異なる。經營經濟學は、かかる客觀者的な理法の存在に目を蔽はむとするものではない。



いが、かかる理法の支配する經濟社會の地盤を豫定し乍ら實はその内部から自己を合目的に實現しようとしつつある經濟者の意欲行動の理法に独自の認識目的をもたうとする。蓋し、平次面的な個別經濟は全體社會經濟の部分なればこそ、部分の作用力が全體を影響するのである。個別經濟の作用力は全體の外にあつてこれに作用するものでなく、全體の内部にはたらく力であるからこそそれを影響するのである。部分に作用力なくして全體が運動するといふことは、全體それ自體の運動の説明としても意味をなさないからである。従つて、斯の學問の場合、かやうな經濟者が何人であらうかは、實に仍つてもつてその經營經濟學本質に著しい差異を生ぜしめる。かの經營經濟學本質の資本家的學觀またはその對立物學觀！すべてそれらは、要するに限定的具體者の經濟生活に關心を繋かうとする經營經濟學に本來の特殊的性格の一つの顯れに他ならぬのである。

かくてわれわれもまた、經營經濟學のかかる一般的な對立的性格をばそのまま無批判的に受容すべきであらうか。否。著者の根本的見解の一は、階級

四

對立性の超國民的な一般的優位づけの上に斯學を構想しようとする見地に反對する。蓋し、日本國民社會の特殊の共情社會的性格は、一般的階級主義におけるが如き階級の社會性地位の決定づけを受容し得ないもののあることを信ぜしめるからである。

力は力によつて對抗せられる。併し乍ら、およそ同質的な力は同一の次面上ではその大小強弱によつてのみ隆替支配する。この限りにおいて争闘は無限である。それ自體の抽象において本質上結利社會的グゼルンシャフトリツヒな利益性の性格たる經濟的諸勢力は、かくて異質力によつてのみ、その下にそれら相互の争闘性を服せしめる。かかる異質力とはこの場合、共情性的力に他ならぬが、一定の國民社會が經濟的階級力をなほそのもとにつゝむに足るだけの高次の共情社會なりや否やは一に懸つてその國民社會の構造本質とそれへ加はる危機の程度とによつて相異なる。

日本國民社會の特殊な民族的歴史性は、その特殊の天然の地理的素質に照應する地政學的特性と相俟つて、それに對應する民族國家的經濟生活の指導

五



原理を必然的ならしめる。すなはち、階級的對立性は、日本國民經濟の場合、その自存的民族國家の内部において止揚されねばならない。この經營經濟學のイデオロギク性格をもつて併し乍ら單純にこれを理論と政策との混淆と誤認してはならない。蓋し、一定段階の時間的歴史的市民社會に支配的な運動法則はその限りにおいて、現實在の世界と發展の世界とを論理的に掩ふものではあるが、この際なほ一定の限定的な空間的——歴史的國民社會なるものはまた、その國民的、經濟的素質に照應する特殊の意識によつてかかる運動法則に對して何らかの態度をとらうとすることもまた人間的自由の範疇に屬するであらうからである。

併し乍ら、また他面、汎ろく一般的にこれを觀れば、資本主義の根強き世界的地盤は、歪められ搖曳しつつもなほ鞏く市民社會的支配力を振うてゐる。個別經濟はなほ執拗に、かかる世界經濟的波浪の浮沈裡を獨占資本制の威力に據つて自己が乗り切る一波一波の刹那に感激しようとする。そこに展開する相は、それぞれ何らか一定の國民社會的統制の性格色に染まりつつもなほ

自壘を固守しようとする自由主義的相である。かかる限りにおいては、經營經濟生活に支配する一般的理法はなほ國民社會の内外を問はず多分に妥當し、超國民社會的空間一般的な經營經濟學理論の存在し得る所以でもある。

然らば、國民主義的經營經濟學と市民社會的一般的經營經濟學とは如何なる次元序列の關係に立つべきか。この問題は當該國民社會の構造本質とそのイデオロギク實踐とに應じて一般的には論じ得ない。ナチスの國民社會、ファッショ的國民社會、ニラの國民社會等それぞれの場合にはここに問題とするに適しないが、日本民族國家共情社會の場合に關する限り、以上の粗笨な敘述がそれに答へた筈である。かくて現實科學としての經營經濟學は、われわれに於いて、畢に日本國民經濟經營學としてのみその國民的規範性と結びつく。現代の實踐性とはまさにかくの如きものであらねばならぬ。

遮莫、この書は、經營經濟學の性質および内容の一般に關する總論的敘述を目的とするものである。ただ、經營經濟學なる新興の學問に關しては從來から種々の論議が行はれ、いまなほ歸一するところの尠いといふ事由から、



この總論的研究においても出来るだけそれらの論議にも觸れこれらを批判しつつ記述をすすめぬ譯にゆかない事情におかれてゐるし、且つ、經營經濟學そのものに對する私見のうちには相當に先輩同學の諸氏と見解を異にするところある點から、苟にも一つの書冊において多少とも全貌的に問題を明にしようとする以上、稍所論が複雑に傾くといふことが避け難いことのやうにおもはれる。なほ、本書がそのうちに扱はむとするところは、決して總論的問題の悉くに互つて深く、且つ、著者が念ずる最後の經營經濟學課題にまで、記述が到達してゐるのではないのである。いづれ適當な機會を俟つ外はないが、斯學の根本的任務について著者が究局において抱く見解の一斑を記して序に代へることとした。なほ、所々に犯したであらう誤謬獨斷等に關しては先輩同學諸氏の親切な叱正を祈つて歇まぬ次第である。

昭和十三年五月五日

大阪商科大学經營學研究室において

著者 識

## 經營經濟學原論

松井辰之助 著



# 目次

緒論.....一

本論.....一五

第一篇 經營經濟學の基本概念.....一七

第一章 經營經濟學の方法概説.....一九

第一節 經濟的概念としての經營もしくは經營經濟.....二九

第二節 經營經濟學の科學上の地位.....三四

第三節 經營經濟學の認識對象.....三〇

一 經驗對象(前科學的對象)と認識對象(科學的對象).....三〇

二 經驗對象生成過程の日常的性質.....三三

三 經驗對象「經營經濟」の性質.....三五

四 認識對象「經營經濟」の性質.....三七

第二章 經營學的思惟方法の特質.....三七

第三章 經營經濟學の概念措定における領域本質學的方法と歴史事實學的方法.....四二

目次



第四章 經營經濟の意義……………二三

第一節 總 說……………二三

▷第二節 諸「經營」觀の紹介と批評……………二五

一 經營Ⅱ生産單位説の紹介と批評……………二五

二 經營Ⅱ生産經濟説の紹介と批評……………二五

三 經營Ⅱ營利經濟（企業）説の紹介と批評……………二六

四 經營Ⅱ個別經濟説の紹介と批評……………二六

五 經營Ⅱ協同體説の紹介と批評……………二七

六 經營Ⅱ強固經濟的構成體説の紹介と批評……………二八

七 經營Ⅱ意志經濟説の紹介と批評……………二九

八 要 括……………三〇

第三節 「經營」と「經營經濟」との異同……………三〇

一 「經營」と「經營經濟」とが異概念なりとする説……………三〇

二 「經營」と「經營經濟」とを同概念と解する説……………三〇

三 「經營」と「經營經濟」との異同に關する私見……………三〇

第四節 經營經濟の本質と現象形態（未完）……………三一

（以上第一分冊）

緒 論



本論に先立つて若干の事柄を述べておきたいと考へる。

◇  
「本書は未熟な多少の私見を含むであらうが、それは徒らに異説を唱へむとする趣意からではない。蓋し、およそ未完成過程の學問にあつては、私説は公説への何らかの止揚楔機でもあり得るであらうから、かゝる意味においては私見もまた將在的なものへの一發言たり得べしと考へられたからでありなほこの際、一の主張が他のそれと對照的になされたといふことも、それによつて事柄の解明がより、明瞭になされ得べしと考へられたからである。誤解のないために一言しておきたいとおもふ。」

◇  
經營經濟學が特殊の意識に本いてそれを取上げ、かゝる意味において斯學を出發せしめる最も根源的なものは、人間の意欲<sup>ヴェオルン</sup>—經濟的意欲である。ところで、意欲は先づ人間が人間たる地位において有するところの意欲である。かゝる意味においては人間の意欲はすべて均しく妥當な筈であり、そこでは特に誰の意欲が制約づけられるべき筈も無い。然るに意欲はまた社會といふその現實的圍界から地位づけられざるを得ぬ。この地位においては意欲は一定の歴史社會の制約のもとに立つそのやうな意欲であり、その限りから或る意欲はより妥當な意欲として言はゞ歴史社會的に自覺的な意欲である。こゝに人間といふ地位に本く意欲と歴史社會に規定された意欲との差別が生ずる。資本主義社會にあ



ては資本家の意欲はその故にかゝる歴史社會によつてより妥當的に權利づけられた存在の仕方をもつ。われ／＼はかゝる現實を決して輕視するものではない。

併し乍ら、一定の歴史社會的羈絆が他のひとびとの上に加重し來るやこれらの意欲はかゝる羈絆に抗してそこに人間たる地位に本く意欲を主張するに至るであらう。歴史社會的地位に對する意欲の人間の地位の要求であり、非資本的生業家の要求や生活經濟的要求の高まる所以である。この際かゝる人間の地位に根ざすところの意欲が歴史社會を刺戟する方向は當該國民社會の構造本質に應じて恐らく太しく相違するであらう。がしかしいづれにしてもそれは經濟に對するそれぞれの方向における均衡的要求たる點においては畢竟するに同一意義に歸するであらうとおもはれる。一定の理論經營經濟學は、この範疇に接觸する部分において甫めて恐らく一定の規範的方向を論理的に豫定せざるを得ないであらう、すなはち、均衡經營經濟學への斯學の究局的な理念がそれである。以上において私の本書における意圖が如何なるものかをほゞ素描出來たであらうかと考へる。われ／＼においては規範的經營經濟學が始めから問題となるのでは無い。現實的理論的考察の後に何らかの論理||規範的なものが斯學の出發的性質から必然的となるだけである。



さて、經營經濟學は如何なる性質の學問である乎、それは新興の一學科としてまさに如何なる課題をば独自の領域として取上げねばならない乎、およそこれらの斯學にとつての眞に根本的な問題は、經營經濟學をば正しき現代の關心に照して省察し、學問の社會的實踐的任務に本いて正當に理解することによつて解明されねばならないであらう。

然るに、經營經濟學は由來その學問的性質についても、その對象の領域に關しても、およそ廣き意義におけるその方法論的把握において、極めて論議の多い學問であつた。このことは、今日においてもなほ實質的には然らず言ふことが出來ぬ。勿論、最近に至つて、斯學に對する諸學者の見解が以前の如き混亂的な對立状態に比べて、大體の系統上からは、餘程おのづから整理され來つたと觀、若干の定説が少數的に對立するまでに落付いたとさえ一部の人々によつて考へられてはゐるやうである。成程、皮相的に言へば慥かに左様な見方も成立たないでもないが、併し乍ら、私の觀るところによれば、實質的にはむしろ對立は深刻化しつゝあるかの如くでさえある。單純なる外觀的對立が著しく影を潜めたかわりに、問題の焦點を遙かに質的に移動せしめて、根源的な微細な、斯學の社會觀的基底部面に移したることによつて、眞の根底的な對立を深めつゝあるかに見える。かやうな對立の認識は粗雑な類似觀によつては取得されない。例へば、經營の社會的動向が國民的統制に向へる各國民經濟社會における諸事實から直ちにもろ／＼の國民社會的經營經濟學觀を國民社會的經營經濟學の一般的措



醒  
醒

定の汎濫のうちに溶かし入れられるやうに考へたり、或は、各國民社會の構造的本質の相異およびそれに伴ふ社會觀の差異に無頓着に經營經濟學的諸指定が試みられたり、乃至、互に異なる社會史觀の對立に對して公正な省察を加へないで徒らな彼我の小兒病的對立のもとで無用な論争が企てられたりする如き事柄に對する細かな注意は、かゝる論者の觀取し得ない所であらう。蓋し、新しい學向に對する思索が段々と深化し反省が緻密な仕方では豊富になるにつれて、抗争は外觀的な形式的對立から轉じて内面的なしかも往々局部的でさえあり乍ら根基的な相異に溯及せしめるやうな實質的な對立へ移らうとするから、このことを看過して早計に表面的な大同化を盲信せむとすることは誤りを生ずる虞れがないとは言へぬ。實質的にみて、經營經濟學に寄せられた今日までの文獻を稍々審かに判讀し、かくて一箇の經營經濟學觀を記述しやうとするには、いまや觸れるべき幾多の難問題の横はれることに氣付くであらう。

併し乍ら私は、本書において、かやうな難問題の悉くにわたつて詳細な學問的檢覆を企てやうとは考へてゐないし、經營經濟學をばいま直に嚴密な科學として指定し得らるゝものともおもつてゐるものではない。たかだか、經營經濟學は如何なる性質の學問なりや、また如何なる領域と任務との學問たる可きか、その内容の一般如何等についておよそ一通りの理論的考察をなすとともに、むしろ私の今後發表すべき實質的研究の一應の基底となしたいといふことが本書の元來の目的である。

◇

約十年前このかた、獨逸においてもわが國においても、經營經濟學について議論されたところは先づ最初に、經營經濟學は科學なりや若くは科學たり得るやはたまた技術學 (Kunstlehre) にすぎざるやといふ問題であつて、今日でもこの問題は未だ解決してゐる譯ではない。(勿論、かゝる問題を取上ぐるに、私において科學は技術學の上位にあるなど考へてゐるのではなく、兩者の位階などを問題にしてゐるものでもない)。併し乍ら、經營經濟學が科學なりやの問題の如きことは、畢竟それぞれの學者の斯學に對する言はゞ主觀的な態度の多少の相異によつていづれとも解釋し得るものであつて、且つ、實はその正體を批判さるべき經營經濟學そのものが不完全な未成のものであつたり、若くは多くの場合、それぞれの學者の見地によつて殆んど任意に想定されたものであつて、一定の稍完成に近い經營經濟學が先づ存してゐて、それがしも科學と觀らるべきものであるかどうかといふことではないのであるから、かゝる問題に囚はるゝ限り議論は終止しそらにもおもはれないのである。

私の考ふるところによれば、經營經濟學は理論科學的考察としても可能なものと信じ本書の意圖もその點を主とするのではあるが、これについてはこの際簡單に多少の附言を爲しおく。元來、極めて粗雑に言ふならば、文化科學乃至社會科學における科學性といふ問題は比較的に不嚴密な性質のものではないかと著者は考へるのである。およそ文化科學の對象とする文化的現實態乃至社會的現實態な



るものはそれ自體何らか一定の理念若くは意欲を動機として成立しかくの如きものを内實に含みつゝ自ら運動するところの或種の目的論的テレオロギッシュな性質の現象であるから、その限りから、存在性と將在性との厳密な區別が至難なものであり、それに關する理論性と實踐性との峻別、その本領と技術との嚴格な裁別が困難なるを免れないのである。これらのことは實質的内容を多分豊富に取扱へるところの世の多くの謂ゆる科學的諸研究なるものほど、それらの研究成果が多くは實際には、理論と政策、本領と技術との混合體であることが殆んど通例であるといふ事實に徴しても知らるゝところでなからうかとおもふ。元よりわれわれは好んでかゝる混淆を爲さむとするものでは勿論無いのであるが、結果的には多くの場合それが避け難いといふところにこの種の學問に特有の困難性が伴ふものと見るべく、自然科学における理論的研究と應用的研究との如き截然たる區別の至難なる所以でもある。本書の叙述の結果も從つてまた、それが理論科學的處置の域外に出づるものであるか否かは私の豫め保し難いところではあるけれども、前述した如き理由により社會科學、特に實質的研究に接觸せむとする部分の研究にあつては、その理論的研究なるものも、この種の學問の本來の性質より見て多少の不純を犯すのも止むを得ざるところであらうかとおもふてゐる。

經營經濟學の科學性如何の問題に次いでわれわれの論點となり來つたものは、「經營」若くは「經營經濟」に關する概念論争であつた。經營 (Betrieb) なる言葉は、獨逸においては相當古くから用ひら

れてゐたものゝ如く、ウイヘルヘルム・マイスターにおける經營的思想の如きは別として、マルクスも資本論その他においてこの言葉を生産の經營方法 (Betriebsweise) の具體化せるものとして使用價值生産過程 (労働過程) の單位として意味してゐるかに見える。元より、氏にありては、専ら資本家的生産制における労働の二重性、すなはち、労働過程が使用價值生産過程たるゝもに同時に價值増殖過程たることを明にせむとすることがこの部分の彼の研究の目的であつて、ひとり使用價值の生産過程單位そのもの自體を目して經營なりとする如き言辭は氏からは聞かなかつたところであつた。然るにゾムバルトは、マルクスにおける労働の二重性から示唆を得て、明確にも使用價值生産の單位をもつて「經營」と措定し、「企業」をもつて價值増殖の單位としてこれを「經營」に對照せしめた。ゾムバルトのこの措定が奇しくも後年わが國の商業學界における一論争に示唆を與へ、また、今日までわが國の經營學界に根強き一禍根を生む機縁となつたのである。かくて經營概念はその本質的自體性において技術的なるものと一部の學者において解せられ、かゝる技術的本質のものたる經營が經濟學に包括せられむがために「經營經濟」なる特殊の一用法が強要せらるるに至つたのである。

併し乍ら、經營を使用價值生産單位と解することは、いまや言はず十九世紀的思想の沈澱物としてしか考へられないのである。ゾムバルト自身もその後再三その最初の經營概念を改竄して遂にこれを經濟的概念にまで變質せしめた。然らば經營とは今日の概念としてこれを如何に理解すべきであらう



か、また、經營經濟とは著者の見るところでは如何なる意味に解せらるべきか、經營するとは現代の把握として實に經濟することに他ならぬし、經營はここではつひに經濟的概念でなければならぬ。本書はまたこの間の所信を可及的に明にしやうと企てゝゐる。

○ さらに、經營經濟學の對象に關して一の論争が取殘されてゐる。斯學は企業を對象とするかはたまた、企業以外の經濟者經濟をも對象とする可能が認められて然るべきか。かくの如き對象性の決定は、私見によれば、經濟社會、換言して、經營社會の發展ととも發展する。對象それ自體がすでに社會關聯の裡に相對的歴史的に發展するものなる以上、對象の決定にもまた相對性歴史性が尊重されねばならぬ。このこともまた本書の關説したき一重點でなければならぬ。

この他なほ以上述べたる諸點と關聯し、若くは、比較的關聯薄き事柄にして觸れるべき多くの問題を殘してゐる。例へば、社會科學、この場合、經營經濟學における「本質」觀の理解をめぐつて一對の相排撃しあふかの如き對立があり、また、經營經濟學のもつて乘るべき基底としての社會觀にも言はゞ階級至上主義的社會觀と國民主義的社會觀との對立が擧げられてよく、すべてこれらの多くの諸對立が時に相結び合ひ互に對立しあふことによつて幾多の小對立が派生するかに見える。經濟性概念をめぐるかゝの混沌たる状態も畢竟その產物の一に他ならぬ。



おもふに、經營學的思惟においては、何よりも先づ、人間の意欲——經濟的意欲こそが根源的なモチーフとなる。元よりこのものに對しては無制約ではないことは前にも簡單に述べた通りであり、自然的制約以外になほ社會的諸制約がある。例へば生産力及び、生産社會關係からの制約の如き。が、それとともにまた、それは逆に生産力および生産社會關係に對してもそれぞれ何らかの態度をとらうとすることも經營學的前提からは容認しなければならぬ。生産力も生産における人々の社會關係も經營學的には、必しもつねにともに與へられたるものとのみは見能はない。

全き經濟現象を、經濟實現者の「意志活動」として貫き觀むとする思惟は、言はゞ經營者的思惟である。經營學的思惟はかゝるものをばその地盤的原材料とする。言ふ迄もなく、經營者的思惟なるものは、「目的」「手段」の國に屬するが、經營學的思惟は、かゝる日常的實踐者的 *alltäglichen* な思惟を地盤的素材として、そのものについて「因果化」的な國を構成しやうとする。

ひとびとのうちには、かゝる經營者的思惟が「目的」「手段」の國に屬することの故に、それを單に地盤的原材料とするところの經營經濟學をば直ちに技術學の範疇に押し入れやうとする。併し乍ら、純粹な因果律性を求める自然科學ではないこの學科にありては、その對象一般の特性からして、方法上それに因果化的説明を許すものと考へなければならぬ。かくて經營經濟學における方法が如何になされねばならぬか、はたまた、それと社會經濟學的方法との間に如何なる差異があるべきか、これら



のことがまた本書の重要な一骨子をなす。

一體、經營經濟學のごとき一社會科學がその興起を促されるに至つたのは主として時代の社會的地盤に因るもので、近年における經營學的要求の生起が經濟的生の困厄に由來するといふ考へ方そのものに對しては私も異論が無い。と同時に、かゝる困厄の支配的な擔ひ手が獨占制過程における資本主義的企業家の企業であるといふ世の一部の主張には、問題となれる社會が資本主義的社會であることに徴して私もまた同見ではある。併し乍らさればといつてこの故に經營經濟學における對象的權利をばたゞ譯もなく資本主義的企業に限るといふおほまかな主張に對しては私は遽かに全幅的な左袒を捧げ得ない。蓋し、經營學的思想方法が經濟學的なそれと異なる所以への省察が私において特殊のものあるがために外ならぬからである。經濟學的研究が宇宙的考察であるに對して經營學的研究が顯微鏡的考察であるとする一學者の説明がたとへ不十分な説明であるとしてもその解釋には多少の滋味の餘地を残してゐることがこの際考へられて宜いとおもふ。元より、社會科學的主張をもたうとする經營經濟學が問題とするところの經濟的生とは、社會的生であつて個人的生ではない。しかも、あらゆる種類と階級の個別經濟は社會的過程において社會的關聯を通じて自己を實現するといふことは近代の個別經濟の社會生的特質であるとともに、この際、省みられねばならぬことは經營學的方法の思惟が人間の意欲をモチーフとするといふ斯學にとつての根源的な出發の仕方である。あらゆる個別經濟

の自己實現過程は、社會經濟の發展の流のうちに在り乍らの消極的積極的な意欲的自我實現への抗争化過程である。經濟的生の維持乃至發揚はこの限りからいつてあらゆる種類と形態の個別經濟にとつて彼自身の意欲であり、それが社會的生の擔ひ手の生への意欲である限りにおいて斯學の對象性權利を要求し得る筈である。これ社會經濟學的思想の重視せざるところであり、經營學的研究が顯微鏡的考察であると説かるゝ眞意ではなからうか。

なほ、一言しておきたいことは、以下の本論においては、一般の讀者からみれば、世上の知識的讀者人からは極めて通常にして特に詳述を必要とせざる問題とおもはるゝ點に一見冗長に過ぎるかと思はるゝまでの叙述をせる箇所二、三存する點である。第一章、竝に、第四章のごときにそれを見る。併し乍ら、これらの諸點は、すべてわが國の過去の斯學において何らかの意味で必ず一度は問題となり、現になほ問題として残されたるものであるといふ歴史的理由に本づくものゝみである。本書が過去の斯學に對して一の綜合的批評であるための不可避的な理由に因ることを諒せられたいとおもふ。要するに著者が本書において竊かに期待するところは、かゝる諸對立を綜合的に批判し、自ら是とする經營經濟學本質觀をその一般的内容の素描とともに行ひたいといふ以外には無い。著者の菲才と不注意とが犯したであらう誤謬や獨斷についても、識者の親切なる教が惠まるゝならば無上の光榮であるとともに、もしまた私見の何ほどかゝ世の賛同を得ることもあらば望外の歡びでもある。



本

論



第一篇 經營經濟學の基本概念



## 第一章 經營經濟學の方法總說

### 第一節 經濟的概念としての『經營』もしくは『經營經濟』

經營とは經濟である。

然るにひとびとは、屢々、經營と對立せしめて、經濟といふ。然らば經營とは、經濟以外の何ものかであらうか。曰く否。

先づ第一に、經營(Betrieb)とは、經濟の經營(Wirtschaftsbetrieb)である。成程、ひとは或は宗教の經營といひ、學校の經營といひ、また或は國家の經營といふ。併しまた經濟の經營とは、日常彼の最もよく口にするところである。われ／＼の手懸りは、彼のいふこの最後のもの、すなはち、經濟の經營といふ限りのものについて求めらるべきであり、彼の日常的思惟においてすでに常識的に限定されたもの、すなはち、經濟の經營といふことがわれ／＼の學問の對象原材となり來る。

然るに第二に、經濟の經營とは經濟そのもの以外の何ものかであらうか。およそ經營活動とは、經濟活動(wirtschaftliche Tätigkeit)乃至經濟行爲(wirtschaftlicher Akt)を意味してゐる。<sup>1)</sup>而して、經濟行爲乃至經濟活動の全體が經濟であると説かるれる如く、<sup>2)</sup>經營活動の全體は、また同様の理由に

1) 經營活動が何故經濟活動であるかは後段において論證する。  
2) 高田博士 經濟學新稿 第一卷 一頁。  
(但し博士は全體なる言葉を使用されず)



よつて經營と稱し得るであらうし、また上述の如く經營活動がすでに經濟活動であることを許す限り、經營もまた經濟である他はない。

然るに、ひとびとは何故に、經營と對立せしめて經濟といふか。蓋し、すでに述べたる如く、經營活動乃至經濟活動の全體たる經濟は、言はゞ一箇の漠然たる全體であるが、このものは同時にまた經濟に於ける二種の異質的な全體性として考へ得らるゝからである。一箇の漠然たる全體としての經濟は經濟内的には實は無態度的なる見方である。かゝる一箇の漠然たる經濟は、いづれか一の有態度的な見方に轉じてこれを觀るときそこに甫めて相互に異なる稍判然とした二箇の經濟の世界を展開する。一は意志層として觀ぜられたる經濟の世界であり、他は(社會的)自然層として觀られた經濟の世界である。前者は、統一的な目的意志を起動力として經濟を實現せやうとする經濟者自體の經濟活動すなはち經營活動の統一的な全體の世界であり、後者は、かゝる經濟者の經濟活動が社會的に相結び相繼れあふによつておのづからそこに現出する諸經濟活動間における自然生成的な一箇の世界である。例へば、商人は自己が望むがまゝの價格にて賣らむと欲しつゝも、おのづから仍つて定まるべき社會的價格に近く賣らざるを得ないのは、かゝる世界の秩序の存すために他ならぬ。通俗な言葉の使用が許さるゝならば、經濟自然層の世界とは言はゞ經濟における儘ならぬ世界であるに對照して、可及的にこれを儘ならしめ、やうとする、經濟者の統一する限りの經濟の世界が經濟意志層の世界に相當する。元より、

經濟の實現者は經濟自然層の世界の外に立てるものではなく、實はかゝる自然層そのものゝ内部に身を潜めつゝ實はその内部から自己を可及的に合目的に實現しやうとするのが彼の世界の特殊なる性格である。

以上とほぼ同意味の事柄を、高田博士はその「經濟學新講」第一卷において巧妙な學問的語法をもつて述べられてゐるが、いま博士の用語を多少變更附言して述べれば、すなはち、およそ經營活動一經濟行爲または經濟活動一は、つねに特定の主體によつて營まれてゐるが、交通經濟社會に於て、經濟行爲の營まれることに於て生起する秩序には、二つの態容がある。一は、數多の經濟行爲は、特定の主體の經濟目的を中心として、その目的に對する手段たる關係で秩序立てられてゐる。従つて、それら數多の經濟行爲は、實はその主體の經濟行爲として聯關的秩序の總體をなしてゐる。かやうに、一の經濟主體によつて營まれる經濟、すなはち、主體の意志活動たる經濟行爲の聯關的總體としての經濟は、これを個別經濟(Einzelwirtschaft)と云ふ。二は、多數經濟主體の營む諸經濟行爲が、各主體の意志目的を實現せむためにその目的を中心として、相互に交渉競合する關係から、そこに自然に秩序を成立たしてゐる。かやうに、諸經濟行爲が諸經濟主體間に秩序を爲せる時、この秩序を形成するそれら經濟行爲の聯關的總體もまた一の經濟である。しかしながら、この第二の經濟は、ある特定の經濟主體を中心とするものではなく、數多の主體を包括し、多數の個別經濟を實は部分(部分經濟)



としてもつが故に、この種の經濟は社會經濟(Sozialökonomie)または綜合經濟(Gesamtwirtschaft)と云はれる。

右の如く、綜合經濟または社會經濟は、特定の主體に即せざる經濟であり、それにおける秩序は、目的意志の競合交通關係から自然的に生起することを特徴とする。個別經濟は、これと異つて、飽くまで特定の主體に即したる經濟であつて、主體の經濟活動として統一的に營まれるところの經濟である。すなはち、この種の經濟は主體の經濟目的を實現せむとする意志に本いて營まれるが故に、これを經營經濟(Betriebswirtschaft)といふのである。

さて、以上述べたところによつて、經營と對照してひとびとが經濟と呼ぶものは實は社會經濟(若くは綜合經濟)であつて、これに對照せしめられた經營とは實は經營經濟(若くは個別經濟)なることがいまや明にせられ得たかと考へる。經營もまた經濟であるが、社會經濟と經營經濟とは二箇の異なる性質の經濟である。と同時にわれわれは、ひとが經營と對照せしめて經濟と呼ぶ時には、嚴密には、社會經濟と呼ばねばならぬし、經營もまた嚴密には經營經濟と呼ばれることが望ましいこととなる。この意味から、ひととは經濟學といふよりは社會經濟學と呼ぶことが一層誤解なき用語となり、同様に、經營學と呼ぶよりか經營經濟學と稱すべきをより適當とも言へやうとおもはれるが、用語は誤解を惹き起さざる限り、いづれにても宜い譯である。

たゞ、こゝで注意したき事柄は、われわれが或は社會經濟といひ、經營經濟といふ時には、かの一箇の漠然たる全體としての經濟すなはち經濟一般に對して、すでに各々一定の態度のもとに經濟が考へられてゐるといふ點である。社會經濟といふ時には經營經濟にあらざる、同様に、經營經濟といふ時それは社會經濟にあらざる意味において言はれてゐるといふ點にすでに一定の見地若くは態度が經濟一般に對して取られてゐるのであつて、この限りから、社會經濟の觀念中に經營經濟を考へたり、經營經濟の觀念中に社會經濟を思ふといふことは許されないこととなる。たゞ、そこには、社會經濟の構成部分として部分經濟または單位經濟があり、或は、經營經濟の生活地盤としての全體經濟または綜合經濟が存するのみとなる。

註 この際私は、ひとがたゞ單に「經營」と言ふとき、それが經營經濟の意において言はれてゐるのであるか、それともまた、社會經濟の部分として「經營」を問題にしてゐるのか不明である場合があり得るから、前述の如く、誤解を避けるために前者の場合「經營經濟」と言ふ方が適當のやうにおもふ、と同時に、なほ「經營」なる語は、個々の經營活動乃至經營方策の意にもひとびとは使用するから、旁々上のやうにおもふ。經營なる語は、右の如き經營活動、經營方策の外に、屢々經營經濟の各部分活動單位、若くは、經營經濟若くはその各部分活動單位の設備、規模、等々の意にも用ひらるゝことがあるが、すべてこれらは、本文に述べたる意味からの派生的用法にすぎない。

要之、經營經濟および、その略稱名辭としての經營とは、經濟的日常概念—または觀念—として、



意志層として觀られたる經濟、すなはち、統一的目的意志の實現活動の即主體的全體たる經濟である。この經濟的概念(觀念)には、必然的に經營經濟者の態度乃至思惟方法が存し、かゝる態度乃至思惟方法がまた學問的方法の仕方で純化せられてそこに經營(經濟)學的思惟方法となる。そこでかゝる經營(經濟)學的思惟方法なるものは然らば如何なるものであるかについて述べねばならぬが、それに先立つて私は經營經濟學の科學的性質と地位とを一應明にしておくことが順序上必要と考へる。

## 第二節 經營經濟學の科學上の地位

理論的經營經濟學の何たるやを明にするためには、先づ、その科學上の地位を一通り極めて簡単に解明しておかなければならぬ。

およそ科學は、先づ、その對象の區別に従ふて、二に分れる。一は文化科學(Kulturwissenschaft)乃至社會科學(Sozialwissenschaft)であり、二は自然科學(Naturwissenschaft)である。文化科學乃至社會科學の對象が文化的實在(Kulturwirklichkeit)乃至社會的實在(soziale Wirklichkeit)であるに對し、自然科學の對象は自然的實在(Naturwirklichkeit)であると言はれてゐる。文化的實在乃至社會的實在とは、人間の主觀的價值乃至思念によつて擔はれてゐるところの實在であり、自然的實在とは、これに反してかゝる價值若くは思念から斷ちきれた自然そのものゝ自體性としての實在である。

(但し、かゝる價值の客觀的妥當性奈何の問題は困難な問題であり、私はそれは歴史的社會的な何らかの公準に照應してのみ解決さるべきものと考ふるがかゝる問題はこゝでは取上げずにおく)。然るに、次に、これら夫々の科學は、またそれにおける認識目的(Erkennniszweck)の差異に應じて、すなはち、目的が對象の個性の認識にあるか法則(理論)の認識にあるかに仍つて、方法上、個性記述的方法(ideographic Methode)に據るか、或は、法則學的方法(nomothetisches Methode)に據るかに従つて、歴史的科學であるか理論的(法則的)科學であるかの區別を生ずる。

註 およそ文化の意義乃至興味はその特殊の一回的なるところに存すると言はれてゐる。<sup>1)</sup>併し乍ら、自然の生成起滅の個性的認識がまた學問上から見て全く意義なく興味なしとはせられないであらうとともに、かゝる認識が不可能なる筈もないであらう。<sup>2)</sup>稀有の自然現象の特殊の因果關係の認識に興味を繋ぐことは屢々行はるゝところである。

然るにまた、個別科學(Einzelwissenschaft)が個別科學たり得るのは、夫々或は文化的實在乃至社會的實在としての、或は自然的實在としての範疇における、對象の區別に本くものである。いま文化科學を問題とする限り、文化的實在としての政治、宗教、道德、法律、經濟、等々、それら實在の範疇領域の異質性に應じて、それぞれを對象とする諸個別的な文化科學が存する如きこの類ひである。

(且、これら夫々の個別的な文化科學がまた、かの二つの方法の差異に應じて、歴史的個別的科學と理論的個別的科學とが個別科學のうちにおいてそれぞれ成立し得る筈である。)

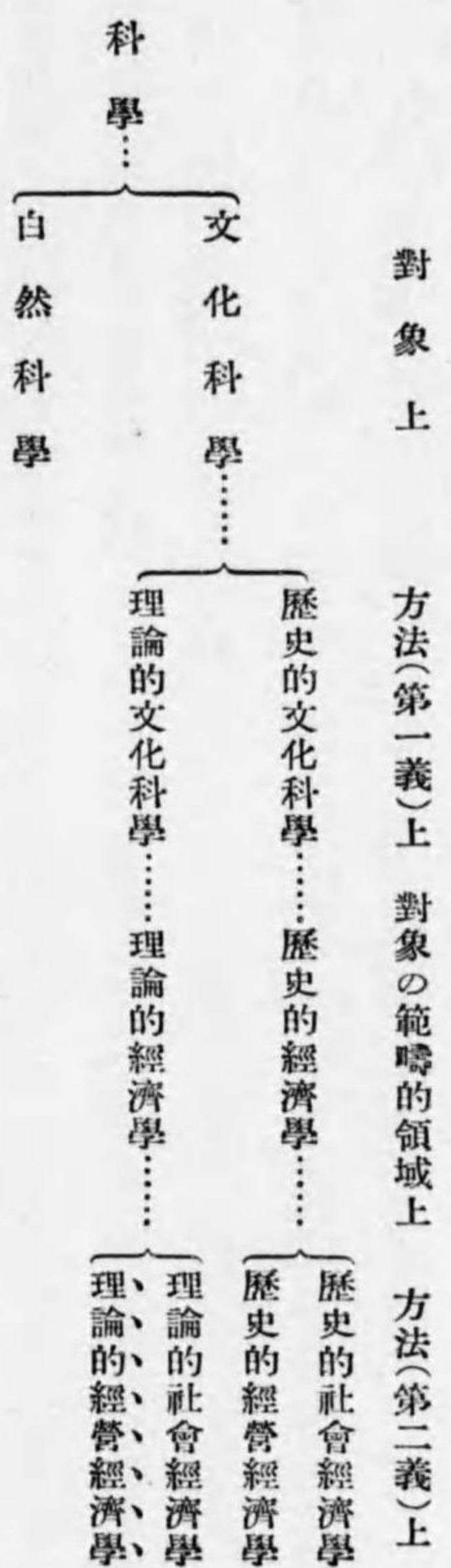
さらには、一の個別科學、例へば經濟學(Wirtschaftswissenschaft)なるものは、これまたその内部

1) H. Rickert: Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, 1921, S. 16-18, 89-90, 124  
2) Vgl. Rickert: Ibid. S. 18, 19. Rickert: Die Grenzen, 1921, S. 22



においての方法上の區別に應じて、二箇の經濟學を成立せしめ得ないとは言ひ得ない。例へば、社會經濟學(Sozialökonomie)に對照せらるゝ經營經濟學(Betriebswirtschaftslehre)の區別の如きがそれである。この際、なほ曩の二つの方法、すなはち、歴史的方法か理論的方法かの相異がそれぞれ對應する。或は歴史的社會經濟學(historische Sozialökonomie)か理論的社會經濟學(theoretische Sozialökonomie)であり、或は歴史的經營經濟學(historische Betriebswirtschaftslehre)か理論的經營經濟學(theoretische Betriebswirtschaftslehre)である。

註 上に述べたる限りで言へば、この際、方法は二箇の意義においてそれぞれ解せられてゐる。先づ第一のものとして方法は、認識目的上、個性の認識方法か普遍性(法則性)の認識方法かの區別に應ずるものとして解せられた。第二の意義においてそれはまた、特殊の認識對象を求め出だす方法として、實は思惟方法(Denkweise od. Betrachtungsweise)として解釋されたのである。



而して、元より、われわれが對象の性質上文化科學と自然科學とを分離する理由は、たゞ單に對象

の性質上兩者が異るといふだけの理由から來てゐるのではなく、より重大なる理由、とりわけて、わが經營經濟學にとつて一層重大なる理由があるからである。それは、現象をその動機(思念の目的若くは價値の理念)に歸せしめて解明し得らるゝといふ特殊の性質を文化的實在そのものうちに認め得るからであるが、このことはいづれ後に稍詳細に述べるところである。

かくて、兎も角も、著者が本書において取扱ふとするものゝ地位がかかる最後のもの、すなはち、理論的經營經濟學にあることは大體以上で明になし得たやうにおもはれる。

註 文化科學乃至社會科學と自然科學との根本的相異は、もつばら對象の相異に本くものであつて、兩箇の科學の別が方法から來たものでないことは、前に略述した如くである。科學はそれ自身で根基的に文化科學的對象とか自然科學的對象とかを造り出すことは出來ぬ。例へば、文化科學の對象たる價値關係的實在、若くは、かかる實在の内實たる價値そのものは、科學そのものによつて生み出されたものではないのであつて、科學はたゞかくの如きものを認知するのみである。元より、何がいつ人間の價値によつて擔はれるかは一に歴史の偶然的事由に本くし、のみならず、價値の文化的意義はその個々性によりて耀くことさえも否めないことではあるが、この文化の歴史的现象なることが直に方法を決定するものではない。されば對象の相異が方法を異にすることはあり得ても、方法——この際それは個別化的方法か普遍化方法かといふ前掲第一義の意味である——が對象を生み出すものではあり得ない。兩科學に對象の性質上の差異がありとすれば、それは一に科學そのものとは一應別箇な人間の日常的態度の生み出すところの相異に本くと言はねばならぬ。かの、方法から——詳しく言つて、個別化的概念構成の方法か普遍化的概念構成の方法から——文化科學



と自然科学とを分たうとするリツカートの立場は、あまりにも強く、且、燥急に、人間の創造的内容——文化價值——の耀しきに心を惹き付けられ過ぎたものではあるまいか。もしも、カント的立場があまりにも慌しく普遍法則的、自然に突き進むのだと言はれ得るならば、同様に、リツカートの「自然」と「精神」との仕方の質料的對立による科學分類の論理的缺陷に驅られて、あまりに性急に方法から「文化科學」を特異化し過ぎたとも稱し得ないでもなからうかとおもはれる。(リツカートの「中間領域」を看よ)。

かやうにして、文化科學乃至社會科學を自然科学から分たしむるものはその方法ではなく、もつばら、對象の特異性にある。文化科學乃至社會科學の對象の特異性なるものは、實在が人間の價值に關はらしめて思はれたものとして在るところに存してゐる。自然科学の對象が價值の關はりから脱離して在ると措定せられたものに對して、このもの、特質は價值關係的實在たるの點にある。

文化 (Kultur) とは、人間によつ主觀的に思念された意味 (subjektiv gemeinter Sinn) を擔ぐる實在である。文化實在 (Kulturwirklichkeit) を發生的に、動機づけ (motivieren) のは、この思念 (Meinung) 乃至意欲 (Wollen) であり、(思念乃至意欲は當然に價值を含む)、かゝる思念乃至意欲の意向的に發したものが、すなはち、人間の行爲である。かくて先づ人間の行爲なるものは、かゝる動機づけられたものである。思念乃至意欲の結果としての實在——文化實在——であるが、なほ、かゝる思念の、從つて行爲の所産である客觀的實在もまた、文化實在である。例へば、一、行爲の所産としてのもの (有形無形の財)、二、人間によつて思念の意味を擔はされたところの、從つて意味の擔負者として在るところの物質 (自然物)、三、個々の人間を素材として、その相互の交渉づきにおいてつくり上げられたる一定の社會的組織、四、社會的意識形態の如き一定の觀念形態などがこれに屬する。

- 1) Rickert, Kulturwissenschaft u. Naturwissenschaft, 4. u. 5. Aufl. 1921, S. 6
- 2) Rickert: Ibid. S. 118 ff.
- 3) 高田博士 經濟學方法論 (經濟學全集 第五卷) 四一六頁參照。

たゞこの際、思念の從つて行爲の所産物たる有形財と意味擔負者としての物質 (自然物) については若干説明しておくことが適當であらう。

元來、價值關係的實在 (文化) と沒價值の實在 (自然) との區別は「文化的所産」と「自然的生成物」との區別と相蔽ふものではない。「文化的所産物」は人間の所産であり「自然的生成物」は然らざるものではあるが、自然的生成物は必しも沒價值の實在すなはち「自然」たるとは限らぬと、もに、文化的所産もまた恒に必しも價值關係的實在「文化」たるとは見得ない。何故なら、それが生成的若くは發生的 (genetisch) に人間の所産なると否とに拘らず、所與 (das Gegebene) としての實在が現に、人間の價值によつておもはれたるものなるか否かによつて、すなはち、人間が實在と交渉する現實的動機が價值に關はれる (wertbeziehen) か否かによつて分れるからである。ものが價值に關はれる (wertbeziehen) こと、もの、價值を評價する (werturteilen) こと、は全く異なる事柄である。例へば、天然に生育する一の樹木もそれが人間の價值によつて思はれたるものなる以上文化領域のものとなる。さればわれ／＼において「文化」とは、人間の價值的所産と言ふよりは、價值によつて思はれたる實在である。たゞこの際人間の所産は生成的には價值によつて思はれたるものなることから價值關係的實在たることを通常とするに過ぎない。例へば、貨幣は生成的には文化的所産であり、貨幣たる限りで價值關係的實在たることを通常とはするが、それから思はれたる意味を免れしめることによつて單なる自然的物質的素材として在り得ないと考へ得ないことはない。「自然事象は價值との結び付から免れたもの」、「それ故に人が或る文化對象から悉くの價值を解き放つならば、そのためにそれもまた單なる自然となる。かゝる價值への關係づき (Beziehung auf Werte) の存否によつて吾々は二種の對象を區別し得る。岐るゝところは、たゞそれに附着せる價值を度外視することのためにすべての文化事象もまた……自然として見られねばならない」<sup>5)</sup>のである。

- 4) Rickert: Ibid. S. 100.
- 5) Ricrert: Ibid. S. 22.



かやうにして「文化」とは、單なる實在ではなくて、實在の意味擔負的なものであり、實在の意味性(Sinn der Wirklichkeit)なるところにその本質があり、これに對して「自然」とは單なる實在の存在性(Sein der Wirklichkeit)なるところにその本質があると言はなければならぬ。しかもひとびとは、これを文化と言ひ自然と呼ぶと否とに拘らず、それらのものをその日常的經驗の世界においてすでに措定しており、かゝる實在の對象的に見られたものが經驗對象「文化」であり「自然」である。經驗對象「文化」實在とは、かくて日常的經驗的に、何らかの思念——價值——によつて關はらしめられた實在的對象であり、素材的にてはあ  
るが、文化實在一般とはかゝる個々の文化實在が周邊的にその總容において眺められたものである。

### 第三節 經營經濟學の認識對象

#### 一 經驗對象(前科學的對象)と認識對象(科學的對象)

一般に科學は文化科學乃至社會科學たると自然科學たるとに關せず、その對象たるべき經驗的實在を認識するところに目的がある。對象(Object, Gegenstand)とは、一定の經驗的實在——先驗的實在が對象たり得ぬといふのではない、われ／＼はたゞ本書において經驗的實在を問題とするのみであるから——が主體からみて客觀的、對象的(Gegenständlich)に言はれたものであつて、この場合かゝる實在はかくて對象となる。

6) Gottl: Wirtschaft als Leben, S. 540 ff.

對象はこれを分ちて、經驗對象(Erfahrungsobjekt)と認識對象(Erkennnisobjekt)となすことが出来る。(アモンは經驗對象と認識對象とを區別する。が、これらのものに關するアモンの見解には異論が生じ得ると思はれるから、われ／＼は今の場合、たゞ單なる言葉の上においてアモンの用語を使用するに止める。)

經驗對象とは單に日常的經驗的に措定せられた對象であり、すなはち、それはわれ／＼の常識的世界において、日常的思惟(alltägliches Denken)によつて或るものとして措定せられたる經驗的實在であつて、如何なる意味においてもそれはなほいまだ前科學的(vorwissenschaftlich)なる性質の對象である。然るに科學は、かゝる日常性(Alltäglichkeit)のものであるところ經驗對象を原材的對象として、これからその科學に特有なる科學的素材たるところの認識對象を造り上げることその目的をもつ。特定の經驗對象はそれが科學的思惟の加工のもとに認識過程に入り來るや、そこで兎も角も先づそれは一定の科學の素材すなはち認識對象となるのである。「初學者によつて誤解されてはならぬことは、認識對象はさればといつて認識對象たることによつて非經驗的對象となるといふ意味ではない。認識對象もまた經驗的な實在であるが、それは科學的思惟反省が加はりたるものなる限りで、單なる經驗對象ではないとの謂ひである。それ故に、正確には、經驗對象に代ふるに前科學的對象(vorwissenschaftliches Objekt)と、認識對象に代ふるに科學的對象(wissenschaftliches Objekt)と呼ぶことが適當であると云ふべし。』

註 私は科學の原材(Materie der Wissenschaft)と科學の素材(Stoff der Wissenschaft)とを區別して使用する。

1) 例へば A. Lisowsky, Die Betriebswirtschaftslehre im System der Wissenschaften (Zeitschrift für Betriebswirtschaft, Jg. VI, 1929 S. 668)

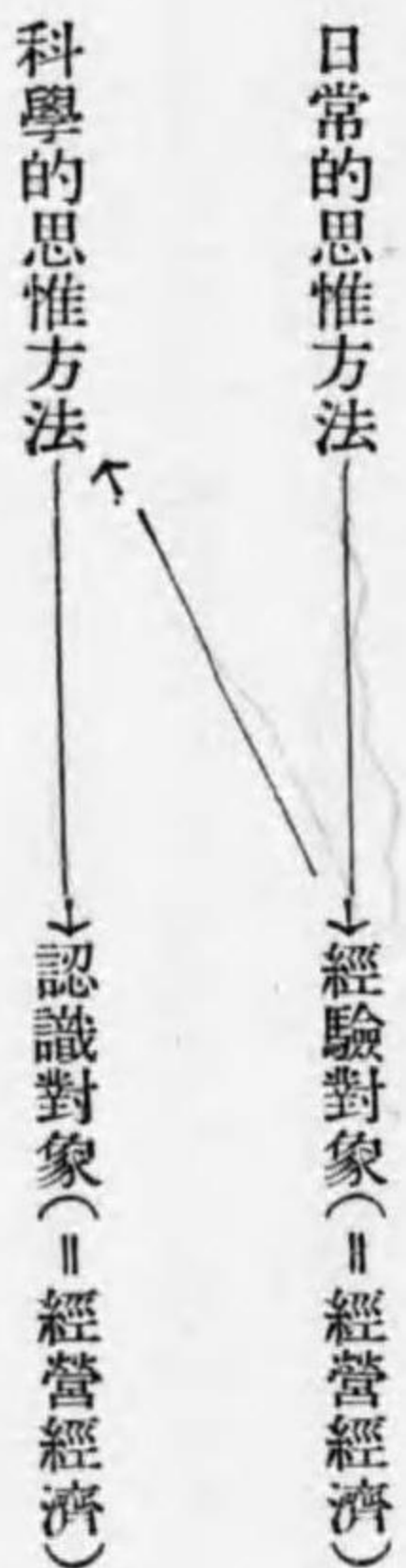


學者は Stoff der Wissenschaft といふ命辭を用ゐるが、例へば、馬場教授的意義における Stoff der Wissenschaft とは、ホットルの意義における Stoff der Wissenschaft とは明に異なるものである。私は馬場氏の意義における Stoff der Wissenschaft を科學の素材 (Materie der Wissenschaft) と呼び、ホットルの意義における Stoff der Wissenschaft を科學の素材 (Stoff der Wissenschaft) と呼ばうと欲する。蓋し、前者の意義における Stoff der Wissenschaft とは、經驗對象的性質のものであり、從つて、a-logisch な性質のものであるが、ホットルの意義における Stoff der Wissenschaft とは認識對象的性質のものであり、それ故に logisch な性質のものであるからである。(ホットルの意義における科學の素材 Stoff der Wissenschaft の意義の何であるかは後説にゆづる。)

特定の科學の認識對象となるべき何らかの特定の實在(對象)は、これをその科學の素材 (Stoff der Wissenschaft) と云ふ。文化科學は文化的實在といふ經驗對象をその原材料とし、個別科學として社會經濟學は社會經濟的實在乃至社會經濟なる經驗對象をその原材料とし、經濟學の新興一部門たる經營經濟學は、經營經濟なる經驗對象をその原材料として、それぞれその科學の素材たるべき認識對象を構成する。

如何なる經驗對象が特定の科學の原材料となるかは、その經驗對象自體の特質に仍つて定まる。例へば、經營經濟學の原材料たるべき經驗對象は、經營經濟 (Betriebswirtschaft) としてわれわれの日常的思惟によつて指定せられたところのものである。かくて例へば、經營經濟學の原材料たるものは、經營經濟

濟なる經驗對象であるが、かゝる經驗對象は、それが認識對象たるに際しては、先づ、かの第二義の方法、すなはち、科學的思惟方法 (wissenschaftliches Denkweise od. Betrachtungsweise) によつて、飽くまで認識對象としての經營經濟として把握さるべきであるとともに、同時にその際、それはかの第一義の方法に本いて、その認識目的の如何により、個性の認識に向ふべき歴史的經營經濟學の認識對象となるか、或は、理論的經營經濟學の認識對象となるかのいづれかである。



## 二 經驗對象生成過程の日常性的性質

然らば、次に來るべき問題は、何らかの經驗乃至實在が、如何なる過程において、それが特定の科學の原材料とせらるゝに適はしきやうな特殊の經驗乃至實在として、すなはち、經驗對象としてわれわれの日常的思惟によつて指定せられるか。このことは比較的重大なる事柄であるとともに、また異論の生ずるところである。



アモンは經驗對象 Erfahrungsojekt と認識對象 Erkenntnisobjekt との區別を樹て、カレルもまたこのアモンの區別に相應じて、事物的對象 der dingartige Gegenstand と側面的對象 der seitenartige Gegenstand とを別ちてゐる。<sup>2)</sup>

註 馬場敬治教授は、アモンの所説に従つて經驗對象と認識對象との區別を説かれてゐる。<sup>3)</sup> 私はアモン教授の説述に多少の異見をもつ故に特に以下の記述を爲す必要を認めたとである。

アモンによれば實在 Wirklichkeit 若くは經驗世界 Erfahrungswelt なるものは、その全き多様性と複雑性に於て吾々に直接に與へられ經驗せられるものではあるけれども、しかもその中に於てなほ經驗單位乃至經驗客體 Erfahrungsgegenstände なるものは多様の群に分れて居り、それらの群はそれら相互に或る獨立性に於て引離して吾々に經驗し得られる。かくてこの實在(經驗世界)、換言して、全經驗原材 gesamtes Erfahrungsmaterial から經驗的に獨立化せられたる一單位的なる經驗合成體 Erfahrungskomplex 乃至經驗群は、これを或る科學の「領域」Gebiet 若くは「對象」Objekt——經驗對象——と考へられてゐる。<sup>4)</sup>

ところでこゝでわれわれの注意すべきことは、アモンに於ては、既にかゝる一科學の「領域」乃至「對象」となる經驗對象なるものが、第一に、日常的經驗に於て直接に與へられるものであり、少くとも何ら論理的・概念的に logisch-begrifflich 思惟の勞作が加はつてゐないものであり、第二に、

より大切な點であるが、氏の云ふところの多様中に於ける一種の群 Gruppe を生成する諸經驗單位即ち諸經驗客體 Erfahrungseinheiten oder -gegenständen の一々は、それが最早それら本籍的に或る特定の群に屬しつゝ、かくてかゝる一々の經驗單位即ち經驗客體が合成的に或る一特定の經驗群を形造つてゐることこれである。換言すれば、或る一の直接に與へられた具體的實在は、それが經驗的にすでに何らかの一特定の經驗合成體に、従つて一の科學の經驗對象に専らに屬してしまつて居り、例へば、吾々の直接的な經驗に、「鐵」が與へられる時、その時「鐵」はすでに經驗的に或る一特定の經驗合成體即ち經驗對象に専らに屬してゐなければならぬ筈であり、従つてその他の經驗對象には屬してをてはならぬ筈である、と一應は解釋せざるを得ぬ。

かくて兎も角もアモンに於て一應吾々は、實在たる經驗世界としての全經驗原材と經驗對象とは異なるものであり、一の經驗單位は直接經驗的に特定の經驗對象に專屬するものなることを觀たのであるが、然らばかゝる經驗對象と認識對象すなはち科學的對象とはそもゝ如何なる關係に立つか、アモンに於けるその點を見究めることによつて氏が所謂經驗對象なるものを特に措定した價值が問はれることとなるのである。

元より、現在までのところ吾々の論議は、以上述べたところで明かなる如く、未だ科學的對象、アモンに於ける認識對象の範圍にまで進むでは居らぬ。それは未だ vorwissenschaftlich な a-logisch な

4) Amonn, a. a. O. S. 21

5) Amonn, Wirtschaft, Wirtschaftswissenschaft und „Die drei Nationalökonomien“ (Schmollers Jahrbuch, 54. Jg., 1. Halbband, S. 198). 馬場敬治教授、經營學方法論、七二頁參照。

1) Amonn, Objekt und Grundbegriffe der theoretischen Nationalökonomie, 2. Aufl. 1927, S. 21ff.  
2) Erich Carell, Wirtschaftswissenschaft als Kulturwissenschaft, 1931, S. 30-31  
3) 馬場敬治教授、經營學方法論、第二章。同教授、經營學の基礎的諸問題附録第二節參照。



領域に止つてゐる。かゝる日常的な直接經驗的な領域にあり乍ら如何にして、經濟乃至經濟內的なるものが理解せらるゝのであるかの點を問題にしてゐるのである。そこで吾々はこの領域内にあつて、實在たる全經驗原材の中から、經濟生活乃至經濟、或は經濟內的なるものを前科學的的日常的に理解し得るかの點に今少しく立入つてみようと思ふ。

アモンに就て考へるに、先づ氏によれば、實在一般たる全經驗原材とは異なる、而してこれから獨立した經驗對象とは、それは一の科學の「領域」乃至「對象」であつたのである。されば吾々は、前に於て一應、或る特定の經驗的存在はそれが既に一の科學の「領域」乃至「對象」に専らに屬せしめられてゐると解さねばならなかつたのであつた。

然るにアモンに於ては、實は、この經驗對象は決してさうであるものではないのであつて、經驗對象「鐵」は實に氏に於て物理學の對象ともなり得、また化學の、鑛物學の、或はまた國民經濟學の對象ともなり得るものなのであつて、この際「鐵」は全き同一の經驗對象であり乍ら、これからそれぞれ異なる一定の特質を分離し獨立化して科學的に研究するといふ人間の悟性活動の齎らす抽象形象となるのである。<sup>6)</sup> してみると經驗對象なるものはこゝに於て決して或る一の科學の「領域」若しくは「對象」ではないことゝなつて、それは少くとも多くの科學の「領域」若しくは「對象」に屬し得るのであると云はなければならぬ。

6) Amonn, Ibid. S. 23, 24

果して然らば、アモンに於て實在すなはち經驗世界が經驗單位若しくは經驗客體の多くの群に分れ、それらの群が相互に或る獨立性をもつて經驗され、全經驗原材の中の一單位的なかゝる獨立的な經驗合體が一の科學の「領域」乃至「對象」であるとは一體何を意味するのであるか。この經驗單位若しくは經驗客體の群とは何を指して云ふのであるか。

かくて吾々がアモンに問はねばならぬことは、氏に於て實在(經驗世界)たる全經驗原材と經驗對象とは如何に異なるかと云ふことである。而してこの點に就ての氏の意見は少くとも明示的ではないが、吾々が氏の説述から解するところを端的に述べるならば、氏は實在(經驗世界)たる全經驗原材なるものは、それが全經驗原材たるの故に實に無限の多様性と複雑性に於て在るのみならず、その故にそれは吾々に直接的、觀照的に對立せず、たゞ偉大なる全體的な表象、された具體物、*das vorgestellte Konkrete* として、氏の所謂内面的整齊性と規則性 *innere Ordnung und Regelmässigkeit*<sup>8)</sup> にも拘らず、飽くまで全體的表象の裡にたゞ無態度的 *stellungslosig* に眺められるだけである。然るにこれに對して、氏の謂ふ經驗對象の内部に押入れらるべき經驗なるものは、吾々に對して具體的に對象とも云はるべき經驗であつて、その一々は一回宛的ではあるが具體的に現はれ、従つて吾々がこれに對して現實に何らか對象的 *gegenständlich* に對するが如きものではなからうか。たゞ、氏が經驗單位乃至經驗客體の群と言へること、竝に、一の科學の「領域」乃至「對象」と言へることは、如何にも解し難きことな

7) Amonn, Ibid. S. 21

8) Amonn, Ibid. S. 21



れども、氏が經驗對象をもつて何らか直接的なるものと考へべきことは、氏に於て經驗對象はその性質上個別的主觀的のものであり可變化的非回歸的なりとせられてゐる點はこの際寧ろ重く視らるべきかと思はれる。

かやうにして、アモンにあつて經驗對象は、一方に於ては、その特定の一個に就てみても、それが群を爲すことによつて合成體となつて一の科學の「領域」乃至「對象」に屬しつゝそれが抽象によつて尙且數多の科學の認識對象となるのであり、同時に他方に於て、全經驗原材たる經驗世界からも異なるものであることとなる結果、それが經驗主體としての吾々に直接的な對立の關係のもとに於ける言葉の通りに於て對象たる經驗と解する外なきが如くである。もしそうでもないとするれば實在（經驗世界）たる全經驗原材と經驗對象とは畢竟性質上同一物に歸することを承認せなければならぬ。

然るに、もし經驗世界と經驗對象とが殆んど分ち難き同一物であるとしても、はたまた、前述せる如く前者が漠然たる全表象世界たるに對して後者がその直接經驗的な現實知覺に於ける吾々により直接的具現的なものとして、その孰れを取るとしても、アモンに於ける經驗對象とは、少くとも科學するもの、*allfällich*な領域に於ける手懸りとなる上で重要な意義を擔へる概念と云ふことは出来ないであらう。何故ならば第一の解釋を取れば經驗對象はそれ自身として獨特の意義を有し得ないし、第二の解釋を取るとしても吾々は科學するに際して恒に何らかの方法で自らにより直接的な體驗を原材

9) Amonn, Ibid. S. 21, 22

とするのであつて具體的な表象から遠ざかれる間接的想像的な表象をより多く重大な手懸りとなすものでないからである。

こゝで吾々は、始めてアモンに對して爲されたリゾウスキーの反問を省みることに興味をそゝられる。リゾウスキーはアモンが一個別的經驗對象「鐵」を引出すことによつて始めて直に一認識對象「經濟的存在」「鐵」を發見したことを不思議がり、一體「立場の異なるに従つて異種の科學の對象となり得る經驗對象」「經濟」Erfahrungsobjekt, "Wirtschaft"とは如何なるものであるか、否、全經驗對象「經濟」das Gesamterfahrungsobjekt, "Wirtschaft"とは何であるか、若し人が次々に例を取つて行つて、經驗的には完全に把握し得ない經驗對象「經濟」の概念を少くとも理論的に打樹てやうとして、果して一の全經驗對象「經濟」に到達するのか、またそのやうな全經驗對象「經濟」と竝んで同時にほ他の非經濟的な經驗對象なるものが存在するのであるか。」と問ふ。<sup>10)</sup>

けれども吾々をもつて觀ればリゾウスキーが個別的經驗對象からのみ經濟を説くに止まるアモンの方法を非難することは勿論可であるが、併し乍らアモンに於ては經驗對象「經濟」なるものは始めから全く發見されないのではないか。このことは、アモンが「一の特種獨立科學を特徴づける對象は現實的具體的な「經驗對象」ではなくして、原理上非現實的概念的な「認識對象」である」としてゐることから明であらう。<sup>11)</sup>こゝに於て吾々は現實的具體的な經驗對象「鐵」も實はそれが直に認識對象と

10) A. Lisowsky, Die Betriebswirtschaftslehre im System der Wissenschaften (Zeitschrift für Betriebswirtschaft, Jg. VI, 1929 S. 668)

11) Amonn, Ibid. S. 31



して把握され得る限りに於てのみアモンに於て問題であり、従つて、經驗對象それ自體に於ては「經濟」なるものは始めから問題とはなつてゐないのである。であるから全經驗對象「經濟」なるものゝ把握され得やう筈があり得ないのである。吾々がアモンの經驗對象 Erfahrungsojekt がその事々しき措置にも拘らず生産的な意義を持たないと解した理由もこゝに存する。

次にわれわれは、アモンと類似的主張の故に一應簡単にカレルの見解について述べておきたいとおもふ。

カレルに於ても吾々は、氏によつて認識對象 Erkenntnisobjekt と等置されたる側面的對象 der seitenerartige Gegenstand に對立するものとして、同じく經驗對象 Erfahrungsojekt に等置されたる事物的對象 der dingartige Gegenstand を見る。<sup>12)</sup> 氏に於て事物的對象とは、ヘッヘルに従ふて、相對的に獨立なる對象であつて、それは、常に日常生活若くは科學的思惟に於て事物 Dinge として觀らるべき空間的限定を受けたる具體物に止まらず、なほ廣く相對的獨立性をもつと考へられる總ゆる對象を意味して居り、例へば植物界 Pflanzenwelt、經濟生活 Wirtschaftsleben とか云へるものから、その他一般に事物として考へられるものは、かゝる相對的獨立性を有する限りに於てこれに屬すと考へられて居る。<sup>14)</sup> 一般植物は土壤、空氣、熱等の諸對象から全く獨立してそれ自身でその生存を保ち得ないがそれにも拘らず植物界なるものはこれらの諸對象から相對的に獨立した存在として、それはそれ

12) Carell, Ibid. S. 30

13) Vgl. Erich Becher, Geisteswissenschaften, S. 8ff. u. S. 18ff. (Carell, a. a. O. S. 9, Anm.)

14) Carell, Ibid. S. 29-31

自體決して土壤、空氣、熱等の何らかの側面ではないのである。即ち、事物的對象の有つ非獨立性 Abhängigkeit、従つてその反對性たる獨立性は、側面的對象のそれとは本質的に異つたところのものであると云ひ得る。氏はこの事物的對象の獨立性を説くに、これを側面的對象の獨立性との相異に於て試み、事物的對象の獨立性はそれ自身に獨立的であるに反して、側面的對象が獨立性を有するためにはかゝる獨立性を支持する何らかの擔ひ手的存在 Träger 即ち事物を豫想して可能であり、例へば植物生理といふ側面的對象の認めらるゝためには植物といふ事物を擔ひ手として豫想して始めて可能であるとする。即ち、事物的對象にありては單に或る一箇の次階 ein Grad の獨立性をもつて對して、側面的對象は二重の次階 zweifacher Grad の獨立性を俟ちて始めて可能となるものと云へる。<sup>15)</sup>

而してカレルにありては、經濟生活なるものはそれが事物的對象として一次階的に相對的獨立性をもつものであるが、いま一つの次階がこれに加へられるに於てはこのものを擔ひ手としてそこにそのものゝ側面が第二次階に於ける獨立性として成立し、こゝに側面的對象が生ずるのであつて、従つて、經濟生活はその側面の如何に應じて或は經濟事情 äussere Beschaffenheit として、或は經濟組織 Organisation として、或は經濟生活の發展 das Werden des Wirtschaftsleben としてそれぞれの側面的對象が把握され、これらをそれぞれ認識の對象とするそれぞれの經濟科學 wirtschaftswissenschaftliche Disziplin が成立しこれらが相集りて經濟諸科學 Wirtschaftswissenschaften を成すと云ふ。<sup>16)</sup>

15) Carell, Ibid. S. 29-31

16) Carell, Ibid. S. 30



さてこゝに於ても吾々の注意すべきことは、カレルにあつては、かゝる事物的對象例へば經濟生活なるものが如何にして理解が可能となつてゐるか云ふ點である。然るに氏にありては、側面的對象が決められる以前に既に事物的對象として經濟生活なるものが決せられてゐるのであるから、この場合カレルの説明は、何が經濟生活であるかとの間に答へられて居らぬ。従つて氏に於てもまた吾々は、アモンに於て經驗對象なるものが曖昧さのうちに呈示せられてゐるのと相似たる不明さを見出すのである。尤も氏は他のより以前の箇所にて、經濟生活の概念的規定を試みて居り、現にその定義をさへ掲げてはゐるが、それは寧ろその精密なる把握の不可能を知りつゝ強ひて爲されたものに過ぎぬ、と吾々は云ふことが出来やう(註)。何故なら氏は經濟生活なるものゝ完全な概念は、それに就ての科學的研究の最初にはなくてその最後に於て可能なりとするものであり、この段階に至つてその概念的把握が一義的明確を加へることにより、より次元の-higher-orderの意義を經濟諸科學に齎するものであると云つてゐるからである。従つて、そのこの行はれる以前に於ては、經濟生活といふが如き、現實に存在する對象 *realdaseiender Gegenstand* は、概念によつてわれらに知らるゝものではなく知覺 *Wahrnehmung* によつて與へられるのであるが、しかもその全部が直接觀照的に知覺されるのではなくただ知覺の補助を借りて非觀照的に周邊されるものであり、經濟生活なることの共通歸屬關係 *Zusammengehören* を決定する楔機 *Momente* なるものに就ても、共通の標準 *Merkmale* が知られてゐる

17) Carell, Ibid. S. 16ff.

18) Carell, Ibid. S. 24

といふのではなく、個々の事物なるものに於てたゞ非觀照的非直觀的に *unanschaulich* 楔機を知覺し、これを經濟生活の部分 *Teil* として知るだけである。<sup>19)</sup> さればこそ吾々はカレルに對してもまた何が、かゝる部分をしてそれが經濟生活の部分として理解させるかを問はなければならぬ。

註 このことは氏が直觀を排斥し本質推理 *Wesenserschliessung* の如き推理作用を重視する結果であらうが、それの故にこそ却つてより強く事物的對象「經濟生活」の生成の理由を不明にされる。Carell, *Sozialökonomische Theorie u. Konjunkturproblem*, S. 85.

かくてカレルにありては、氏が構造的に思惟によつて經濟生活を規定づけてはゐるが、それにも拘らず吾々は、一の事物がそれが經濟生活の部分に屬することそのことの理由を明にされてはゐない。しかも氏はこの明かならざる事物的對象經濟生活から認識對象たる氏の所謂側面的對象を引出して來てゐるのである。吾々の間は現在のところ、氏の如く、各側面的對象を認識することに依つて經濟諸科學を明かにし、依つて以て經濟生活の全體を餘すところなく知ることにはなくて、より始源的に、一の事物が何故經濟生活の一部と理解されねばならぬかの理由に對して向けられてゐる。

以上述べたところによつて吾々は、アモンに於ける「經驗對象」、カレルに於てはそれに等置された「事物的對象」に就て、前者にありてはそれから直接に「經濟」を理解し得ず、後者にありても「經濟生活」の仍て理解される理由を明かにせられ得なかつたのであつた。勿論アモンに於ても經驗對象

19) Carell, Ibid. S. 16ff.



と認識對象との間には日常的な思惟對象 Denkobjekt は認められてはゐるが、それはアモンに於て決して「經濟的」なる何らの特徴を擔へるものとして示されて居らぬ。<sup>20)</sup> 併し乍ら吾々には、「經濟」への理解は然らば科學的思惟以前に於て即ち經驗的日常的な領域に於て不可能であり、吾々は前科學的對象としての「經濟」をば斷念すべきであらうか。

アモンの如く經驗對象に於て無態度的に寧ろ無意味的にさへ示されたるものが認識對象に於て始めて經濟的なるものと早替りするのではない。寧ろ吾々はかゝる科學的認識に於て忽然と現れ出で来る科學的思惟といつたものを否定したい、とさへ思ふ。吾々に於ては、生成的に云つて經濟生活一般なるものが豫件的に現はれてゐるのではなくして、經驗的特殊なるものに就て有態度的 Stellungnahme に經濟的なる意味 Sinn を理解しつゝあるのであつて、かゝる意味的理解を斷續的に追ひつゝしかもそれらを吾々の意識の内部につなぎ止めることによつて實に經濟生活一般の理解をさへ吾々の日常性に於て把握しつゝあるのである。元より、かゝる經濟的意味のものとしての特殊的存在性、それらの日常性に於ける蓄積として何らかの程度で合理性をもつ經濟生活一般なる存在は、云ふ迄もなく吾々の日常的态度から生ずる素朴的な措置に屬し、その意味に於て云はゞ前科學的對象とも呼ばれ得可きものに過ぎぬ。併し乍ら、吾々はかゝる前科學的な日常の思惟乃至行爲の裡に既に經濟的存在を個々のにもまた何らかの程度で一般的にでも把握してゐることは確である。たゞそれが日常的态度の

20) Amonn, Ibid. S. 24

裡に生成せられたものであり、論理的反省が豊かに加へられてゐるのではないが故にこそ、これをただ前科學的のみにみ把握してゐるに過ぎない。而かも如何なる科學的態度に於てさへも、かゝる日常の素朴的對象を手懸りとせずして眞に對象の認識に達することは出来ないであらう。

## 二

おもふに、人間は思念(Meinung)を有つ生物であり、思念は當然に一定の意味(Sinn)を含むものである。かゝる思念が發して行爲(Handeln)となるとき思念の意味は充實へ向ふのである。かく意味に充つ思念は人間の内界のはたらきであるから、人は他人の思念を直接的な仕方理解することが困難である。然るに、行爲およびその所産たる文化財は思念の外部的發動物であるの故に、人は他人の行爲乃至その所産物から求めてその思念の意味に溯ることが出来る。否、行爲乃至その所産物はそれも含める思念の意味の故にそれが理解的であり得るのである。かくて人は自己のそれから他人のそれへと周邊して行爲乃至その所産物を理解し得べき筈である。

人間の行爲(menschliches Handeln)の特質をその理解的(verständlich)な特質に於て把握せむとする人々の中に特にわれ／＼はマクス・ウェバーを見得るであらう。<sup>1)</sup> 氏に於て行爲は強く「理解的」行爲(„verständliches“ Handeln)として考へられて居り、<sup>2)</sup> 彼は恒にわれ／＼にとつて一の理解的なもの(ein verständliches)ひあり、或る何らかの「把持され乃至思念されたる」(„gehabten oder gemeinten“)

1) Max Weber, Roscher und Knies, Gesammelte Aufsätze, 1922, S. 42ff.  
2) Gottl, Wirtschaft als Leben, S. 517



(主觀的)意味(Sinn)によつて充たされたるところの「對象」に對する自己態度(Sichverhalten)である。<sup>3)</sup> 行爲は、それに含まれたる一定の意味(Sinn)の故に、それが一に全く理解的性質のものであり、音に行爲者が自らの行爲をその意味に従つて理解(verstehen)するのみならず、他人もまた同一の行爲をかゝる意味に従つて理解することが出来る。それ故に行爲の理解といふことはすなはちその意味の理解である。而して行爲のかゝる意味擔負的構造(sinnhafte Struktur)に伴ふ一つの根源的事實は、われ／＼がその日常的行爲に於てかく一定の意味を抱くといふことそのことが、われ／＼が行爲に於て既に一定の態度(Stellung)を取れることを示して居り、われ／＼の行爲はそれ故に恒に一定の態度把持(Stellungnahme)の裡に行はれるものである。

われ／＼の生活は、かくて何らかの態度を取りつゝある現實的なる生活(das stellungnehmenden wirklichen Leben)である。行爲に於ける態度(Stellungnahme)は一に全く行爲者の(主觀的)意味に従ふものであり、従つて、意味(Sinn)の異なるに従つて異なる態度が取られ、一定の態度にはそれ故に一定の意味が含まれてゐるのである。この態度が立向ふところの對象(Object)はそれは云ふ迄もなく實在(Wirklichkeit)であり、われ／＼は實在に對して、一定の態度を取ることに、(Stellungnahme zur Wirklichkeit)の裡に行爲の意味(Sinn)に關して理解的(verständlich)であり得る。それ故にわれ／＼においては行爲がなされ乍ら、未だ實在若くは經驗界に對して何らの態度も取られてゐないといふこと

3) Max Weber, Ueber einige Kategorien der verstehenden Soziologie, Ibid. S. 405

4) Max Weber, Ibid. S. 408

は苟くも考へられない事柄であり、全く何らの意味なくして態度といふものを考へることが出来ず、意味は態度によつて眞に充實されるとともに、われ／＼が行爲し態度を取ることの裡には必然的に何らかの意味(irgendein Sinn)<sup>5)</sup>が把持されてゐるものである。元よりかゝる何らかの意味は、それがわれ／＼によつて主觀的に思念された(Gemeint)ものであるが。

併し乍ら、かく云へばとてかゝる行爲なるものが如何なる行爲であるか、また、かゝる行爲の意味(Sinn)乃至態度が如何なる性質のものであるかは、いまだ必ずしも明かであるとは言へないが、記述を簡單ならしめるために、こゝでは一應、それらを、學問的行爲の場合を除いた、われ／＼の日常的諸生活行爲におけるそれらに限定しておかう。

註 尤も、煩瑣なる記述を厭はずに考へれば、行爲は苟くもわれ／＼の行爲と言はれる程のものである限り、それは目的合理的行爲でなければならぬ。而して、もしリツカートの如くおよそ文化財(Kulturgüter)——すなはち、宗教、教會、法律、國家、道徳、學問、言語、文學、藝術、經濟およびその經營に必要な技術的諸手段などを追求する行爲が文化行爲乃至價值合理的行爲であるとすれば、<sup>6)</sup>それらの行爲が目的合理的行爲であることに恐らく異論は無からう。併しまだこれらの外に單純なる目的合理的行爲なるものもあり得る譯である。いま姑く最後の單純なる目的合理的行爲なるものを問題外に措くと、前掲の諸文化財を追求する諸行爲は、たゞ學問を追求する行爲を除くならば、すべてそれらにおいては、意味はそれがかゝる文化實在(Kultur-urwirklichkeit)<sup>7)</sup>乃至生活實在(Lebenswirklichkeit)に立向ふものとしてのみ成立し、明に價值的性質のものである。文化現象乃至社會現象といふものはかゝる意味を追求する行爲が對象的に云はれたものである。か

5) Max Weber, Ibid. S. 405

6) Rickert: Ibid. S. 23

7) Max Weber, Ibid. S. 170



る意味にあつては、生活するところのわれ／＼主觀の意味は、實在に對して行爲することによつて、自己の生に對する寄與的な意味 Sinn をそのもの／＼内から追ひ求めようとする企圖を含むものであつて、主觀の意味は實在と價值的に關聯することによつて充實されるのである。

併し乍ら、また一應こゝで學問する行爲の意味といふことをわれ／＼が考へるならば問題は稍複雑にならざるを得ない。すべて科學する行爲をリツカートの文化を追求する行爲としても、科學には文化科學と自然科學との別が考へ得られる以上、文化科學は實在の意味、若くは意味關聯を認識しやうと欲する意味においてなされる。これに對して、自然科學は専ら實在の存在を認識しやうと欲する意味においてなされる。科學する行爲の意味はともに同一であるが、自然科學にあつては、われ／＼の價値乃至思念から直接的には一應絶ち切れた實在そのもの、自體性に向つてわれ／＼の認識思惟乃至行爲が立向ふのであつて、われ／＼の行爲乃至思惟が實在の沒價值的な乃至沒意味的な在り方の認識へ立向はうとする行爲の意味 (Sinn) であり、云はゞ沒價值的乃至沒意味の意味 (wertfreier oder sinnfreier Sinn) として、われ／＼の生の價値乃至思念から一應自由な、單なる實在の存在性 (Sein der Wirklichkeit) を追ひ求めやうとするわれ／＼の意味である。かくの如く、自然科學的行爲乃至思惟の場合においては、對象はわれ／＼の生の意欲とは一應無關係に、現實界の自體性そのものに向つてはたらくことから、かゝる行爲はそれが生そのものとの距離の故に一見無意味 (Unsinn) にさえ見ゆるであらうが、かゝる行爲にもなほ一種の意味が主觀に於て思念されること、故に明に一の態度として成立しつゝあることをわれ／＼は否めないやうに思ふ。たゞこの種の意味は比較的少數の場合に少數の人々に依て寧ろ職業的に志向されてゐることが多く、またその生との距離の故に、一般者から見てかゝる行爲に於ける意味はその著しき露呈を示すことなしに看過され勝なることが稀ではない。が

8) Gottl, Ibid. S. 540ff.

さればと云つてかゝる行爲乃至遡つてかゝる思惟は、それが生に無交渉な存在の在り方を追ひ求めるの故に、無意味であり無態度であるとは云へないと思ふ。彼の自然科學に従事する人々の裡にはそれに職業的に従事する彼らの前時代に於てかゝる行爲に對する興味に強かりし人が相當に多いことも事實である。たゞこの種の行爲に於ける意味は吾々の日常性においてよりも寧ろそれが自然科學の興味にまで高まることによつて一層よくその意味を露呈し態度はそこに至つて特殊の職業的性質を帯びるに至る。

然るに、文化科學的行爲の場合にあつては、それはわれ／＼人間にとつての實在の意味性 (Sinn der Wirklichkeit) 乃至意味關聯 (Sinnzusammenhängen) を學問的に追ひ求める企圖を含める意味 (Sinn) である。従つてかゝる學問の追求に於てはたらく吾々の思惟が、それ故に元より價値に關聯せる思惟 (wertbeziehendes Denken) であり、價值的なる意味を含める思惟 (sinnhaftes Denken) であることは明であらう。その限りに於いて、かゝる價值的な性質を自らに含める意味は、云はゞまた價値乃至意味を含める意味 (wertbeziehender oder sinnhafter Sinn) として、まさに二重の意味のものである。

それ故に、文化科學的行爲の意味は、對象がその自體性においてわれ／＼の意味を含めるものとして、われ／＼の學問的行爲がそれに立向ふところのそれであり、それに對して、自然科學的行爲の意味は、對象はその自體性に於てはわれ／＼の生の意味から一應沒交渉であるそのやうな對象に向ふわれ／＼の行爲の意味である。

われ／＼の日常的生活行爲なるものは、何らかの目的行爲であるとともに、また何らかの生活價値を追求するところの行爲である點から、それが先づわれ／＼に於て最初に問題となり来る。行爲はかくて先づわれ／＼に於て生活行爲として最も日常的な露呈はさに於て現はれ、行爲がわれ／＼の生々し

9) Gottl, Ibid. S. 540ff.



き生活意欲の直接の擔ひ手として意向的な實踐として營まれる時、最も鮮かに自らその意味を露呈する。ウェバーに於ても生活價值乃至文化價值的關聯に於ける行爲従つてそれに於ける態度が強く意味的であり従つてまた理解的なものと解されてゐることは争へない。<sup>10)</sup> 實際われ／＼の日常的生活に於ては、生の擴充を追求するひたすらなる行爲に於てほど意味の著しき露呈はないと云へやう。

かくてわれ／＼がわれ／＼自身を日常的經驗の世界の内に省みる時、然る時われ／＼はその日常的な(alltäglich)従つて元より前科學的な(vorwissenschaftlich)な生活(廣き意味の)に於て、既に實在(Wirklichkeit)——社會と自然——に對して恒に何らかの態度を取りつゝ行爲してゐることが背かれらるであらう。實際われ／＼の日常的思惟(alltägliches Denken)従つてその日常的行爲に何らの態度——意味——も取られてゐないといふことは稀であり、苟くも意識的な企圖(Absicht)の擔ひ手として行爲者の思惟に於てある場合、われ／＼は無態的(stellungslos)には現はれないであらう。

かく、われ／＼がその日常性(Alltäglichkeit)に於て態度を取ると云ふことは、われ／＼がかゝる日常性に於て既に吾々の行爲を或る一定意味的なものとして、その態度と對者的に關聯づく實在をかゝる意味に従つて何程かに措定しつゝある。單なる經驗的存在「鐵」一般はこの際われ／＼にとつて無存在に等しい。われ／＼の行爲的意識乃至思惟が既にその日常性に於て「鐵」に立向ふ時、この時既にその中には何らかの態度が取られて居るのであり、「鐵」はその或る何らかの在り方に従つてこ

10) Max Weber, Ibid. S. 82ff. derselbe, Wirtschaft u. Gesellschaft, S. 2ff.

の態度と交渉を取る存在となる。働きかけるわれ／＼の意識が存在の日常性としての重さや廣がりに向ふ時「鐵」はそれを物理的とでもわれ／＼が名付くべき一の在り方として、またその自體性としての性分や密度やに向ふ時それは同様に化學的とも名付くべき他の在り方として、はたまたそれがわれ／＼の生の充足の意味に繋ることによつてその使用價值や價格に向ふ時、それは明に經濟的とでもわれ／＼によつて呼ばるべき在り方として、それぞれのわれ／＼の態度(Stellungnahme)と交渉を取る。重ねて云ふならば、「鐵」一般はわれ／＼との存在的遠距離の故にそれは無に等しいのである。存在の在り方の然かく多面的なるものにあつても然りである。ましてその在り方が根源的に一面的な——始源的に經濟的なる存在、例へば貨幣(Geld)であり市場(Markt)である場合に至つては、それに交渉づくところのわれ／＼の態度も根源的にまた明かに一面的であるであらう。元よりかゝる根源的に一面的な存在に對してもひとは單にたゞ一つの態度をのみ取るとは限つては居らぬ。單に貨幣の化學的素材を問題とし市場の建物の材料的構造を問題として取上げるが如き態度が取れぬと云ふのではない。かゝる場合ひとはたゞ存在の在り方を根源的に取り上げるひとびとの態度の優越性を見逃すことの出来ないことを力説するだけで充分であらう。

われ／＼の日常的思惟はかくの如き意味的態度を取ることにより、それが立向ふ何らかの實在との關係(Mizusammenhang)を措定し、その存在を何らかその態度に應ずるところの在り方に於て把握



するのである。たゞ存在の在り方が根源的、一面的であるか、或は多面的であるかによつてかゝる存在がより限局的な態度に關係つき得るに過ぎないか、より多様な態度に交渉つき得るかに過ぎないかである。賣買といふ現象はもし單に物理的な *Stellungnahme* の下に強ひられるならば、財と貨幣との空間的交替に過ぎないがこのやうな *Stellungnahme* が取らるゝことは事實上極めて稀有でありそれらは根源的には、社會的な一面性の存在でありそのより深き根源性に於て經濟的な一面性の存在である。それに對して「鐵」は、それがわれ／＼の態度と交渉づく限りに於て、根源的に自然的な若くは社會的な存在であり、それに立ち向ふわれ／＼の *Stellungnahme* に應じて或は商品として或は化學的成分として或は物理的、礦物學的在り方としてでもあり得るであらう。

かくの如くして、われ／＼はその日常性に於ける態度の故にわれ／＼の行爲をはたまた實在を日常的に措定する。何が一般的に「經濟的」*wirtschaftlich* であるかを定立する以前にわれ／＼の個々の思惟乃至行爲はその *Stellungnahme* を通じて經濟的な性格を既に了解してゐる筈である。

### 三 經驗對象「經營經濟」の性質

經營經濟學の素材となり、それからこの學問の認識對象が構成せらるゝところの、經驗對象「經營經濟」が如何なるものであるかは、すでに第一章第一節において略述した。且つ、かゝる經驗對

象「經營經濟」なるものがわれ／＼の日常生活の思念のうちに生成され、われ／＼の日常的思惟によつて何ほどかの明瞭さで措定されてゐることは本節前段において略述して來たところである。ひとは、企業する行爲の總體は經濟であり、従つて企業における賣買行爲も經濟行爲であり、家計すなはち家庭における收支賣買行爲の總體も經濟であることを知つてゐるであらう。子弟を就學さす行爲はそれ自體では非經濟行爲であらうけれどもそれが支出として所得配分に影響する限りからかゝる *Stellungnahme* においてはその他の行爲であり得ない。その他、國家並に地方の財政がそれ自體として經濟であることは言ふを要しないところであらう。かくて、かゝる企業經濟、家庭經濟、財政經濟等を通じてすべてに妥當することは、それら各々の相對的獨立經濟が、主體の統一的目的意志によつて起動的に擔はれ、その實現のために諸活動を營むといふ點において經營經濟たることこれである。

元より、右の如き諸種の相對的獨立經濟活動體系が經營であり若くは正確に言つて經營經濟でありと措定する命辭または正確なる觀念は、これをすべての一般人に期待せられ得る事柄ではなく、一定程度の知識水準若くは文化水準に達せるひとびとにして始めて可能なるは否み得ないところであらうが、併し、何びとと雖も、目的實現を志向する經濟者自體の意識が可及的合目的性を追求するものなることを認むべく、それともになほかゝる經濟者の全き任意に屬せざる經濟社會關係の秩序の存在することも同時に認めるであらう。われ／＼はたゞその前者たる經濟者の意欲活動の秩序體系を「經



營」乃至正確には「經營經濟」なる言葉をもつて呼び、後者の如き經濟社會組織の秩序體系を「社會經濟」と稱するに過ぎないのである。それ故に、ひとはかゝる「經營」乃至「經營經濟」なる命辭に拘らず、その特質の主徴をば、經驗的日常思维的に了解してゐる筈である。元よりかゝる思维は、その自覺の程度に於て嚴密ではなく、その措定は嚴密に一義的 *eindeutig* ではないが、このことは何ら日常性に於ける吾々の思维形象の構成を否定する積極的理由とはならぬ。

かくて、日常的思维において了解せられてゐる經濟行爲 *das Wirtschaften* とは、生の爲の物財 *Sachgüter* 若くは生活手段 *Lebensmittel* への支配 *Schalten* に對して志向的なる意味 (*Sinn*) を擔へる (*haben*) 行爲であつて、且、元よりかゝる物財への支配が、社會的關係を通じてなされることの原則的なることへの理解、が伴へるものである。經濟行爲が社會的關係を通じてなされる物財への支配なることから、それは疑もなく、物財の支配を志向する社會的行爲である。

註 物財 *Sachgüter* なる意味はこの際狭く解せられてはならぬ。有形財のみならず無形の用役 (*Dienst, Service*) その他換價的財たる權利表證など、物質的意味におけるあらゆる生活手段を包括し得ると考へることが妥當である。

また、例へば使用價值の生産が屢々非社會的、自然的行爲——單なる人と物との技術的交互作用における人の行爲——の如く言はれることがあるが、それは過當の抽象であるか、若くは何らか自然的な存在——使用價值それ自體に即し過ぎたる考であつて、生産がロビンソンの行はれるものでない限り、何ほどのかの

1) Max Weber, *Wirtschaft u. Gesellschaft*, S. 31; derselbe, *Gesammelte Aufsätze*, S. 405

程度で人と人との關係を含まざるは無い。封建的家族經濟はそのうちに部分社會的な關係を含み、かゝる部分社會的關係はそれ自體につひに全體社會關係へ分裂發展する契機を含むてゐた。特に近代の工場生産は、それ自體勞動協同體として一箇の部分社會ではあるが同時にそのうちには全體社會的な生産關係をも内含してゐるものである。發達した近代の生産が社會關係と沒交渉的に非社會的に行はれ得やう筈がなく、それはそれ自身の中に既に切り離し得ざる社會關係をも含むてゐる。

ひとは、かゝる行爲を自ら營むことにより、はたまた他人が經濟行爲を營むことにより、ひとびとの諸經濟行爲が社會的に交渉する全體的總容を經濟の世界と知るとともに、ひとびと自らが經濟實現者なる態度において經營經濟の世界を觀、なほ、かゝる世界に對立する社會自然的な謂ゆる社會經濟の世界の經營經濟存在を觀つゝあることはすでに上來述べ來つたところである。言ふならば經營經濟とは、經濟實現者としての態度に必然的なる云はゞ社會的主觀者の經濟であり、社會經濟とは、經濟的社會的自然律に着目する云はゞ社會的客觀者の態度のもとに眺められたる經濟である。

註 たゞ問題はかゝる二つの態度について觀るとき、前者が經濟的實踐者の關心に充てる態度の故にひとびとに直接的且つ強烈であるに對し、後者が實踐者の關心とは一應沒交渉な、實踐者の關心そのものについては云はゞ *gleichgültig* なる態度であることから、そのやうな態度が一般者によつて取られつゝあるや乃至取られ得るや否やの點にある。おもふに、ひとはその日常的知識慾への不斷の傾向からつねに何ほどにか社會情況の生成についての知識を要求しその變化發展の趨向に對して關心をもつことから考へて、かゝる態度が日常取られおらないとは言ひ得ないし、またそれが取られ得ぬとも考へ得ないであらうから、二つの態度の一般



的妥當性の差異はむしろ相對的であると言ひ得やう。尤もこれを稍嚴密に考へれば、後者たる社會的客觀者の態度といへるものは、それが専門的知識者の科學的態度にまで高まる場合、最もその鮮明さを増すものであらうことは否めないやうにおもはれる。

日常的思惟形象「經營」Betrieb 若くは「經營經濟」Betriebswirtschaft なるものは、かくて、經濟的意味に於ける究局的な目的 Endzweck または究局的な志向 Intention を追ひ求める行爲者の、諸段階の「目的」Zweck「手段」Mittel の意味聯關 Sinnzusammenhängen の一單位的全體である。われ／＼はそれを吾々の企業に於て見、他人の企業に於て見るのみならず、家計に於て見、財政に於て見、或はまた(意志的な)國民經濟に於てさへこれを見る。

經營經濟なるものは、實にかゝる日常的思惟に於ける前科學的經驗對象、「經營經濟」をば、その素材的存在から認識目的的に科學の對象として拾ひ上げこれを一の體系的知識と爲さむとするものである。

要之、經營經濟學の對象「經營經濟」は、科學的認識の段階に於て忽然として吾々の思惟の形成を受けるものでもない。それは既に吾々の思惟の日常性に於て何程かに指定せられた或る特定のものである。科學的思惟は、たゞこれを論理的に反省しこれについて科學的對象「經營經濟」を指定するに過ぎない。

#### 四 認識對象「經營經濟」の性質

われ／＼はすでに前に(第一章第二節)、自然科學と文化科學とを分つものは、根源的には、對象の差異に本くことを述べた。科學はその原材料として特定の經驗對象をもつことによつて兎も角も出發するものではあるが、併しこのことは科學は何らの反省なくして直にそのまゝかゝる經驗對象を認識對象化するといふことではない。科學が科學たるためにはこゝで改めて科學の見地乃至態度において經驗對象を見なほすのでなくてはならぬ。科學の見地乃至態度においてその科學の原材料たる經驗對象を省正するとは、經驗對象を認識對象といふ論理的埒内に引入れることであり、經驗對象を論理的に、そのものとは原理的に區別されたる認識對象として指定することを意味する。アモンが、前に引用した如く、「一の特種獨立科學を特徴づける對象は現實的具體的な「經驗對象」ではなくして、原理上非現實的概念的な「認識對象」である<sup>1)</sup>」と言つたのは實はこの意味に解すべきであるとおもふ。それ故に、アモンの如く、或る科學の「領域」若くは對象たる經驗對象が實は物理學の、化學の、礦物學の、或はまた經濟學の對象となり得るのではなくして、或る學問が特定の科學として、在り得るのはその認識對象のためであるのである。

1) Ammon, Ibid. S. 31



われ／＼はいまや、かゝる一定の科學の原材、すなはち、經驗對象を、その科學の對象すなはち認識對象として、確定せねばならぬ。科學の確定とは、その原材の認識對象化 (Objektivierung) でなければならぬ。ところで文化科學と自然科學とを論理上分つのは、認識對象を有意味的 sinnhaftig に確定してこれを理解するか、若くは沒意味的に sinnfrei od. sinnfremd に確定してこれを把握するかに由來するのである。<sup>2)</sup> 前に述べた如く、およそ對象はそれが人間の行爲と有意味的に關聯づけるものとして、それは飽くまでかゝる實在乃至經驗世界の意味性 Sinn der Wirklichkeit として認識對象化され、對象がそれが人間の思念とは無關係なものとしてそのもの、沒意味的自體性として對象化される場合には、かゝる實在の存在性 Sein der Wirklichkeit として認識對象化される。<sup>3)</sup> およそ實在を求めざる認識は、かくて noetisch な認識方法として有意味的思惟方法 sinnhaftes Denkweise であるか、若くは實在の單なる存在性の認識として phänomenologisch な沒意味的思惟方法 sinnfremde Denkweise の仕方を取る。一方は認識の主題を存在の意味性に求めるに對して、他方は認識の主題を飽くまで存在の沒意味的自體性に求める。かくて對象の認識對象化 (Objektivierung) に本き從へる思惟方法 Denkweise —— 元よりそれは日常的思惟方法にあらざる、科學的思惟方法でなければならぬ—— から、社會科學乃至文化科學的認識と自然科學的認識とに分れる。<sup>4)</sup> 前者の認識はその對象が交渉的存在なることから特にこの認識が「理解」Verstehen と呼ばれ、後者の認識はその對象が吾々にとつ

2) Gottl, Ibid. S. 515  
3) Gottl, Ibid. S. 540ff.  
4) Gottl, Ibid. S. 540ff.

て意味的交渉なき單なる對象的存在なることからこの認識のみが「認識」と呼ばれることもある。<sup>5)</sup>

科學の素材 Stoff der Wissenschaft とは、この認識對象化 (Objektivierung) における同一の思惟方法 Denkweise の故の同一性の認識對象を意味する。それ故に自然科學と文化科學とは、互に異なる各々異質性の認識對象をそれぞれの素材とする。従つて、有意味的認識對象、すなはち文化科學の素材は、一の素材であり乍ら、認識目的には二個の學問 (法則學と歴史學) によつて共通に所有せられ、かくて理論的社會科學と歴史的社會科學とは、同一の素材 Gleicher Stoff において互に分離し同じく noetisch な經驗を追ひ乍ら認識目的の相異なる二個の學問となる。<sup>6)</sup> 但し、誤解されてはならぬことは、かゝる自然科學と文化科學とにおける認識對象の相異は、根源的には、對象そのもの、相異に本くのであつて、思惟方法そのものから來るものではないことである。蓋し、思惟方法なるものはその對象を認識對象として確定するための、すなはち、對象の認識對象化そのもの、ための思惟の方法に外ならないからである。

かくて同一の素材をもつ社會科學の認識は一般普遍的なもの、把握——法則學的認識 nomothetische Erkenntnis——であるか、或は、特殊個別的なもの、把握——個性化的認識 idiographische Erkenntnis であるかであり、前者にあつては求めらるゝものは個々の場合に現實に思念されたる意味或は意味關聯の認識が目的であり、後者に於ては普遍的現象の純粹型若くは純粹型的法則のために科學

5) 三木清氏、觀念形態論、五九頁  
6) Gottl, a. a. O. S. 577  
7) Gottl, Wirtschaft als Leben, S. 515







意味(Sinn)そのものは「客観的な、真な且適當な意味を」den objektiven, wahren und gültigen "Sinn"<sup>2)</sup> 若くは「何らか正しい若くは形而上學的に闡明された真なる意味」irgendein objektive "richtige" oder ein meta-physisch begründeter "wahrer" Sinn<sup>3)</sup>を指意するのではなく「客観的に適當な意味を明にすることによって理解しやうとする」den objektiv gültigen Sinn deutend verständlich zu machen が如きことは、ソムバルトの言ふが如く、實は noologisch な要求でそれは哲學の領域に屬して經驗科學の内には無い。<sup>4)</sup>

註 尤も、ソムバルトはその近著に於てもこのことに就ては必しも明示的ではない。氏の Wirtschaftsgesinnung 乃至 subjektiver Geist は一方で（經驗科學的には）個人の目的指定乃至主観的計畫に關はり乍ら、他方でまたそれらは一の歴史的時代または經濟組織に於ける Weltgeist の如き客観的精神乃至客観的目的に結び付き Kulturideen として哲學の交渉内に没入する。<sup>5)</sup> 經驗科學としての經濟學が形而上學的經濟學と接觸する境面は氏の著書に於て遽かに裁斷されない困難な問題を殘してゐると思ふ。

意味は先づ單に經驗的に「行爲者によつて主観的に思念されたる意味」den vom Handelnden subjektiv gemeinten Sinn を指意してゐた。であるから意味は實際に (tatsächlich) 現實的(aktuell)なものとして考へられなければならない。かやうな主観的に思念された意味といふものゝ實際的な在り方は、それは歴史的に與へられたる或る(個々の)場合に於て、一人一人の行爲者によつて主観的に思念された意味である。

併し乍ら、意味には、なほかゝる實際的な意味の外に、抽象的意味とも呼ばるべき意味の存するこ

2) v. Wiese, Allgemeine Soziologie Teil I, S. 34  
3) Max Weber, Ibid. S. 503  
4) v. Wiese, Ibid. S. 34  
5) Sombart, Die drei Nationalökonomien, S. 181  
6) Ibid. S. 233ff. u. 294ff.

とが擧げられてゐる。かゝるものとして、一は平均型的な意味で、他は純粹型的な意味である。平均型的の意味とは、與へられた多くの場合を通じて、(かゝる一人一人によつて主観的に思念されつゝ)多數の行爲者により、平均的に且つ近似的に durchschnittlich und annähernd 思念された意味である。<sup>7)</sup> 平均型は、それが平均的且近似的なるの故にその限りでは實際的でないが、然し乍ら、それは兎も角も現實に實在する意味であり、たゞそれが多數者の意味なるの故に平均的且近似的なるに過ぎない。然るに、これと異つて、純粹型的の意味とはかゝる現實に實在せる意味とは異なるが、なほ實在的な意味であつて、しかも科學的方法としては價值ある所の一種の意味である。それは概念的に構成せられた純粹型 reiner Typus に於て、定型として考へられた一人或はそれ以上の行爲者によつて主観的に思念された意味であつて、<sup>8)</sup> 即ち、概念的純粹定型(理想型)としての意味である。<sup>9)</sup> これに於ては、實際的に經濟的といふ意味は、概念的に經濟的といふ純粹定型(理想型)としての意味にまで自らを高め上げる。

こゝで注意すべきことは、謂ゆる「理想型」なるものは、(ウエバーに於ては)一種のウトピー Utopie として架空的なものであり、單なる科學的方法に於ける手段概念としてのみ取上げられてゐるに對し、論難あることである。ウエバーの理想型の形成は、行爲若くは事象に於ける意味の把握が一定の價值的見地からの意味的因子の一方の高昇に於て成立するものであるが、この一定の價值的見地乃至若干の觀點なるものが、全然任意のものであり、従つて先驗的機械に結び付けてせらるゝ虞があり現實的客観的に行はれ難い缺點を有し、實在的でないと云ふ批

7) Max Weber, Ibid. S. 503. 阪田太郎氏譯、社會學的方法的原理 二頁  
8) 同 前  
9) Vgl. Max Weber, Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis



難が加へられ得る。而してこれらの批難は尤もである。それ故に、少くともこの場合、かゝる純粹型は、飽くまで實在的な本質的定型として形成される必要がある、そのためにはかゝる高昇 *Steigerung* が實在からの現實的意味の鋭き直観の方法に基いて爲されなくてはならぬ。かくしてかゝる純粹型に於ける意味はたとひ現實な意味でなくともなほ實在的なものとなる。<sup>11)</sup>

そこで、科學的對象「經營經濟」に於て、日常的對象「經營經濟」への反省から一義的に定めらるゝ經濟的乃至經營的なる意味とは如何なる内容の意味であるかといふ問題であるが、吾々は、これをただ規定するのではなくて、それを行爲の含める意味の理解から得るのでなくてはならぬ。然らば理解といふことが何であり如何にして客觀的に妥當なる理解が成立つのであるか。或る特定の内容を意味として一義的に理解する方法を問題とせねばならぬ。

すべて理解は意味の解明的把握 *deutende Erfassung* 即ち、意味を明にする (*deuten*) ことによつて理解する (*verstehen*) ことを指すのであるが、意味に實際の意味と方法的な加工による抽象的意味 (平均近似型と純粹型の二種) とがありし如く、(意味の) 理解にもまた現實的理解 *aktuelles Verstehen* と説明的理解 *erklärendes Verstehen* との二種の理解がある。<sup>12)</sup> 現實的理解とは行爲の思念された意味をそのものだけにてそのもの自體として直接的に現實的に理解することである。この理解は元より自己自身の思念せる意味の現實的理解と、他人の行爲について他人によつて思念された意味の現實的理解をも含むである。

10) 高田博士、經濟學方法論四三二頁以下。三木清氏、社會科學概論 (岩波哲學講座) 七八頁以下。小松堅太郎氏、知識社會學の方法的批判二八頁以下。  
11) 同 前  
12) Max Weber, *Methodologische Grundriegen*, S. 507-508. 阪田氏、前掲書 一三—一五頁

註 すべての「意味解明」*Sinngebung* は、それに就ての明證 *Evidenz* を得やうとするものである。明證は、その日常性に於ても或る程度に合理的に行はれ、或はまた追驗的に *nacherlebend* も行はれてゐる。一體、吾々は、自己の行爲に於て思念せられた意味を、現實的に理解し得るとしても、他人の行爲の意味をも客觀的に理解し得るのには如何なる根據を有するか。精神科學ならびに歴史の確實性は懸つて一人の理解が客觀的妥當性にまで高められるか否かにあり、現實が内的經驗に與へられる仕方からしてその客觀的把握にとつて種々の大きな困難が生じ來るものではあるが、人間は人間の創作し得るもののみ理解し得るとも、同じものは同じものによつて *Gleiches durch Gleiches* 最もよく理解し得、従つて精神は精神によつて *Geist durch Geist* のみ最もよく理解し得ることはこの場合一の根據であらう。吾々が他人の體驗を追驗 *nacherleben* し得るが如きことはまさにそれへの明證を提供する。人間の精神相互間のかゝる共軌的 *isomorphisch* な關係こそは、たゞに他人の體驗従つて行爲の意味に追驗的に理解的である許りでなく、さらに理解に於ける合理的等認性に就ても深き根據として考へ得べきであらう。

然し乍ら、意味の解明がさらにより高き合理性に於て爲され従つて理解が殆んど全く完全に行はるゝるのは、それは説明的理解に於てであらう。理解はその日常性に於て必ずしも現實的理解のみではなく、或程度の説明的理解を含むことも元よりであつて、さればこそ吾々は、日常的對象「經營經濟」に於ても、それが行爲の目的手段の秩序聯關であることを何程かの程度で認めてゐるのであるが、さらに一步を進めて吾々が科學的考察を爲す場合に於ては、經營經濟的なる行爲の理解、従つてその單位的總體たる經營經濟の理解に於て、説明的理解は必然的な方法的意義を持つに至る。

13) W. Dilthey, *Die Entstehung der Hermeneutik* (Gesammelte Schriften, 5. Band, S. 318). 池島重信氏譯、解釋學の成立 三頁以下  
14) Sombart, *Die drei Nationalökonomien*. S. 199, 200



説明的理解にあつては、意味解明に於てなるだけ合理的明證を得るために、行爲に於ける目的手段の聯關を重大視し、一の行爲の意味を理解するに當つて、その行爲をそれに意味的に内屬し聯關してゐる他の何らかの行爲との關係から理解しやうとする。即ち、その行爲(の意味)に内屬的な他の行爲(の意味)との意味聯關を求め、その行爲を如何なる意味の動機に結び合せたかといふ如く、行爲を求動的、motivationsmassig に考察することによつて、動機から聯關的に行爲の意味を理解しやうとする。<sup>15)</sup> それ故にこの理解の方法は、一の行爲の理解に際し、その行爲を他の行爲(手段的行爲)からの目的として見るか、或は、その行爲を他の行爲(目的的行爲)からの手段として見るかによつて、かゝる行爲を目的手段説明的に或は因果化説明的に理解しやうとする。總じて目的行爲に於てはその意味の解明は、そこに適用されたる手段を理解することによつて最も明に爲されるであらう。説明といふことは、されば行爲に於て主觀的に思念された意味に従つて内屬してゐるところの意味聯關を捕捉することである。<sup>16)</sup> その裡には既に行爲の因果的解明が求められてゐる。然かも具體的行爲の正しき因果的意味解明、richtige kausale Deutung は、かゝる行爲に於ける關心の程度に比例し、<sup>17)</sup> かゝる行爲の外的經過とその動機とが的確であり、且、同時にその聯關が有意義的に理解し得べきものとして認識せらるゝことである。<sup>18)</sup>

三

次に、行爲が、經濟的意味として理解せらるゝためには、行爲は、それが經濟的に方向づいてゐなければならぬ。行爲が、經濟的に方向づいてゐる、"wirtschaftlich orientiert" といふのは、行爲者の(主觀的に)思念された意味が效用 Nutzen (物財 Sachgüter) への支配のための配慮に向つてゐるといふことである。<sup>1)</sup> かくの如くすべて經濟行爲にあつては、行爲者に思念せらるゝ意味が效用(乃至物財)に對して向つてゐるのであるが、このことは他の行爲と經濟行爲との根源的差異となる。元より、一般的には、意味の向ふ(orientieren)とてその對象は、或は自己に取り内的なものであることもあり得る。(或る種の)宗教的省思に於ける場合の如きがそれである。これに反して、意味の向ふ對象が吾々にとつて外界にありと考へらるゝもの、即ち社會(他人)及び事物(それ自體では自然的なもの)のそれである場合には、普通、社會的行爲と考へられてゐるものにあつても、純粹なる社會的行爲と經濟的行爲とは等しく外界に對象をもち乍らその究局的な對象は異なるものである。純粹な社會的行爲にあつては、行爲者の主觀的に思念された意味に従つて何らかの態度が他人の上に取りられることによつて、他人の等しく意味的な關係態度を決定づけ、かくてかゝる主觀的に意圖された意味からしてかゝる行爲が理解的に解釋される(註)。<sup>2)</sup>

註 社會的行爲をかくの如く解するに於ては經濟行爲の如きを除外するとしてオツペンハイマーはウエバーを批評する。それ故に筆者は經濟的行爲をも社會的行爲に包含する見解に對してこれを姑く純粹な社會的行爲と呼ぶ。<sup>3)</sup>

1) Vgl. Max Weber, Wirtschaft u. Gesellschaft, S. 31  
 2) Max Weber, Ueber einige Kategorien d. v. S., G. A. S. 403ff. 参照  
 3) Vgl. F. Oppenheimer, System der Soziologie, 1. Band, 1. Halbband, 1922, S. 81 (v. Wiese, a. a. O. S. 34 Anm.)

15) Vgl. Max Weber, Ibid. S. 507, 508. 阪田氏、前掲書 一四一一五頁参照  
 16) Vgl. Ibid. S. 508. 前掲書 一五頁参照  
 17) Vgl. W. Dilthey, Ibid. S. 319. 池島氏、前掲書 五頁  
 18) Vgl. Ibid. S. 512. 前掲書 二二一二三頁参照



これに反して對象が事物(それ自體では自然的なもの)である場合にも、行爲者のかゝる主觀的な意味に従つて態度は事物に對して取られるのであるが、この場合に於ける對象はそれ自身の意味の世界から吾々の態度と交渉するのではなくしてそれはそれ自らの存在の在り方に於て吾々と交渉づくに過ぎない。事物そのものゝもつ意味とは、事物の吾々に取つての意味であつて、それは畢竟吾々の意味である。何故ならこゝでは意味(Sinn)とは形而上學的に考へられたものではなくて體驗する吾々の持つ意味であり、云はゞ geistig なものであるから。

併し乍ら普通に考へられるところによれば、經濟的なる現象の特質は、かゝる主觀的に抱かれたる意味に従つて取られる人間の態度に就てもかゝる態度の取られる對象が、純粹に社會でゝもなく、純粹に事物でゝもない點にある。云はゞ吾々は社會を通じて事物を目ざしてゐる。經濟現象のかゝる有機的複綜的構造 organisch-komplikative Struktur は吾々を惱し、物質的事象と精神的生起(及び目的指定)との綜合的原理 Identitätsprinzip を求めしめるのであるが、ウエバーに於ても經濟行爲が物財 Sachgüter への吾々の支配なることから、同じく態度が外界に關係づき、對象が純粹に社會である場合とは明らかに異なるものである。<sup>6)</sup>

經濟的意味の向ふ對象は、沒意味的な(sinnfrei od. sinnfremd)對象ではなく、およそ行爲の科學 Wissenschaften vom Handeln にとつては、かゝる對象も人間行爲の機縁(Anlass)に決着(Ergebnis)を

促進(Förderung) 或る抑壓(Hemmung)として考察される。沒意味と云ふことは無生の(Unbelebt)とか非人間的(Nichtmenschlich)とか云ふことゝ同一ではない。如何なる技術的製作物でも例へば「機械」は専らこのものゝ製作及び使用に人間行爲が附與し若くは附與せむとしたる意味から解明し理解することが出来る。それ故に此の製作物に於て理解し得べきものは人間行爲が製作物に對す關係であり、手段として行爲の據り所とした目的乃至對象としての製作物と人間行爲との關係である。手段とか目的とか云ふ範疇に於てのみ、斯くの如き客體の理解が行はれる。<sup>7)</sup>

かくて經濟行爲乃至經營行爲は、社會的關係を通じてするかくの如き究局的な對象(物財)に對する行爲である。それ故にかゝる種類の行爲の意味は、目的乃至對象は究局的に物財であり、これの支配に關する目的手段の秩序聯關であり、對象支配といふ、より究局的な目的に對する必然的手段として他人の行爲に對して態度づきその限りに於てそれは社會的行爲となる。

かくていまはたゞ一般的に言つて、理論的經營經濟學においてわれわれの爲すべき事柄は、日常的に生成されたる經驗對象「經營經濟」を原材として、これを論理的に認識對象「經營經濟」として素材化し、説明的理解の方法に従つて、認識對象「經營經濟」における「目的」「手段」の意味聯關を普遍科學的にすなはち理論科學的に理解(認識)することになければならぬ。

但し若干附言するならば、現實的具體的經濟者の「目的」は、一般社會經濟の運動發展と特定國民

7) Max Weber, Methodologische Grundlagen, G. A. S. 506ff.  
阪田氏、前掲書 九一一〇頁參照

4) Gottl, a. a. O. SS. 541, 524 參照

5) Karl Muhs, Materielle und psychische Wirtschaftsauffassung, S. 15

6) Max Weber, a. a. O. S. 405ff.



社會の意識的態度との交錯裡にありて、或は、或る方向へと制約せられ、或は、他の方向へと轉化することあるがために、かゝる「目的」がつねに必しも一定不動であるとは言へない。それにおける「目的」「手段」の意味の實質的内容、従つて、その間における意味聯關の内容もそれ故にまた變化せずとは言へぬ。しかもかゝる變化發展を理解(認識)せむとするものなることにおいて、また理論的經營經濟學の任務の存す所以をも知るであらう。

## 四

廣き意味の經濟學の一としての理論的經營經濟學は、かくて、nomothetisch に noetisch な存在、「經營經濟」に關する理論として成立するのであるが、この主題的對象「經營經濟」が眞に一の獨立科學の對象たり得るためには、それはまた同時に一の獨自の主題的統一 thematische Einheit にまで高め上げられてゐなければならぬ。

私見によれば、個別科學に於ける方法の重要な一任務は對象——認識せらるべき側面若くは主題——をその科學に獨自的な一の論理的統一性として把握することである。對象の一般的性質に於て價值關係的 wertheziehend 有意味的 sinnhaft な、且、方法に於て普遍化的構成をとるものとしての理論的經營經濟學にあつてもまた、従つて、その對象を斯學に獨自的な一の論理的統一性として把握せむとするものであるが、この把握を可能ならしめるところの方法は然らば如何であらう歟。

一定の科學を出發せしめるものとしての、學問者に於ける一定の認識目的 Erkenntnisziel なるものは、素材的經驗からかゝる目的に相應する一の側面をその科學に獨自的な主題として抽出し來る方法と、もに、なほ、かゝる側面乃至主題を獨自的な一の論理的統一性 logische Einheit として構造づける方法をも要求する。

理論的經營經濟學に對して從來向けられつゝある批難の一は、その理論的社會經濟學からの科學的獨立性の疑惑であるが、この疑惑は主として、社會經濟學が、社會經濟でふ全體性の認識のうちに既に個別經濟(意志的統體經濟)たる經營經濟を部分として包攝せるが故にかくて構成されたる社會經濟學的理論の外に、なほ、かゝる部分性の研究が科學的獨立性を有し得ないではないかといふ理由から來てゐる。換言すれば、經營經濟は、云はるゝ如く統一的指揮 einheitliche Leitung を行ふものであるとしても、それは單にその内部的方面に於てのみ可能であり、その外部的交通に於ては、全體的综合性なるより高き次元のものに被綜合的被規定的であるに過ぎないものとして、經營經濟の統一的指揮に於ける獨立性を否定し、經營經濟を全體性に對するその單なる部分性としてのみ解しやうとする點から來てゐる。それ故にこの疑惑に對する抗辯は、一に經營經濟に關する認識が、かゝる全體・部分性的認識以外に、なほ別にこれを認識上個別性(意志的統體性)として對象づけることの方法論上の可能性を明かにすることに於て成立つ譯である。

經營經濟學に於て對象たるべき側面若くは主題は、既に前述せるが如く、個別經濟(正確には、意志的統體經濟)のその意志的自我性に於ける個別性 Einzelwesen(意志的統體性)であるが、かゝる個別性は、孤立せる非社會的個別性ではなくして、交通生活の中に自らを根深く關聯づけてゐるところの社會的個別性である。——經營經濟は、その個別性としての自己構成 Selbstgestaltung に於ても既に社會



性のものであるが、この種の社會性は、經營經濟内部の云はば封鎖的 *Beschlossene* な部分社會的な社會性であり、これとともに、——經營經濟は、自己を個別性としつゝその對外交通に於て自らを他の經營經濟と交渉づけるものなることから、その個別性なるものが社會的關聯のうち自らを關係づける個別性なることとはおのづから明であらう。

が併し乍らかくの如く、經營經濟が、社會的個別性のものであるといふことは、かゝる個別性が、またそれが社會的なる限りに於て、社會的全體性の構成楔機として部分性のものであることをも意味してゐる。左様であるならば、前述せし如く、經營經濟學的方法に本づいて、本來的に個別性として主題づけられたる經營經濟は、如何にして、その社會的關聯より生ずる自己的全體性そのものに對する關係、竝に、自己的全體性に於ける部分性従つて自己の被綜合性を、その本來性としての個別的獨自性に於て統一づけるであらうか、換言すれば、斯學に於ける對象の論理的統一性の把握に就ての方法が問はれることとなるのであつて、すなはち、全體と部分、全體と個別の關係指定を通して、個別性を主題とする斯學の方法が語られなければならないこととなる。

おもふに、全體 *Ganzheit* なるものに關説する思惟は、このものとの論理的關聯者として、個別 *Einzelwesen* なる性格を豫定せず、すなはち、全體に對する相互指定的關係のものとして部分 *Teil* を豫定するのである。従つて、經濟生活に於ける全體性そのものを主題とする經濟學に就て云へば、

部分は全體の構成要素として當然に考察の範圍に入り込まざるを得ぬであらうが、その場合それは飽くまでも部分としてであつて個別 (自我) としてであるのではない。何故ならこの場合かゝる立言は方法上から論理的 *logisch* に爲されてゐるものであるから、たとひ事實的 *tatsächlich* に若くは單なる經驗 *Empirie* に於てはかゝる部分と個別とは全く同一 *ein und dasselbe* な存在であつて何ら差支はない。而して、かの、全體經濟たる社會經濟若くは綜合經濟を對象とする社會經濟學若くは綜合經濟學が、個別經濟 (意志的統體經濟) を考察に取入れる方法は、かくの如くして個別經濟 (意志的統體經濟) をかゝる全體性に對する部分としてであつて、ここでは個別はたゞ部分として全體への止揚的楔機として考察されるに過ぎないのである。しかもその際、全體經濟學的方法是、その對象に於ける全體性的統一性をば、個別經濟 (意志的統體經濟) の部分としての對立の否定的統一として把握することによつて、その主題の論理的統一性を可能づけやうとするのである。

然るに、これと異つて、經營經濟學は既に縷説せし如く、個別經濟もしくは意志的統體經濟をその自我性 *Ichlichkeit* 乃至、自我的個別性に於て主題となし乍ら、その個別性が社會的なるの故に、自らかまた全體に部分づく *teilnehmen* ことから、全體、竝に、それに於て部分たる他者と、部分であり乍ら個別性に於てある自己との關係が問題とならざるを得ないのであつて、こゝに斯學の科學的獨立性に就ての難關が横はるのであるが、しかも、その主題的性格をば、かく社會的ではあり乍ら、飽



くまでこれをその個別性に於て特質づけむとする經營經濟學的方法からは、經營經濟が、飽くまで自己を個別としつゝ自己がまた全體に對する部分たるてふ楔機を通して、全體を媒介として他の部分と自主的意志のもとに對立的交渉を營む機構と作用とに着眼せざるを得ないであらう。

かくて、かゝる社會關聯に即自的な全體性的認識従つてそれに對する楔機部分性的認識から、經營經濟を異方向づけ、これをその自體性に於ける主題的統一性として把握する方法は、私見に於て、經營經濟たる個別は、全體を媒介とする他の部分との對立に於て、他の部分を他者として、自己の行動を自己自らのうちに統攝するところのそれ自身の統一である、といふ點に於てなればならず、かやうにして、全體と個別、従つて、全體的統一性と個別的統一性とは、相互にその論理的礎元を異にするものであり、その把握に於て方法を異にせざるを得ぬのである。

以上の敘述は、主として、經營經濟がその對外的交通を營むの故のその社會的被規定性、従つてその個別的獨立性の否認から、經營經濟なるものを救出しこれを方法的に主題化し、これをその主題的獨立性に於て把握せむとしたものである。が、經營經濟には、既に述べたる如く、なほかゝる外部關係の外にその内部的關係に於けるそれ自身の統一性の存することから、次にこの内外兩方面の統一の見地から、改めて、斯學に於ける對象の主題的統一性を指定すべきであらう。

かくて經營經濟學に於ける對象の主題的統一 *thematische Einheit* は經營經濟を、その個別的自我性の目的實現に於て、自己の内部的並に對外的一切の行動を、自己自體として統攝するところのそれ

自身の統一と觀ることに於て把握せらるべきものである。

以上で明なる如く、對象性としての全體性と個別性とは、相互にその礎元を異にするといふことは、であり、かくて、社會的な全體性と社會的な個別性とは、それぞれ主題的統一づけの方法を異にし、全體性に於ける主題的統一性が、經濟生活の自然層のうちに求められた自然性の統一性なるに對して、個別性に於けるそれが、意志層のうちに求められた意志性の統一性であることとなる。かくの如く、全體性と個別性とは、それぞれ、その主題抽象並にその論理的統一づけてふ、對象構成上に於ける方法を異にし、その對象性に於ける論理的性質を異にせるものなる以上、かゝる全體性と個別性とは、對象として相互に獨立性のものであり得、従つてまた並立的たり得べく、かくて、前者を對象とせる社會經濟學に對して、經營經濟學なるものが、後者たる個別性を對象とすることによつて、その科學性を維持し得るものと云ふことが出來ると思ふ。



## 第二章 經營學的思惟方法の特質

前章においてわれは經營經濟學の認識對象の一般的性質を比較的詳細に記述し、且つその際、經營經濟學の研究において必須な思惟方法といふものにも若干觸れて來た積である。従つて、茲に再び改めてそれを取上げる必要もないかに思はれるのであるが、私見によれば、現在の世の經營經濟學の研究に省みて、諸種の理由から特にこの點についての明確な理解を必要とする<sup>1)</sup>と信するがために、稍々詳細にこの問題を吟味しておかうとおもふ。

さて、ひとびとが社會經濟學（乃至社會經濟學的實質における國民經濟學<sup>註</sup>）とは別に、獨立的に經營經濟學なる一科の學問の成立の可能性を認め得るためには、そこに独自の側面的認識對象と、それに照應する特殊の論理的合理的な思惟方法とが存しなければならぬ筈である。

**註** こゝに社會經濟學的實質における國民經濟學とは、論理的に言つて社會經濟學的方法による國民經濟學を指意する。但し嚴密に言つてかやうな國民經濟學なるものが現實に存するや否やは問題ではあらうが、例へば、アドルフ・ウェバーが Volkswirtschaftslehre 國民經濟學と呼ぶ意は「國民」Staatvolk, Nation の經濟學、従つてその意味において「國民經濟學」を指すのでなく、「民衆」とか「市民」若くは「社會人」といふものゝ交通經濟學、すなはち、社會經濟學 Sozialökonomie と同義に解する如き<sup>2)</sup>はこれに通からうかとおもふ。

1) 經營經濟學に特有なる思惟方法を以下略稱して單に經營學的思惟方法と呼ぶ。  
2) Adolf Weber, Allgemeine Volkswirtschaftslehre, 1928, S. 4.



尤も、現在では、「國民經濟學」なる命辭は意義曖昧にして漸次廢されゆく傾向が強く、嘗ての歴史學派における Politische Oekonomie 乃至 Volkswirtschaftslehre 若くは古典學派における Political Economy なる命辭は社會經濟學の實質と相俟まらず、今日意識的に眞に「國民經濟學」と呼ぶに相應しきものはその實質が「意志經濟學」<sup>3)</sup>として、實踐的には國民經濟政策的關心に照應する、理論學としての「國民經濟學」が考へられ得るに過ぎないのであるが、併し乍ら、それにも拘らず、今日と雖もなほ「國民經濟學」なる語を曖昧に使用する例はニツクリツシユ、ソエルハイム、アツシユレー (Now Political Economy or Volks-wirtschaftslehre or National-ökonomie—as all these names imply—looks at things from the point of view of a state, a nation, or “society,” as a whole.)<sup>4)</sup> 増地教授等において見能はなうではないから、私は以上の如く一應その命辭に囚れず、純粹に考へて、嚴密に經營經濟學と對立すべき國民經濟學は社會經濟學的實質におけるそれなるべきことを明にしやうとしたに止まる。

ところで先づ、經營經濟學の社會經濟學からの獨立性を主張する諸學者の間にも、兩科學の並立的獨立性を主張するものと、經營經濟學の社會經濟學からの相對的獨立性従つて前者の後者への究局的從屬性乃至被包攝性を主張するものとは、茲で區別して考へておかなければならぬ。

いま、兩科學の並立的性質を主張するものは姑く措き、一般に、經營經濟學なるものは單に社會經濟學から相對的に獨立するに過ぎぬと見る諸主張にも、それぞれ種々の理由が擧げられてゐるのであるが、私見によればそれら相對的獨立說中根據の薄弱なものはこゝでは除き、その裡で最も論理的に秀れてゐるものは、經營經濟學の認識對象が社會經濟學のそれと畢竟するところ同質性のもつて見

る主張である。蓋し、經營經濟學の認識對象が、社會經濟學のそれと究局的に異質的なものと観るとしながら、經營經濟學の社會經濟學への究局的被包攝性を認めるといふことは非條理でなければならぬから。

かくて私の見るところによれば、經營經濟學の並立的獨立性か、相對的獨立性か、といふ問題は、兩科學にそれぞれの認識對象が、互に究局的異質性のもつて見られてゐるか、それとも、共に究局的同質性のもつて見られてゐるか、によつて相岐るものである。而して私見は、兩科學の認識對象は、全く究局的異質性のもつて信するが故に、こゝに經營經濟學における思惟方法の特質を強調する所以でもあるが、同時にその故に、また、兩科學の認識對象の究局的同質性を認めむとする、例へば中西寅雄教授の見解の如きに對立するのみならずかゝる見解を不適當と考へるのである。蓋し、前認識對象化過程における現象そのもの生成過程における異質性と、認識對象そのものにおける異質性とは、全く異なるものであるといふことが教授において混同されてゐるからであり、而してまた、すでに相對的にもせよ、經營經濟學が獨立せるものなることを認める以上、斯學の認識對象を別箇な社會經濟學のうちに止揚的統一に見得べしとは考へ得られないからである。

中西教授が、「理論的社會經濟學に並立した意味に於ける理論的經營經濟學の存在を否定」せられ後者は「理論的社會經濟學の一分科として之に包攝せらるべきものである」とせられるのは、教授にお

6) Weyermann u. Schönitz, Rieger (尤も以上二家は經營經濟學としてではなく私經濟學としていはあるが) Hellauer, 中西教授 等々。

7) 中西教授 經營經濟學 二頁。

3) 作田博士 自然經濟と意志經濟 參照

拙稿 企業經營と國民經濟經營 經濟時報 第四卷第一一號

4) H. Nicklisch, Wirtschaftliche Betriebslehre, 1922, S. 1.

F. Söllheim, Zur Methodologie der Einzelwirtschaftslehre, Archiv der Fortschritte betriebswirtschaftlicher Forschung und Lehre, 4. Jg., 1927, S. 2.

W. Ashley, Business Economics, 1926, p. 6.

増地教授 改訂經營要論 一三頁、一五頁

5) Nicklisch, Sieber, Söllheim, Lisowsky, 作田博士、高田博士、増地教授、

馬場教授等々。



いては「個別資本の運動はそれ自體としては社會的總資本の運動と等しくはない」が、畢竟「個別資本の運動は社會的總資本運動の部分であり、社會的總資本の運動は諸個別的資本の運動の全體であるが故」(肩點筆者)にであり、教授が兩者の運動を單に部分と全體との關係と見られてゐるからである。しかも教授は、「この部分と全體との關係、個別資本の運動と社會的總資本との關係を、單に一律背反的な、從つて形式的な雙關としてのみ理解すべきではない」とし、「それは同時に兩者の對立の統一に於て、即ち矛盾の止揚として把握すべきである」とせられてゐる。要するに教授において經營經濟學なるものは、「單獨の營利經濟又は企業を、より嚴密には個別資本を、換言すれば社會經濟の、より嚴密には社會總資本のモメントであり、而してモメントたるが故に社會經濟と對立する企業を、その對象とする」(肩點筆者)ものであり、「斯かる對象は社會經濟のモメントであるが故に、同時に、その否定的統一としての社會經濟に包攝され」、「この故に企業を對象とする理論的經營經濟學は社會經濟學の一分科であり、相對的獨自性を有つと同時に、社會經濟學に包攝される限りに於て、絶對的獨立性を拒否される」(肩點筆者)のであつた。すなはち、教授においては現象そのもの生成過程における異質性が、そのまゝうちに、科學の認識對象化過程における異質性と等置せられてゐることが明に看取せられる。

右において知らるゝ如く、中西教授においては、經營經濟學の對象は最初から全體たる社會經濟學

の、對象の部分として把握されておるのであり、部分と全體とは、部分が全體に對する對立的否定物たる限りで、異質的ではあるが、科學の對象性そのものについて言へば、部分と全體とは畢竟同質性の對象たることを認められねばならないであらう。何故なら、部分と全體との關係は部分が畢竟モメントとしてその否定的統一としての全體に包攝されねばならぬことを、教授自身がすでに豫定せられてゐるからであり、從つて、教授によれば、經營經濟學の運命は、社會經濟學の對象を明にするための單なる過程的運命として、社會經濟學そのもの分科、それ故にこそ畢竟同質性の對象たることを認められねばならないからである。

かくて教授による經營經濟學なるものは、社會經濟學から獨立の科學たり得ぬことは當然とすべく、私見を率直に言ふならば、教授の經營經濟學は經營經濟學たり得ざるものであり、社會經濟學の部分學をば單に經營經濟學と稱したものに外ならぬこととなる。<sup>10)</sup>蓋し、究局的には全體的なる社會經濟學たるに至るべき部分科學の對象性は、全體科學の對象性と單に異質的たり得ないからである。私見は、古林教授が、經營經濟學の對象性の特徴について、中西教授の反對にも拘らず、その「目的活動、意思活動」たるの點にこれを認めやうとせらるゝ主張に賛成するものであり、中西教授の如く「目的活動意志活動」を拒否するところには經營經濟學なるものは初めから生じ能ないといふ點に斯學の基底としての約束が暗然裡に認められてゐるのでなければならぬ。

10) この點については、教授が「經營經濟學」はより嚴密には「私經濟學」とせらるゝ點からも窺知せらるゝであらう(中西教授 前掲書五八頁)。

11) 中西教授 前掲書 四九、五〇頁參照。

8) 中西教授 前掲書 一九頁。

9) 同上 五七、五八頁



之を要するに中西教授においては經營經濟學の對象は斯學にとつて獨白の對象ではなく、社會經濟學のそれと同質性のものであるといふ點に歸着する。なほ、その他の、經營經濟學に對して單に社會經濟學からの相對的獨立性を認めるにすぎない諸學者の主張は、要するに一括して、概ね中西教授と同様に兩科學の對象性の究局の同質性を許さざるを得ないものか、或は、社會經濟學に對する經營經濟學の單なる資料性を認めるものに過ぎないかのいづれか一である點において共通である。いづれこれらの事柄は後段において稍詳細に説かむと欲するがこゝには簡單に止めておく。

二

かくてわれ々の考察は、經營經濟學と社會經濟學との並立的獨立性を主張する諸學者の主張へと趨く。然るに、兩經濟學が並立的たり得べしとする學者の主張の共通な一重要點は、要するにそれら二箇の科學が互に異なる認識對象——側面的對象を有するとなす點であり、すなはち、經營經濟學の對象は、社會經濟學のそれとは對象性、Gegenständlichkeit<sup>1)</sup>の上で異質的なりとする點である。かかる異質性は、社會經濟學の對象の特質が經濟の綜合的自然層であるに對して、經營經濟學の對象の特質が經濟の統一者的意志層であるところに本いてゐるものである。

谷口吉彦教授によれば「經濟事象における二つのものとは」一は個別經濟主體の統一的意志の直接の結果としての經濟活動、二はこれらの意志的活動の綜合の結果として社會的に現はれ來る經濟現象

1) 勿論、それらのうちには對象の相異が根源的なりとするものと、方法(Methode 若くは Gesichtspunkt, Betrachtungsweise)の相異が根源的なりと考ふるものとの相異はあるにしても。2) 3) 拙稿 經營とその學問 經濟時報 第一卷第八號 昭和四年十一月號 四一頁、經營學講話(三) 企業經營 第四卷第三號 昭和六年 三月號 五五頁

これである。今かりに一を經濟活動 (Wirtschaftliche Tätigkeit) とし、他を經濟現象 (Wirtschaftliche Erscheinungen) とし、名辭の當否は姑らくおき、謂ふ所の經濟事象にこれら二つの區別さるべきものゝ存することは、何人も疑ひえない事實で、「一の經濟主體がその意識的計畫の下に一定の經濟行爲を意思的に統一する活動、即ち企業を計畫し實施し繼續する活動、物財を生産し賣買し消費する活動、これらはすべて前者に屬する。然るにかくの如き個別經濟の意思的活動が、多數に社會的に競合する時は、そこに各自の意識から獨立した無意識的な從つて無意思的な一の社會現象としての經濟事象がそこに成立する。これ後者であつて、物價現象・金融現象・景氣現象の如きすべて之に屬する。」「經濟活動と經濟現象との本質的區別は、意思性の有無に求むべきであらう。個別經濟主體の經濟活動はその主體の意思活動である。」「從つて無論それは意識的活動であり、また必然に一定の目的を到達せんとする有目的活動であり、同時に意思による統制活動である。これに反して社會に成立する經濟現象は、何人の意思にもよらざる無意思現象であり、更に無意識的現象である。從つてそこには必然に何等の意識的目的もなく、意思的統制もない」と。尤も、教授は、右の如き立言において經濟活動と經濟現象とをすでに認識對象的に拾象されたる各側面として述べられてゐるから、「各自の意識から獨立した無意識的な從つて無意思的な一の社會現象」といはれ、經濟現象をもつて「無意識的現象である」と説かれるのは、社會經濟現象が發生的にみてなほ無意思的であるといふが如き意味でもなく、また、かかる現象の存在に對して經濟活動者が無意識であるといふが如き意味でもない。教授においては、社會經濟現象をもつて成立的に、從つて認識對象的にすでに經濟活動者の意思若くは意識の否定的に統一されたるもの、從つてその拾象化されたものとして説かれてゐるのである。このことは、教授が拾象化における思惟過程的なものと現象過程的なものとを區別されてゐるに拘らず、偶々教授における多少の立言上の不備のために誤解なきことを欲して序に附言しておきたい。

4) 谷口博士 商業組織の特殊研究 二—四頁。  
5) 同上 六、七頁



かくの如くして教授によれば、「意思性の有無は一の質的相違である。」教授によれば、われごとく同様に、「個別經濟と社會經濟との關係を單なる部分と全體との關係と見ることの出来ないのはこの故——質的相違（筆者註）——であつて、「なるほど個別經濟は社會經濟の構成分子ではある……けれども後者は前者の單なる算術的總和ではなく、そこには一の質的發展が認められねばならぬ。」しかも前にも私が述べた如く、この教授の質的發展なるものは、兩箇の科學の對象の上では發展ではなくして、對象上での異質性の故に喰ひとめられて、中西教授の場合の如くに決して經營經濟學の社會經濟學への部分性乃至被包攝性へ發展するものでないことはわれごの注意しなければならぬ點である。

さらに古林教授についてみても、教授は、「經營經濟學を國民經濟學若しくは社會經濟學と竝立する一の獨立科學としてみとめる通説の立場に於て、「經營若しくは經營經濟を、綜合經濟若しくは社會經濟と對立せしめてゐる」ところの、「この對立の關係が明かにされるだけの充分な説明が與へられなければ……、未だ充分とは云へない」として、「經營經濟學の研究對象としての經營——若しくは經營經濟（筆者註）——の規定に於ては、その綜合經濟に對立する特質を明かにすること」を要求せられ、進んで諸家の主張を鮮かに批評せられた後、經營若しくは經營經濟の特質をば、「右のやうな相違はあるが、しかし何れも統一的意思による目的活動・組織的な活動を指示してゐることは共通で

6) 谷口博士 前掲書 五頁。  
7) 古林喜樂教授 經營概念の規定について 經營經濟研究第七冊 三二—三五頁。

ある。支配の關係と云つても前述の如く、法則に支配される關係とか、見えざる手に支配される關係と云ふのではなく、統一的意思に支配されてゐる關係である。……従つて右に述べた諸々の見解は、こう云ふ統一的意思による目的活動・組織的の活動と云ふ點で、統一的意思による統制のない・計慮計畫のない・所謂無政府的な綜合經濟に對して、經營現象の特質は之を明かにしてゐるのである」(肩點筆者)とせられてゐる。こゝにもわれごは教授によつても經營經濟學の特質が經濟意志層なるに對して、社會經濟學の對象たる社會經濟が無政府的な綜合經濟としてすなはち經濟の社會的自然層として示されてゐることを見るのであつて、畢竟經營經濟學と社會經濟學との認識對象はその異質性において把握されてゐることを知り得るのである。註

註 尤も古林教授は、同論文において經營經濟學の歴史性を強調され、「資本の運用によつて剩餘をうることを目標とする全經濟過程中に於ける部分的な——こゝに部分といふのは質的部分ではなくて量的部分である（筆者註）——目的活動」より簡潔に云へば、個別資本に於ける剩餘獲得の目的活動をば經營經濟學の對象として確保せられ、従つて、かゝる部分以外の經濟目的活動の對象性を認めてゐられぬが、このことは兩經濟學の對象の異質性たることを轉覆さすものでないから、私は本文における教授の引用文によつて充分であると考へてゐる。

さらに増地教授に従へば、「經營經濟學の對象——は經營經濟である」<sup>10)</sup>が、かゝる「經營經濟は一箇の單獨經濟(個別經濟) Einzelwirtschaft」であつて、「單獨經濟は統一ある意思によつて指揮せらるゝ

8) 古林教授 前掲書 五〇頁。  
9) 同上 五五頁。  
10) 増地教授 改訂經營要論 一一頁。



經濟である」と述べられてゐる。然るに之に反して綜合經濟（國民經濟、社會經濟）は多數の單獨經濟の結合によつて組織せられ、統一意思の支配がない。「國民經濟學—その名稱の當否は別として（筆者）—は綜合經濟、即ち多數の各種單獨經濟の活動によつて生ずる共同作用を研究するものであるから、常に綜合經濟の構成分子（筆者肩點）としての單獨經濟活動を觀察する。即ち全體の立場から分子の活動（筆者肩點）を觀察するものである。然るに經濟現象の究明はこの全體の立場よりせる觀察のみでは不完全であり、別に分子自體の立場より分子の活動を觀察することが必要である。」<sup>11)</sup>「……國民經濟的または世界經濟的觀察の外に……單獨經濟的觀察が可能であり、且つ必要である」とせられてゐる。説明は必しも充分とは云ひ得ないが、その意は綜合經濟學の立場、従つてその認識對象は「統一意思の支配のない『全體』であるに對して、經營經濟學の立場は「分子自體の立場」であつて、「分子自體の立場」とはもはや分子の立場ではなくて、「統一ある意思によつて指揮せらるる」單獨經濟の立場であり、従つてそれから認識對象が求め出されねばならぬから、明かに綜合經濟學の對象とは意思の有無によつて相岐るゝ異質性のものと見なければならぬ。

## 三

さて以上述べたる諸家の主張によつて、われ／＼は社會經濟學の認識對象と經營經濟學の認識對象とは、互にその異質性によつて異なることを知り得たのであつた。すなはち、社會經濟學の對象は、發

11) 同上 一三—一六頁。

生的には、「目的意志」から成立するが、認識對象的には、かゝる「目的意志」は捨象せられ、そこにはたゞ相互作用から成立するところの社會的に綜合的な經濟の自然層のみが問題となるのみである。これに反して、經營經濟學の對象は、發生的にも、且つ、認識對象的にも、「目的意志」は確保せられ、これあるによつてのみ、その認識對象の特質が保證せられ得るものであると言はねばならない。

然るに、兩箇の經濟學におけるかゝる重大なるそれぞれの認識對象そのものゝ異質性が、論理的に確保せられるためには、同時にそれぞれの經濟學の對象の認識上でのそれぞれ互に異なる特殊の思维方法が要求せられはしないだらうか。しかもこのことは世の多くの經營經濟學において殆んど省みられないところに徴して私見はこの點を重要視しなければならぬと信じてゐる。

私は前章において、およそ經濟學の研究において理解的方法が重要な所以を縷々述べ來つたのであるが、いまやこれを率直に言ふならば、かゝる方法が特に重大な特殊の意義をもつのはそれはわが經營經濟學の研究においてあることを告げねばならぬ。元より、社會經濟學の研究において理解的方法が重要ならずと言ふのではない。例へば、私經濟的の一次カルテル若くはトラストが意志目的的である特定の政策をとりしことにより、社會經濟學はそれが社會經濟における價格現象若しくは景氣現象に如何なる意味の影響を齎したか（同時に第二に併せてかゝる政策が當該カルテル若くはトラストに如何なる意味の影響を結果したか）といふ如き、或は、世界經濟關聯中における一國家がそのプロ



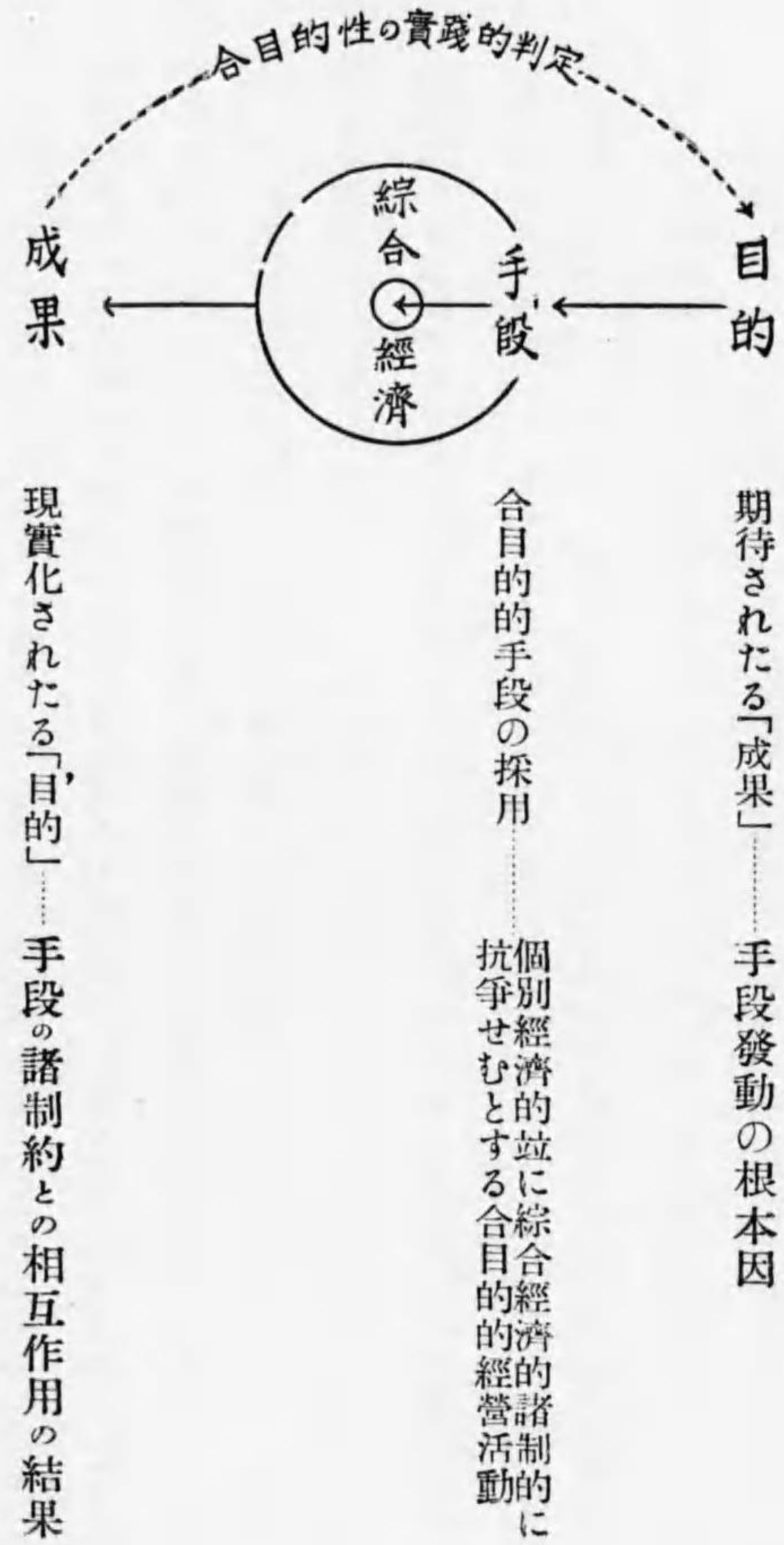
ツク經濟政策の一端として高關稅政策を採用したことにより、社會經濟學はそれが世界經濟的價格變動若しくは景氣變動に如何なる影響を齎したか（同時に第二に併せて當該國の國民經濟に如何なる意味の影響を結果するに至つたか）といふが如きは、かゝる理解的方法の例示に他ならない。が、なほ理解的方法なるものは、上述の如き政策者の目的意志から發動せざる單に純粹な原因、例へば天災的破壊の如き自然的原因によるものについてもこれを考へることが出来るのであつて、一地域に發生せる天災の如き自然的原因についても、それが原因となることによつて社會經濟に如何なる意味の影響を結果したかを理解しやうとする如きもまた理解的方法の範圍に屬する。すでに社會經濟學の認識對象が經濟自然層であり、目的意志を捨象せるものなる以上、それ故にたとひ一つの現象が發生的には目的意志に出でたる場合においてさえ、すべての場合を通じて、社會經濟學における理解的方法なるものは、一事象の發生を方法上純粹に原因と觀ることによつて、仍つて惹き起されたる他の事象を方法上純粹に結果と觀る仕方を通じて、原因、結果間の關聯を意味的に理解しやうとするにある。これ全く社會科學たる經濟學一般が自然科學と異なる特質であつて、自然科學においては、方法上の意味を超えてなほ對象そのものが純粹に原因、結果の純因果的關聯以外にそのものゝ意味を考へ得ないのに對して、社會科學従つてまた經濟學においては方法上一應二箇の事象を因果の關係において見るとも、なほそこに意味の理解すべきものゝ存する所以に外ならない。尤も、社會經濟學の認識におい

ても、原因と觀らるべき事象が人間の目的意志に發足せる場合の方がその因果關聯上の意味の理解がより鮮明であらうことは蔽ふべくもないであらうことは附言して宜いとおもはれる。

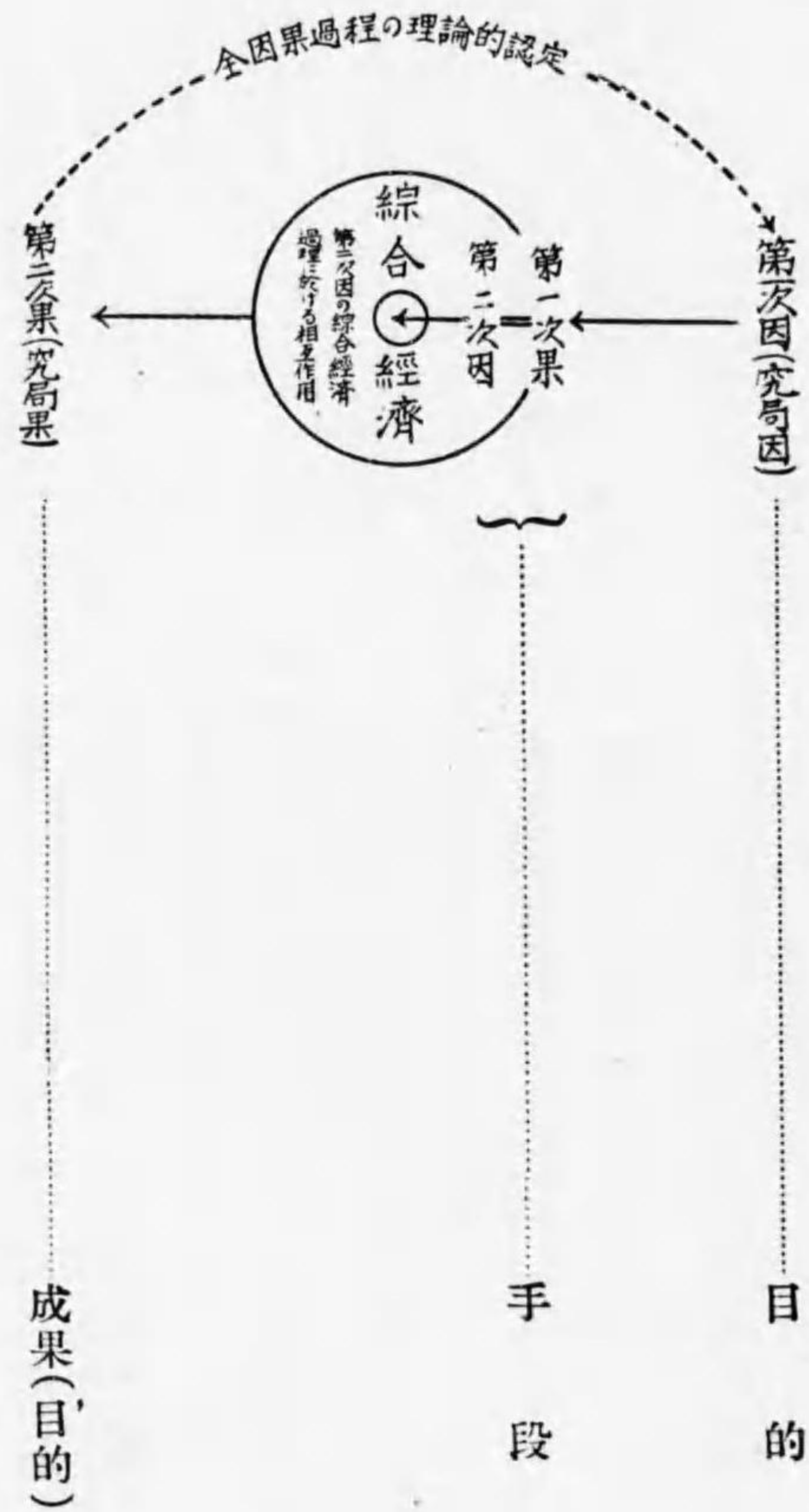
併し乍ら、われゝの場合特に注意すべき事柄は、理解的方法なるものが、特殊の純粹性においてわれゝに顯著に意義づけられるのは、それが經營經濟學の研究においてあらうと考へられる。蓋し、經營經濟學の場合においては、理解の方法は、事象が純粹に「目的意志」に本いて發生し、これを確保し、そこでは純粹に「目的」「手段」の意味關聯において理解が遂げられるからであつて、事象の究明認知が全く求動的に行はれる得るからである。しかもこのことは、一に全く經營經濟學の認識對象の特質性に本くものであつて、従つて經營經濟學の認識獲得上における思惟方法の特質を物語るものでなければならぬ。

すなはち、經營經濟學においては、その認識對象たる「經營經濟」を發足せしめるものは目的意志でなければならぬことは前に述べたとほりである。が、意志する目的とは、豫想的に期待せられたる成果である。かゝる目的たる成果に對する期待が動機となり、そこに合目的なる手段が採用され、かくて實施されたる手段の故に何らかの成果、すなはち實現されたる目的が結果するとともに、そこに必然的に成果の合目的性的（經濟性的）批判が行はれてゐるのである。





現實化されたる「目的」……手段の諸制約との相互作用の結果



\* 因に、こゝで序乍らくれぐれも注意しなければならぬことは、前に經營經濟學は經濟意志層を捨象し、經濟の自然層を捨象するといった意味についてである。この立言は認識對象的に求めるところが、經營經濟學にあつては經濟意志層であるといふ意味であり、そのために斯の學問が經濟自然的場面すなはち綜合經濟を考察の外に置くといふことでは決して無いのである。このことは上掲の圖表についても明かなごとく、經營活動は、その流通の部面において綜合經濟における相互作用を通過せなければならぬこと勿論であるから、この活動の行はれる舞臺である綜合經濟を考察外において意志層の認識が行はれないことはロビンソンでない經營經濟にとつて當然の事柄でなければならない。即ち、綜合經濟をば自己を實現する地盤としてそのものゝ内から自己の合目的性を求めるものであればこそ、その地盤が必然的に考察關聯に入り來るといふのである。誤解のないために一言する。



かくの如く、經營經濟學の對象たる經營經濟の生活事象は、すべて「目的」「手段」の意味關聯において究明認識すべきものであるが、すべておよそ理論的科學は、政策的關心から隔離してあらねばならぬといふ方法上の要求から、因果化的説明を要求せられてゐるものである。従つて經營經濟學もまた一箇の科學たる以上、かゝる「目的」「手段」の意味關聯を、方法上ではこれを因果化的説明方法において究明せねばならないだけである。すなはち、前掲圖表の第二において示した如く、目的を究局因（第一次因）として、これに對する手段を第一次果と見るとともに、かゝる第一次果は同時にそれがまた第二次因として、成果たる究局果（第二次果）に至る全經營經濟過程をば、かくの如き因果化的方法によつて闡明せねばならぬ。但し、かゝる因果化的方法はそれが認識手段として、その實體があくまで「目的」「手段」であることは斯學にとつて忘れてはならぬ重要な點である。

もし論者ありて、經營經濟學がはたしてかくの如き「目的」「手段」の關聯性を研究するものならば、斯學は科學たり得ないで技術學 *Kunstlehre* たらねばならぬと言ふやうな素朴な反對を主張するならば、われ／＼はこれに對して、「價値の判斷」 *werturteilen* と「價値關聯づく」 *wertbeziehen* こととは全く異るといふかのリツカートの反問を提出せねばならぬであらう。蓋し、われ／＼においては、一定の目的に對する政策的適合性が問題となるのでなくして、現實的所與としての「目的」「手段」の生活現象における理法をば因果化的方法によりて認識せむとすることが問題であるに過ぎないからである。

四

經營經濟學の研究においては、かくて先づ經營經濟なるものの目的の把握が根源的重要性をもつ。すなはち、經濟者における目的 *Endzweck* を究局因としてその實相を把握することが第一の要件であると考へねばならぬ。

**註** この限りからいつて、獨逸學者の屢々説くごとく、經營經濟學の中心問題 *Kernproblem* を、或は組織問題 *Organisationsproblem* なりと言ひ、或は價値の循環の問題 *Wertumlauffrage od. problem* なりとする<sup>1)</sup>ときはいまだ適確なる表現ではない。蓋し、組織 *Organisation* なる命辭そのものは、社會經濟學において問題となるときもに經營經濟學においても使用されるが、經營經濟學の對象としての組織 *Organisation* は言はく組織化的組織 *Organisation durch Organisierung* であるに對し、社會經濟學における組織は社會經濟の綜合機構組織 *Organisation als Sozialgegebenes* でなければならぬ。同様に、價値の循環もまた、價値の社會的循環 *sozialer Wertumlauf* が社會經濟學の對象たるに對して、經營經濟學にありては、價値の合目的循環 *weckmässiger Wertumlauf* でなければならぬ。命辭の問題に過ぎぬかの如くに似て、科學の思惟方法の自覺の程度と關聯する意味の問題でもあると思量するがために附言する次第である。

寔に經營經濟學にとつての核心的問題なるものも、その形式は兎も角として、その實質は經營經濟における究局因たるかゝる目的の把握よりこれを決すべきものである。

併し乍ら、先づ第一に、經營經濟における目的、すなはち、經濟者における目的なるものは、これが觀察者にとつて恆に必しも明瞭に知り得らるゝものではない。それ故にひととは然るとき經營經濟者

1) E. Walb (Die kaufmännische Betriebswirtschaftslehre),  
F. Sölheim (Ibid),  
R. Erdmann (Grundfragen einer Organisationslehre).  
2) H. Nicklisch (Grundfragen für die Betriebswirtschaft)  
" (Wirtschaftliche Betriebslehre),  
F. Sölheim (Ibid.),  
E. Schmalenbach. (Dynamische Bilanz),  
馬場教授 (經營學方法論 經營學研究),



の手段活動(第一次果||第二次因)を考察し、そのものからその意味を考察することによつて彼の目的(第一次因究局因)を指定し、若くは、かゝる手段活動(同上)と實現成果(第二次果||究局果)とにわたる微密にして且つ遺漏なき意味關聯の考察を通じて彼の目的(究局因)を指定しやうとする。要するに、經營經濟における目的、手段、成果の三要素の一乃至二の不明は、爾餘の二乃至一の知られたる要素よりこれを闡明すべきである。蓋し、經營經濟にあつては、彼が統一する限りの經濟は、その内的構造においてすべて意味關聯を有つべき筈であるからである。

第二に、經營經濟の目的は、その異なるに應じて經營經濟そのものゝ種類、性質を異にし、互に異なる諸種の經營經濟の存在を許すことゝなるのであるが、かゝる經營經濟の種類は、その目的を典型的 *typisch* に區別づけることによつて、支配的且つ原則的にこれを爲さねばならぬ。蓋し、經營經濟の目的は、その個別的・具體的態容においては千差萬別にして到底これを定型的に類別し能はないこととは言ふまでもないからである。然るに、學者のうちにはこの個別的・具體的目的における千差萬別性の故に、經營經濟をその目的から區別することが却つて非合理的であるとするとする人々があるが、社會科學的方法の一特質に疎しといふ非難は甘受しなければならぬであらう。具體的生は決してその儘にて科學的に把握し盡くされ得るものでないからこそ、方法が要求されざるを得ないのである。

第三に、經營經濟の目的は歴史的に變化し、決して一定不動のものたり得ない。手段もまたこれに

従つて變化せざるを得ぬ。元より目的の變化は自發的自體的であり得るとともに、他動的不可避的でもあり得る。われわれの考察はその實相の把握をさへ謬らざることにて充分である。但し、茲に注意すべき事柄は、經營經濟現象においては、往々その手段の顯現の何らかの仕方のために、その目的が一時的若くは永續的に掩蔽されることがある。例へば、營利經濟が對社會的、實は對顧客的にその手段を充實することあるがために、手段と目的との鑑別を誤ることは世の多くの經營經濟學者の極めて屢々陥れる誤りである。蓋し、營利經濟の對顧客的給付物(有形、無形の)は、彼にとりて手段であるとともに、同時にかゝる給付物は相手方の目的であることから、營利經濟にとつての合目的に合理的な手段——それは同時に反面において顧客にとつては充實せる目的であるが、——であるに過ぎないに拘らず、營利經濟にとつての反對給付物たる目的を度外視して、このものゝ手段を目的と履き違へることは重大なる錯誤に陥れるものであらう。

第四に、經營經濟學においては、經營經濟の全的認識に到達する過程、すなはち經營經濟學の構成過程として、經營經濟の種的一般的考察から出發すべきであつて、逆にその類的||一般的考察から發すべきものではない。例へば、企業一般の考察には先づそれに先立つて各企業種別部門の考察から、甲部門一般の考察には先づそれぞれの裡の經營力的な階級的種別から、發足すべき如きである。これに對して社會經濟學にありては、その認識對象が社會的相互關係の作用にあることから、經濟一

3) 例へば R. Seyffert (Über Begriff und Aufgaben der Betriebswirtschaftslehre, 2. Aufl. 1925), 増地教授(經營經濟學)の如き。



般が最初から考察過程に入り來つて然るべき方法となるであらう。併し乍ら、かくの如く經營經濟學的方法が經營經濟の種的「一般的考察から出發するのを特質とするといふことは、斯學の認識對象を個別物に陪せしめよといふことを意味するものではない。蓋し、科學は何らか一般を問題とするものであるから、種的一般から類的一般へ、而して最高類的一般への、構成過程を斯學方法の特質なりと言ふに過ぎないのである。

## 五

以上稍々冗長に過ぎたる觀あるが、およそ經營學的思惟方法の特質について、これに合流すべき主要な諸點に説き及ぼして來た積りである。これを要するに經營學的思惟方法の特質の最重要點は、經營經濟の認識について、これをそれにおける「目的」「手段」の意味關聯の因果化的考察の方法に本いてなされねばならぬといふことに歸着する。併し乍ら、いまこのことを多數の學者の主張に照し合はすとき、われ／＼は經營經濟學の研究におけるかゝる特異的な、しかも眞の特殊の思惟方法への自覺なるものが極めて稀薄なる實例をばはなは多く見せられてゐるのを悲しまざるを得ない、いまその單なる一例として、わが國における最も普及化した勞作の一たる増地東京商大教授の述べられるところを引用して、私見を加ふることを教授に許されたいとおもふのである。

以下私が批評しやうとしつゝある教授の主張とは、同様の主張に對しては、嘗て私はこれを相當詳

細に引用論評したことがあるから、こゝでは許す限り重複を避ける意味において、教授の主張をば主としてその最新版たる「改訂經營要論」の中から聽かうと欲する。

教授は同書において述べられる。「今日の生産經濟は利潤獲得を目標とするものが多數を占めてゐる。併しまた公益を圖らんが爲めに營まれる公有生産事業の如き、又組合員の利益を助長せんが爲めに營まれる協同組合の事業の如き利潤獲得を目標とせざる生産經濟も漸次増加しつゝある」<sup>1)</sup>として、今日の經濟社會において營利的生産經濟と非營利的生産經濟とが並び存してゐることを先づ強調してゐられる。(尤も、協同組合の如きものが形式的解釋においては兎も角眞の意味において獨立の生産經濟なるや疑問を挿む餘地もあらうし、また、生産經濟の領域内のものであるとして、生産者らが構成する組合の如きについてはたとへ組合自體が自らのために營利を目的とせないとするも、實質的にはそれが構成者たる生産者自身の營利活動の外的延長として、實はそれら生産者らの營利活動の意味領域内に屬すると私は見るが、これらのことは現在のところ校葉の問題として姑く問題の外におかう。)

然るに教授は更に筆を進められて、かゝる營利的生産經濟と非營利的生産經濟との並存の「故に今日では生産經濟の共通的特質として營利目的を擧げることとは適當でない」<sup>2)</sup>とせられることによつて、本來互に異なる二者の相異を、共通化への要求の故に譯もなく抹殺し去られてゐる。(肩點筆者)

ところで言ふ迄もなく、營利經濟とは附言すれば營利目的の經濟であり、教授の言に従ふとも、それは「利個獲得を目的とするもの」(肩點筆者)であつた。然るにまた、教授によつてかゝる營利經濟に

1) 拙稿 經營學講話(十二) 企業經營 第六卷第一號 昭和七年一月號 八四—九〇頁。  
2) 増地教授 改訂經營要論 一四頁。  
3) 増地教授 前掲書 一四頁。



對照せしめられた公益經濟は、加言すれば公益目的經濟であつて、同様に教授の言に従へば「公益を圖らんが爲めに營まれる」ものであつたのである(肩點筆者)。かくておのづから明白なことは、教授の經營經濟において「目的」がそれから引きちぎられてゐるといふこと、すなはち、經營經濟における「目的」の抹殺といふことが、一に全く元來異なる二者を「生産經濟」のもとに共通化せしむがためにのみ企てられたものであることは、いまや疑を挿む餘地が無いこととなる。しかも問題は、かくてもなほ營利生産經濟の經營經濟現象なり、また、公益生産經濟の經營經濟現象なりがそれぞれはたして矛盾なく説明し得らるゝであらうか、といふことである。蓋し、「目的」を抹殺されたる經營經濟の「手段」はもはや手段たり得ぬであらう。とゞもにそこには必然的に「生産」といふ技術的形骸以外には、何らの社會的因果的説明の餘地も存し能はないこととなりはしないか。何故に、かくしてまで教授においてかくの如く異なる二種の經營經濟が一般化されねばならないか、の問題はこゝでは觸れずに置く。要はたゞかくの如き方法によつて經營經濟學の認識對象が説了し得るであらうかといふ疑問を述べるに止めたい。

おもふに、「目的」なるものを教授が如何に輕視され、進んで矛盾化せられてゐるかといふことは、教授の次の如き立言によつて瞭かに證明せられる。すなはち教授は、一方では生産經濟、すなはち、教授における經營經濟なるものをもつて、他人のために財貨を生産することを目的とする經濟であり、

他の「單獨經濟の爲めに財貨を獲得し、準備することを目的とする經濟である。生産經濟と稱せられるものこれである」(肩點筆者)と述べられつゝ、同時に他方では、前に引用せる如く、「今日の生産經濟は利潤獲得を目標とするものが多數を占めてゐる」とせられてゐるのである。他人のために財貨を獲得し準備するとは畢竟他人に財貨を提供することを目的とする經濟であると言ふのと同義でなければならぬ。然らば私が教授に借問したき點は、一體生産經濟すなはち、教授における經營經濟なるものは、自己のために利潤獲得を目的とするものであるといふのが眞實であるのか、或は、他人のために財貨を提供することを目的とするものであるといふのが眞實であるのか、そのいづれであるか、といふ點である。教授のかやうな立言をそのまゝ許すためには、われ／＼は經營經濟なるものは互に全く異なる二つの「目的」を同時にもち得るものであるといふやうな矛盾を許さねばならぬこととならう。かゝる立言が不用意に本く過失——よしそれが重大な過失にしろ——ならば兎も角、少くとも教授がかゝる二つの立言が經營經濟についてともに成立し得ると考へられてゐるとならば、明かにデイレムマに陥入つてゐられると言はなければならぬ。すなはち、一箇の經營經濟それ自體における目的の反立に本く經營經濟自身の自己分裂か、然らずむば、生産經濟のもとへの共通化の企てを廢棄することによつて目的の相異に本く異質的な二種の經營經濟の存在を認識對象的に承認されるか、いづれか一でなければならぬ。が、そのいづれにせよ教授の立言は全體として論理を一貫してゐないとい

4) 増地教授 前掲書 一四頁。

5) 前引用所参照。



ふことに歸着する外はないことになる。

なほ、企業概念の措定における教授の論旨にも、「目的」の輕視から、同様な批評を容れ得るが、それについては嘗て私見を述べたから、こゝには省略しておきたい。

おもふに、教授の經營經濟學においては方法上「目的」「手段」の重要性の認識に關して不十分なるところがあつて、恐らくこの點については教授がザイフェルト教授、ニツクリツシュ教授等からの影響に因るのであらうけれども、要するに教授御自身の省察として私見とは異るところはなほ大であることとは否み難いであらう。尤も前にも述べた如く、かゝる事柄は今日の經營經濟學においてははその例に乏しからざるところではあるけれども、がさればこそ私見はこの點の重大性に鑑みて特に多少詳細にこれを述べた所以である。

以上、要之、本章においては、經營經濟學の研究において必須的な思惟方法の特質を述べ、「目的」…(因的目的と果的目的)「手段」の意味關聯における因果化的説明方法をもつて斯學の方法の支配的な特質を述べた積りである。

6) 拙稿 經營學講話(十二) 前掲書参照。

### 第三章 經營經濟學の概念措定における領域 本質學的方法と歴史事實學的方法

—

本篇第一章において經營經濟學における方法一般について述べ、第二章において經營學の思惟方法の特質一般に關して説きたる著者は、以下進むで積極的に經營經濟學の認識對象たる經營經濟の本質的内容について述べねばならないのであるが、豫じめそれに先立つて特にいま一章を割いて本章に充て經營經濟學における概念構成についての著者の名付けてもつて領域・本質學的方法と歴史・事實學的方法と稱する方法上の差異を記述し、概念構成上のこれらふたつの方法が究局經營經濟學において現實科學的に統一されねばならないことを明にしやうと欲してゐる。蓋し、本章の目的は、斯學における概念構成について過去において論議を惹き起し、また、將來においても或は生すべき紛議について、これを無用に歸せしめむとする用意から出でてゐる。

近時、經濟學一般の領野、特に經營經濟學のそれにおいて、領域・本質學的科學觀と歴史・事實學



的學觀とは、かの一般性的把握方法と歴史性的把握方法といふ稱呼によつて、あらゆる交渉的機會を捉へて相對立しつゝあるかに見える。併しながらかやうなふたつの科學觀は、學問の進歩と發展の過程において、はたして眞に對立をなすべきものであらうか。答へて曰く、否と。おのれ自身が在る領域自體に内省的凝視を投げることを徒らに蔑すみて、たゞひたむきに現身の自己のみが誇られやうとする如くに、かの歴史性論者はことごとくに一般性をば批難する。云はゞ一種の小兒病的批難に過ぎない。言ふまでもなく、經濟現象もまた歴史的事實である。このことは疑はれる迄もなく不動である。問題はたゞそのものが、科學の對象となされるとともに發生する。

社會科學の、従つてまた經濟科學の歴史性、非歴史性に關する、わが國學者のほゞ穩當なる考察を、吾々は小泉信三教授の「經濟原論」において、さらに殆んど時を同じうして、馬場敬治教授の「經營學研究」およびその後における教授の著書「經營學の基礎的諸問題」においてこれを觀た。特に馬場教授は、これをフツセルの事實學、本質學に關聯せしめることによつて、氏の謂ゆる「事實學的經營學」と「本質學的經營學」との關聯的非對立性を主張せられてゐる。私自身としては必ずしも教授の主張に悉く賛同するのではないが、大體においてその妥當性を認めるものであると、かゝる問題はなるだけ早く解決しておくことを斯學發達のために祈望してゐる。そこで私は本章において、教授がとくに詳細をつくされたフツセル的見解に直接深入りすることを姑く控へ、少しく方面

を異にして、この問題に關する諸見解を、主としてマルクス經濟學論陣そのもの、うちから引出してきて、これを領域的存在論(主としてラスク的な)および領域的本質學(主としてフツセル的な)に關はらしめることによつて、主張的に大體、馬場教授と同じ考を抱くものなることを表明しやうとおもふ。

## 二

一定の歴史社會はそれに特有なる經濟學的概念と法則とをもつ。「資本家的生産方法が支配的である社會の富は一つの『龐大なる商品集合體』として、個々の商品はその成素形態として現はれる」<sup>1)</sup>マルクスはかく前提をとることによつてその研究をば「商品の分析」をもつて始めたのである。レニンはそのマルクス主義序論に於て述べる——「マルクスは資本論のなかで『この著作の最後の究極目的、der letzte Endzweckは近代社會の』、すなはち、資本家的、市民的社會の『經濟的運動法則を明にするにある』と云ふ。一つの與へられたる、(且)歴史的に限られたる社會の、生産諸關係を、その成立その發展および消滅において究明すること、——それが、マルクスの經濟學說の(全)内容である」<sup>2)</sup>と。實際、マルクス自身はそれ以外に經濟學があり得るかどうかは彼が終始問題とせなかつたところである。然るに、ブハーリンは、「資本家的商品生産の基礎に立つ社會の終焉はまた經濟學の終焉である」と斷言した。氏によれば、「組織されない社會經濟」unorganisierte soziale Wirtschaftの科學が

1) K. Marx: Das Kapital, Volksausgabe, 1932, S. 39.

2) W. I. Lenin: Karl Marx, eine Einführung in den Marxismus (K. Marx: a. a. O. S. 42)



理論的、經濟學であつて、社會經濟が意識的な遂行計畫、durchgeführter Plan によつて調整されるやうになると理論的經濟學は無くなるのである。かゝる見解はまたローザ・ルクセンブルグにおいてもヒルファデーニングによつても擁護せられる。<sup>4)</sup>

はたしてブハーリンの云ふところが正しいか。ところがエンゲルスは、ブハーリンの説に裏書しない。氏はその「反デューリング論」の第二編の始めで、廣義の經濟學なるものの存在可能性を認めてゐる。「經濟學はその最も廣い意味では、人間社會における物質的生活資料の生産と交換とを支配する法則に關する科學である」として、「一方で經濟學は、本質的に一つの歴史的科學である」ことを認めつゝ、同時にまた、他方では「だが、種々異なる諸々の人間社會がそのものとで生産し、交換し、またこれに應じてそれぞれ生産物を分配し來つたその條件や形態の學としての經濟學、かやうな廣い意味に於ける經濟學は今後に於て初めて打ち建てらるべきものである」と云つてゐる。それだけでは無い、レニンもブハーリンの説を「間違つてゐる。純粹の共產主義の下でさへ、*Тотализм*との關係(が残るではないか——譯補)をそして蓄積(が残るではないか——譯補)を云つた。<sup>6)</sup>「レニンは明かに云つてゐる、純粹の×××の下でさへ經濟學は廢止されないと」<sup>7)</sup> リアザノフもまたエンゲルスの説を肯定して云ふ——「この點において、私は、經濟學をば單に商品經濟および資本主義經濟關係のみを研究する科學たらしめんとする、また權利をば單に商品生産者の權利とのみ解釋する・人々には同意

しない」<sup>8)</sup>。

マルクスが資本論第一卷第二版への跋文に引用し、且、マルクス自身が認めたと云はるゝ、<sup>3)</sup>マルクス批評家の一齣、すなはち、『經濟生活の一般的法則は一個同一のもので』、「吾々はそれを現在に適用しようと過去に適用しようと、どちらでも可いはづだ」といふやうなことは、「正にマルクスの承認しないところで」、「かゝる抽象的な法則は存在しないのだ」<sup>10)</sup>といふ句の解釋の如きも、すでにマルクス經濟學そのものうちに於て検討されつゝあり、このやうな解釋の「證據が効力をもつのは、資本主義的生産と他の生産様式との原則的相違を理解せず且つ看取しないブルジョア經濟學者に反對する場合に限られてゐる」<sup>11)</sup>といふことが判つた。また、マルクスがその經濟學批判に於て云ふ、生産の「すべての諸時代には何らか特定の一般的な諸標識、若干の共通的な諸規定が具つてゐる。生産一般は一つの抽象である、しかしそれが實際に一般的なものを引き出し、定着させて、反覆の勞を省いてくれるかぎり、條理ある抽象である」<sup>12)</sup>といふことも、かく「生産一般に適用される規定が援き出されねばならぬのは」、實は、「本質的な(歴史的に本質的な——引用者註)差別が忘れられないため」<sup>13)</sup>なのであつて、すなはち「マルクスは様々『の生産の時代』の間に一般的なものがあつて、決して否定しはしない。……彼は……經濟學が一般的なものを、ために本質的(歴史的に本質的な——引用者註)差別を見失ふことを批判してゐる」<sup>4)</sup>だけである。(これらのことは、いづれ後に、改めて批評

6) ローゼンベルグ、前掲書、五八頁。コフマン監輯、マルクス主義經濟學、叢文閣發行、第一卷二七頁。  
7) ローゼンベルグ、前掲書、五八頁。  
8) 長谷部文雄氏譯、反デューリング論、上卷、リアザノフ、新ロシア版への序文 四一頁。  
9) 河上博士、改訂資本論入門、改造社版、一四——一六頁。  
10) ローゼンベルグ、前掲書、五九頁。河上博士、同前。  
11) ローゼンベルグ、前掲書、五九頁。  
12) K. Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie, (L. B. 1922) Einleitung, S. XV.

3) N. Bucharin: Oekonomik der Transformationsperiode. 1922, SS. 1. 2.  
4) ローゼンベルグ、資本論註解、直井、淡氏譯、第一卷六三、四頁參照。ローザ・ルクセンブルグ、經濟學入門、佐野文夫氏譯、一〇四頁。ヒルファデーニング、労働價值説の擁護、塚本三吉氏譯、一七六——一七八頁。中西寅雄氏、經營經濟學、七、八頁。  
5) F. Engels: Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft, (Internationale Bibliothek, 1928. SS. 149 ff.) 長谷部文雄氏譯、反デューリング論、下卷五頁以下。三木清氏、社會科學概論、岩波哲學講座) 七九——八一頁。



する。<sup>13)</sup>

かくて、ブハーリン的な、或はまたこれと同様な、多くの考へ方の不當であることは、「つひ最近まで、マルクス主義經濟學者の注意を引かなかつた」ところで、<sup>16)</sup>「理論經濟學の對象となりうるものは資本主義制度の生産關係のみであるといふ見解が、久しく支配してゐた」し、わが國でもまたそのやうな考がなは持たれてゐた例もある。<sup>18)</sup>然るに「今日……ソヴェートの國では、嵐の如きテンボを以つて、新しい社會主義的、生産様式が建設されつゝあつて、……既にその最初の段階に這入つた」<sup>19)</sup>のであつて、「過渡期の經濟および社會主義時代の經濟の理論的研究は、……すべてマルクス主義經濟學者の戰闘的任務となつてゐる」<sup>20)</sup>とさえ云はれており、ローゼンベルクの如きは、「經濟學は資本主義の死と共に××するのではなく、むしろ『狹義』の經濟科學から『廣義』の經濟科學に轉化するのである。經濟學の對象は變化するが、その方法は根本において元のまゝで」<sup>21)</sup>あり、「ソヴェート聯邦においては、少くとも廣義の經濟學の端緒がすでに据えられてゐる」とまで斷言した。

先づこゝで私はわが國の一部の經營經濟學者に注意を促したいとおもふ。經營經濟學に於ける一般性的論議を徒らに形式論、觀念論呼ばはりし、甚しきに至つては、獨斷論呼ばはりさえすることを<sup>22)</sup>私にはなにも社會主義經濟社會の經營經濟學が吾々の直接的な課題であるなど云つてゐるのでは無い。そのやうな經營經濟學もまた一種の理論經濟學であるといふことを言つてゐるだけである。蓋し、

13) ローゼンベルグ、前掲書、五九—六〇頁。  
 14) ローゼンベルグ、前掲書、六〇頁。  
 15) 本書一一二頁以下。  
 16) コフマン監輯、前掲書、二七頁。  
 17) ローゼンベルグ、前掲書、五七頁。  
 18) 中西寅雄教授、經營經濟學、六一—九頁。  
 19) コフマン監輯、前掲書、二四頁。  
 20) 同上、二九頁。  
 21) ローゼンベルグ、前掲書、七四頁。  
 22) 拙稿、池内教授の經營經濟學觀と私見。(經營研究、第一卷第二號)参照。

「經濟學の對象は變化する」<sup>23)</sup>「一般に經濟學は資本主義體制の内部においてさへ絶えず發展して來た。經濟學の對象は出來上つた姿で與へられてゐたのではない。それは絶えず發展し複雑化し、……」<sup>24)</sup>として、これに應じて、經濟學そのものも發達し來つたのである。<sup>25)</sup>

註 こゝで一言附加しておきたい。經濟學を前述せし如き謂ゆる狹義の經濟學としてのみ認め、従つてその他に經濟學は存在しないといふ説の主張者は、たいてい、かゝる狹義の經濟學だけが特に「理論的經濟學」たり得るが故であるといふ考を、共通的に抱いてゐるやうである。ブハーリン然り、ヒルファディング然り、ローザ・ルクセンブルグ然り、中西教授また然りであつた。<sup>26)</sup>これらの人々によれば、經濟學が「理論的科學」として可能なのは、それが『無統制な、アナキーの支配する商品生産社會』を對象とするが故にであり、社會的生活の法則は、個人又は社會の「意思」とは獨立に、恰も家が人間の頭上に崩れ落ちる場合の重力の法則の如き、規制的自然法則」の姿に於て個個の經濟主體に對立し、之を規律するが故にこそ、自然科学的な、因果法則發見的な理論經濟學の可能性が存する<sup>27)</sup>と見、これに反して、單一的に組織された社會に於ては、勞働及び勞働生産物を通じて與へられたる人類の社會的關係は、生産上にも分配上にも透明的に單純なものである<sup>28)</sup>から、ここでは『斯かる秩序を叙述する記載的經濟科學が存するのみである』と見られてゐる。だがしかし、「實際、すべての社會的生産様式は、生産力と生産關係との特殊な交互關係を特徴としてゐる。どんな社會にも、生産力と生産關係との間に矛盾は殘る。そこで、この矛盾は如何なる形態を採るか、生産力は如何なる方向に、如何なる速度で發展するか、これと關聯して、人間の間の關係がどう變化するか、等々を研究すべき必要も殘る。このやうに、すべての社會形態はそれ自身の經濟的法則を有してゐる。ただ違ふところは、或る場合には(商品生産の下では)この法則が自生的に作用し、人間を支配する法則として現

23) ローゼンベルグ、前掲書、七四頁。七六—七七頁。  
 24) 前掲各書引用頁参照。  
 25) 中西寅雄氏、前掲書、九頁。  
 26) 同上、七頁。ローゼンベルグ、前掲書、六二頁参照。  
 但し、本章の校了實際に出版された中西教授の「經營費用論」においては教授もまた廣義の經濟學の理論科學たることを認められるに至つたことは注目に値する。



はれるといふ點だけである。他の場合には、人間の意志を通じて實現される法則として現はれる。……ここでは經濟法則は人間によつて意識され、人間によつて意識的に實現される。ここでは、これまで人間を支配する自然法則として人間に對立してゐた、彼等自身の社會的行動の法則は、その時、人間によつて全く意識的に適用され、従つて彼等の支配に從屬し……自然を支配する客觀的な最高力は人間の統制の下に置かれる』<sup>27)</sup> 『内エンゲルスの言——本文筆者』のである。ローゼンベルグも云ふ。『資本主義は、敵對的な・矛盾を含む體制である』といふブハーリンの言葉について、レーニンは次の如く注意してゐる、——『……敵對關係と矛盾とは同一のものでない。社會主義の下では前者は消滅するが、後者は依然として残る。』矛盾は残るのである。そして矛盾は、ヘーゲルの用語を用ひると、社會主義を前進せしめるだらう。この運動・その特殊性・その法則性の研究は、——繰返して云ふが、理論經濟學の仕事である』と。(○點本文筆者)。かくの如く「社會主義社會における人と人との生産關係」もまた「固有的、特殊的方法によつて生産力の發展を媒介するのであるから、それに相ひ應ずる理論的研究を必要とする」のである。<sup>28)</sup>

かくて吾々の知り得る妥當なることは、いま假に經濟學をば、それぞれの歴史社會をそれぞれに對象とする歴史・事實學的經濟學のみであるとみるにしろ、それぞれの經濟社會の發展の法則を究明する科學をばすべてそれらを理論經濟學のうちに入れることが出来るであらうといふこと、そしてまた、その限りから、資本主義經濟社會を對象とする理論經濟學はそのやうなものうちでのたゞ一つの特殊な理論經濟學であるといふことこれである。<sup>29)</sup>

三

ところで上に述べたるところから、吾々は、およそ次の如き三つの事柄を區別して知ることが出来るであらう。

その第一は、マルクスは、一箇の限られたる歴史社會、すなはち、資本家的社會に於ける生産様式とそれに對應する生産諸關係の發展法則の究明が、その最後の究極目的であつたことから、氏はその經濟學をば全く一つの歴史・事實學的經濟學として、打ち建てむとしたといふこと、並に、そのやうな一つの歴史社會に於ける經濟學の究明に際してさえ、「生産のあらゆる時代」にも通ずるところの何らかの特定の共通的な諸標識、一般的な諸規定が存する事をマルクスは否定してゐない。<sup>30)</sup>といふことがそれである。元より、そのやうな抽象的諸規定そのものをもつてしては「何らの現實的な歴史的生産段階も理解せられない」<sup>31)</sup>ことは、勿論のことである。たゞ併し乍ら吾々は、そのやうな一つの歴史・事實學的科學にありてもなほ、かゝる「思惟によつて一般的なものとして固定せられたあらゆる生産段階に一般的諸規定の存する」<sup>32)</sup>ことをマルクス自身が認めたといふことそのことから、吾々の經營經濟學に於ても、またそれが一つの歴史・事實學的科學として研究される場合にでも、そのうちに一般的規定を拒否することの妥當でないことが同様に知らなければならぬであらう。

第二に吾々は、原始共產制社會、奴隸制の社會、封建制の社會、資本主義社會、そしてロシアの如き新しき社會主義の社會は、相互に異なるそれぞれに特有なる生産様式をもつこと、そしてかやうなそれぞれの社會的生產様式にはそれぞれ自身自身の經濟學、すなはち、それぞれの狹義の經濟學が對

30) K. Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie (Internationale Bibliothek) Stuttgart, 1921 Einleitung, S. XV.  
 31) K. Marx: a. a. O. S. XX.  
 32) K. Marx: a. a. O. S. XX.

27) コフマン、前掲書、二八—二九頁。  
 28) ローゼンベルグ、前掲書、六三頁。  
 29) アベズガウス、ドゥーコル共著、辯證法的經濟學方法論、岡本誠一郎 稲葉明男兩氏譯、三三頁。



應し得ること、且、そのやうな諸經濟學は、それらがすべて、「人類社會に於ける物質的生活資料の生産と交換とを支配する諸々の法則に關する科學」であるといふ限りで、その總體が廣義の經濟學であることを、エンゲルス及びその他の人々から知ることが出來た。<sup>33)</sup>が、この種の廣義の經濟學なるものはそれが、たゞ、すべての狹義の經濟學の單なる總體 (Summe) を指すといふ意味でしか廣義の經濟學であるに過ぎない。併し、かの一般的諸規定なるものは、經濟學がかゝる意味で廣義の經濟學であるためには、かゝる規定に對する依存性は一層大とならざるを得ないであらう。何故なら、それらはいまや經濟學一般にわたつて通約的に依存的な諸規定と考へられねばならないからである。

第三に、すべての狹義の經濟學を、その總體 (Summe) に於ける廣義の意味ではなく、それら狹義の諸經濟學を、一個の全體 (Ganzheit) に於て統一的に包括する、かくの如き意味に於て廣義なる經濟學の存し得るといふことを、また吾々は知ることが出來たと思ふ。しかも吾々は、このやうな意味での廣義の經濟學に於てこそ、最も明瞭に且つ最も積極的に、かの一般的諸規定なるものへの依存性を認めねばならぬであらう。蓋し、そのやうな全體的・統一的經濟學の打ち建てに於てこそ、各生産段階がそれぞれ成立し、發展し、消滅しつゝ次々へ移行する *nacheinander übergehen* 發展狀態を、何らかの特定の標識または規定へ依存せしめることによつてのみ全體的・統一的に求め得るのであらうから。

33) F. Engels: a. a. O. S. 149.

34) F. Engels: a. a. O.

註

尤も、吾々は、上の第三に於て云ふが如き意味での、廣義の經濟學なるものは、エンゲルス自身の述ぶるところからは必しも認められてゐるとは信ぜられない。エンゲルスの云ふ廣義の經濟學なるものは、氏によりて、前述の如く、およそ「人類社會における物質的生活資料の生産と交換とを支配する諸々の法則に關する科學であり、」詳しく云へば、「種々異なる人類社會がその下で生産し、交換し、またその下でその都度かゝる生産および交換の仕方に應じてその諸生産物を分配し來つたところの諸條件や諸型態に關する科學である」<sup>35)</sup>といふに過ぎないことから、これをその言葉通りに解さば、氏は、たゞ單にそれぞれの狹義の經濟學の總括せられたものを廣義の經濟學と呼びしに過ぎぬ如くである。併し乍らエンゲルスの立言をかくの如く解する時には、氏の廣義のといふ意味は、たゞ總稱といふほどの意味しか持たないこととなり、廣義の經濟學といふものはあまり大した意義をもち得ないものとならざるを得ぬこととなる。蓋し、吾々が狹義の何ものかに對して廣義の何ものかを認めるといふからには、廣義のそのものはそのものとしてまた一箇の全體的のもの、統一的のものでなければならぬからである。然るに、エンゲルスの言葉そのものからは、かゝる廣義に於ける統一的・全體的な何らの經濟學もが明言されてはゐない。その限りで、エンゲルスの云ふ廣義の經濟學はたゞ狹義の諸經濟學の單なる總稱となり、廣義なる語は意義なき言葉としか解し能はない。

然るにコフマンは、このエンゲルスの言葉を有意義に解釋せむと努めた。コフマンは云ふ「あらゆる個々の生産様式およびそれに對應する生産關係の發生と發展と没落および相互移行における研究を包括する經濟學を、エンゲルスは廣い意味の經濟學と呼むだ」すべてこれらの「狭い意味の經濟學」は、一個の全體に、廣い意味の經濟學に包括される」と。(○肩點筆者)併し乍らコフマンが註釋するかゝる「相互移行」および「一個の全體」なる言葉は、エンゲルスのうちに發見されないのである。然らば、コフマンは何故このやう

35) F. Engels: a. a. O. SS. 147. 153.

36) コフマン監輯、前掲書、二五頁。



な言葉をもつてエンゲルスを解釋しやうとするに至つたか。恐らくそれはエンゲルスの「廣義」の無意義性を有意義に解釋せむと努めたためであつたらうとおもはれるところがある。またそのやうな解釋が可能をもつと考へられたからであつたらう。私もまたかゝるコフマンの解釋を妥當と認め、それ故に、上述するところの第三の解釋を取つた。

かやうにして、經濟學は、第一に、それが一箇の、すなはち、狹義の歴史的事實的科學として究明される場合にでも、すでにそのものに於て何らかの特定の「一般的・共通的規定」を豫定的依存的に措置せるものであること、および、第二に、かゝる規定は、二つ以上の狹義の經濟學が成立可能となる際には、一層そのものへの依存性が大であるといふこと、然るに、また、第三に、かゝる規定は、二つ以上の經濟社會を通じてそれらの發展と移行とが何らか全體的・統一的に眺められやうとするに至る時に、そのものへの依存性は、最も明瞭且つ有意義なる役割を演ずるであらうことを、吾々はそれぞれの場合に分ちてこれを知り得たのである。元より、前にも述べた如く、かゝる規定はそれ自體では、すなはち、そのものによつてのみしては、「何らの事實的な歴史的生産段階もが理解されない」ことは、吾々の牢記しなければならぬところであるが、さればとて、このものゝ指定なくしては、吾々は、ただの一箇の歴史的事實的科學をも正確に成立せしめ得ないことを、さらに、二つ以上の歴史的事實的科學を取扱はむとする場合、（とりわけ、それらを特定の見地から全體的・統一的に眺めつゝ廣義の全體的・經濟學を打ち建てむがためには）一層それへの依存的役割が大となることは吾々のすでに述べた通りである。

る通りである。

四

さて、こゝで翻つて考ふるに、私は上來、マルクスにおけるかの「一般的諸標識、共通的諸規定」なるものを一應無批判的に受入れて來た。且つまた、一つの狹義の經濟學乃至諸々の狹義の經濟學、および、全體としての廣義なる經濟學におけるかゝる「一般的諸標識、共通的諸規定」なるものゝは、および、全體としての廣義なる經濟學におけるかゝる「一般的諸標識、共通的諸規定」なるものゝは、たらしきを同様に一應無批判的に受入れては來た。しかしいまかゝる「一般的諸標識、共通的諸規定」なるものを改めてこゝに問題として仔細に検討したいと思ふが、マルクスが云ふ「一般的諸標識、共通的諸規定」なるものが、その依つて立たしめられてゐる根據は實際朦朧たるところがあり、（河上博士、改訂資本論入門、第一卷分冊昭和三年、二二頁参照）エンゲルスの廣義の經濟學、コフマンの廣義の經濟學とともに通じて、それらが依つてもつて廣義なりとせられてゐる可能的根據はさらに曖昧模糊たるものが在るのである。

註 マルクスのいふ「一般的諸標識、共通的諸規定」とは、おもふに、單に事實そのものからの抽象に過ぎないかに解せられる。「生産一般は一つの抽象である。しかしそれが實際に一般的なものを出し、定着させて、反覆の勞を省いてくれるかぎり、條理ある抽象である」といふのはこの解釋を裏書する如くであり、かゝる抽象は單に事實そのものに本きてこれを「思惟により一般的なものとして指定されるところの共通な諸規定」に過ぎぬ。従つてそれはそのものとしては空虚な形式的概念であつて、たゞ事實的なものを反覆指稱するに過ぎぬ。

37) 引用 12) 參照。

38) K. Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie, Einleitung S. XX.



勞を省いてくれる有用性をもつに止りそのもの自體としてはどこにも實際には存在せざるところのものである。然るにさらに進むでエンゲルスの乃至コフマンの廣義の經濟學なるものゝ存在可能性の根據は一層不明として取残されてゐる。

私は空虚なる形式的概念を決して有用なきものとは毫も思ふてはをらぬ。たゞ問題は、かゝる「一般的諸標識、共通の諸規定」が何故諸々の歴史社會的事實をばそれによつて存在的なるものと化せしめ得るかといふ可能的根據を、さらに、諸々の狹義の經濟學の對象、——事實的なる對象を、エンゲルスの如く廣義の經濟學的領域のなかに包攝し、或は、それら諸々の狹義の經濟學に於ける諸對象、——諸歴史社會的事實的なる諸對象を、コフマン的に統一的なる廣義の經濟學的領域のなかに包攝し得るかといふことの可能的根據をば、問はむと欲するのである。

蓋し、かゝる企てが、それぞれ、可能的根據を有し得るのは、それは單なる形式的概念の助けによるのでなくして、實は、「經濟的」なるものが、或はまた、「生産的」なるものが、そこに同一性において存在してゐることのために外なるまい。このことを許すことなくしては、吾々は如何にしても、ただ形式的概念といふ、そのものゝ自體性に於てすでに空虚なるものからして、存在的なるものを發見することは出来ない筈である。

こゝに於て吾々は、經濟一般、生産一般なるものは、たゞ事實から抽象化された「空」なるものとしてではなく、全くそれは何らか存在するものとして理解せなければならぬ必然性に迫られるのであ

り、經濟一般、生産一般なるものが、それが事實からの單なる形式規定的概念といふもの以上に、一全としての人間世界からの一つの側面的に領域的なる、且つ存在的なるものとしてそこに實際に存在するもの、若くは、存在可能的なるものであることを認許せなければならぬのである。實に、「生産的」なる存在は斷じて「非生産的」なるものとして存在し得ざる、また「經濟的」なる存在は斷じて「非經濟的」なるものとして存在し得ざるといふ、かくの如く本質的なる、領域的に存在的なるものなることをば認めねばならないのである。かくの如く、生産は生産ならざるものであり得ない、經濟は經濟ならざるものであり得ないといふところに本質が存すること、正確に云へば、そこに領域存在的なるものゝ本質があるといふ本質の根據が、求められつゝある意味の同一性に由るか、或はまた、同一意味性の問題關聯内に屬するためであるかは別として、兎に角、Aは非Aたる意味または問題に置換へ得ざるところに領域的存在的なるAの本質があるのである。事實としての甲なる存在「生産」は、事實としての乙なる存在「生産」とは、異りたる存在ではあるけれども、それらがともに生産なる意味の側面領域的なる本質に於て在ることには誤りなく、すなはち、「生産」は「非生産」たり得ざる點において本質的なのである。

そこで私はこれらのことを明にするためにいま少しく論證せなければならぬのではあるが、紙面の都合上、馬場教授の説かるところをほゞ大同的に賛することによつて、詳細を教授の「經營學研究」



第二編にゆづらうと考へる。少異的に私が教授に對し異見を有する一例を茲に擧げれば、教授はフツセルに從つて本質學的經營經濟學の如きが、全く經驗科學以外のものなる如く述べられてゐる點などである。由來、哲學者はおのづからものを哲學的例において説く傾があり、それを特殊科學的に例示する際にでも、多くの場合、自然科學にこれを探ることは人々のよく知るところである。然し私見では、經濟學の如き側面的に領域存在的な學問にありては、それが存在學なることから實質的科學であることが要求されてをり、これを領域存在的な本質學の埒内において全く成立せしめらるべきだと考へてゐる。從つて、歴史・事實學的經濟學は嚴密な意味での經驗科學であるが、領域・本質學的經濟學もまた、それが存在的なるものを對象とする點で、また經驗科學内のものであると考へるのである。從つて經營經濟學を示すと次の如くならうかとおもふ。

經營經濟學 || 經驗科學  
 領域・本質學的措定……存在なるもの、把握  
 歷史・事實學的措定……存在(事實)の把握  
 相互統一

但し私が馬場教授に御考慮を乞ひたしと思ふ點は、教授の説明に誤りは無いが、教授が主として事實學的經營學と本質學的經營學との成立可能性を説かるゝ目的を有せられ乍ら、フツセル的事實學の説明を、直接的關聯で、直ちにフツセル的形式の本質學に接觸して述べ——且つ紙幅をこれに多く費されて——ゐられるが、この點は讀者に理解を困難ならしめる虞があるやうにおもはれる。そして、領域的實質學としての經營學における事實學及び本質學(即ち領域的本質學)の説明であり乍らかゝる領域的本質學の説明を、その後においてもしかも紙數少く説

40) 馬場敬治教授、經營學研究、七三——七九頁。七九——八一頁。

明してゐられるが、この點については私の考ふところでは、すでに領域的科學としての經營學について、それの事實學と本質學との區別および關聯の説明としては、事實學(事實學はすべて領域學であるが)と領域的本質學との説明を先にし且つこれに比較的多くの紙幅を費し、その後、これら事實學および領域的本質學がともに依存すべきものとしての形式的本質學を説かるゝことが順序であらうかと思ふ。尤も、教授は、その次の節で、判きりと事實學と領域的本質學との關係を詳しく論じられてゐるがフツセル自身も、類化(Generalisierung)それはフツセルによれば、形式的空的存在に關するものである)と區別して(42)領域的存在學たる事實學的經營學と本質學的經營學との區別關聯を説くには、むしろ上に述べし如くすることを可と信するのである。何故なら、すべての經濟學は先づ何よりも領域的存在學であるからである。(併し、かく私も馬場教授について云ふも、これらのことは、特に簡單を尊ぶ場合、紙面の制約に觸されて、思はぬ粗述を爲すことがある。私もまた、池内教授の主張を批評せる際に似た不明確を犯してゐる。(經營研究、第一卷第二號、六七頁第三行——第四行。)この點については誤解されないために、他日やゝ詳細に述べるとして、一應こゝに括弧に入れ預りおくとともに、池内教授並に讀者に諒解を得ておきたい。)。

なほ、併し乍ら、私見によれば、經濟學、また經營經濟學について、これを歴史・事實學的なそれと、一般・本質學的なそれとの區別及び關聯において説明するには、經濟學を、また經營經濟學をば、あくまでこれをそれ〴〵一つの側面的意味乃至問題領域學として説くことの方が適切ではないかと思ふのである。しかも、この點についてはフツセル的よりはむしろラスクの領域の方がより適當のやう

41) 馬場教授、前掲書、八二頁以下。

42) E. Husserl, Ibid. SS. 26, 27. 高橋里美氏、フツセルの現象學 二七——三一頁。



に私にはおもはれるのであるが、以下多少の説述を附加しておかうと思ふのである。

## 五

さて領域とは、一つの同一性をもつ意味の——しかも意味的に存在的なるもの——限界内を指す。元より領域そのものは必しも存在と同じではないが、領域は、何よりも先づ存在的なるもの、領域であり、存在的なるものを外にして領域なるものは無意義に等しい。この限りから領域とはつねに存在的なるもの——すなはち、それが何らかの仕方において、現に存在する、若くはまさに存在し得るところの意味的地域をいふのである。

それと共に又、如何なる實質的存在もそれが何らかの領域において無きものはなく、何らかの存在はそれが何らかの領域的存在なることにおいてはじめて眞に存在たり得るものである。かくの如くおよそ存在的なるもの、存在を可能にするものが領域的存在——この場合それはフツセル的でなく、ラスク的な——であるとするれば、存在的なるもの、領域とともに吾々はまた、領域的なるもの、存在性をも認めなければならぬ。この限りから領域そのものもまた存在的なるもの、一種であり、それは單に形式的無存在的なる概念ではなくて、同時に質量的なる内容に於て存在するものである。領域は一定の意味的限界をもつことによつてつねに内容的に存在的なるものであり、それが内容的であるといふことは必しも具體的に經驗的であるといふ意味では無い。元よりかゝる意味において領域は個々の現實

存在に比して著しく形式的ではあるがそれ故に領域的なるものは空虚であるといふことは出来ない。

かくて領域はあくまでも形式——認識の形式——ではなくて存在の範疇なのである<sup>43)</sup>

かくて領域はおよそ存在(現象)に関する領域であるが、存在はそれが捉へられる意味の世界の異なるに應じて「自然の界」と「人間社會」との二つの意味的領域となる。「經濟」なる存在はそれ自體一全としての「人間社會」乃至「人間生活」からの側面的に一のさらなる領域として、「政治」、「法律」などから一應質的領域として、理解されるのである。しかもそれは一つの領域・意味的なる存在である。經濟的存在は、それが意味的なる點、たゞそれを意味なる點に一應假に止めることからして形式性を有するが、その存在的なる點に於て、すなはち、それが意味充實的なることの點において單なる形式に比してより内容性のものである、しかも經濟的存在のかゝる形式性と内容性とを一箇同一的、identischに掩ふところのものは存在するもの、領域、Regionであり、すなはちこゝでは「經濟」なる領域 eine Region "Wirtschaft" そのものであるといへる。だからこの存在的領域の本質を把握し、それを指定することは、その學問にとつては一つの基礎的なる仕事でさえあると云はなければならない。

吾々が個々の現實存在を經濟的存在として知るのみならず、否、さらに進むで實に經濟を經濟として知り得るのは、それが「經濟」なる領域的存在なることを許してゐるために外ならぬ。しかもそのことは吾々がすでに存在の範疇としての「經濟」なる領域の意味と内容的存在とを許してゐることの

43) 山内得立博士、存在の現象形態(認識論に於ける存在の問題、特に32—45頁)参照。



ために外ならぬと見なければならぬ。してみれば、吾々が經營經濟學なる一種の學問を志向しこれを打ち建てむと努力する際、吾々がかゝる存在の範疇としての「經營經濟」一般なる領域の意味を學的反省のもとに確定し、且つそのもの、内容的存在について思を潜め、このものについてその内容的存在領域を見定めるといふことは、何ら徒らなる概念の遊戲でもなければまた空虚なる形式を弄ぶことでもないと言はなければならぬ。曩に述べたるが如きマルクス經濟學陣營に於けるかの狹義の經濟學から、廣義の經濟學への承認の擴大は、以上の如く考へ來るとき、それはまさに一つの現實歴史社會的なる狹義の經濟學から、存在範疇的なる領域・本質學的經濟學への發展としても見得ないでもないであらう。そうでなければ社會主義社會の經濟學がまた同様に「經濟學」たり得ると云ふ證據が不明とならうからである。

一の同一なる意味的存在「經濟」であり乍ら、このものを領域・本質學的なる規定のもとにみむとする試みがかくの如く一部の學者によつて往々形式的規定のものとして嫌忌されるのは、それらの學者が「經濟」をひたすらにその下層においてのみ眺めむとするからであり、ものをひたすらに個別的現實經驗的なる内容としてのみ見やうとするからである。併し乍ら、元來意味的存在なるものは、ラスクの謂ゆる階層的構造 (Schichtung) に従ひて階段的なる多くの重層に於て連る構造を有し、一つの存在は、その同一性を維持しながらも、下層より見らるゝときは形式とよばれ、上層より眺めらるゝときは内容と名づけられるのであるが、しかもこれらの階層的なる意味的存在を一つの同一性なる存在として成立せしむるところのものは領域なる範疇である。それ故に領域とは意味であるとともに同時に存在でなければならぬ。領域は一般の意味であり乍ら内容をもつことによつて存在するのである。領域は個々の

事物に比して著しく形式的であるが、それは空虚なる概念ではなく、存在的なる或ものであることによつて常に一定の限界をもち、何らかの内容に於て有るのである。

一部の論者が經營經濟學における領域本質學的的努力を難撃するのは、單なる形式的概念的なるものと、領域的存在的なるものとの區別を一樣に塗抹し去る輕率から來てゐる。現實的に經驗的なるもの、事實的なるもの、外に存在なくその他はすべて單に思考の結果たる空なる概念のみであるとなす獨斷論に過ぎない。併し領域存在的なるものは必しも經驗的存在ではないが、それは概念的表象物の如く實際になき存在、すなはち實際に在り得べからざる存在ではないのである。現にマルクス自身もが資本家的社會のうち在りながら私有なき經濟社會の存在性を語つてゐるではないか。このことはすでに何らか一定の存在が「經濟」領域的存在なること、ともに、「經濟」といふ領域的なるもの、存在とその内容性とを許してゐる證據であると言はなければならぬ。

かくて吾々は經營經濟學を歴史・事實學的に打ち建てる努力とともに、かの狹義の經濟學と廣義の經濟學との論争の如きの無用性を避けむがためにも、否、それにも増して歴史・事實學的經營經濟學を眞に基礎づけするためにこそ、領域・本質學的經營經濟學概念の排斥せらるべきでは毫末もなく、却つてこれを促進することさえ必要を知らなければならぬ。現實科學としての經營經濟學への要求に添はむがためには、かゝる領域・本質學的概念を現實科學としての斯學のうち統一的に攝取しなければならぬ。

45) 山内得立博士、前掲書、32-37頁參照。馬場敬治教授、經營學研究、24-26頁參照。



## 第四章 經營經濟の意義

### 第一節 總 說

すでに前章において領域本質學的概念と歴史事實學的概念とは互に相排し合ふものでないのみならず、兩者が學問研究の過程において補完的に相扶け合ふことの必要な所以を明にしたのであるが、かくて、われ／＼は歴史的事實を對象となすべき現實科學においても、本質學的概念指定を試みることの敢て不可なきことを許し得るであらう。然らば次に生すべき問題は經營經濟學の研究においてかゝる本質學的概念指定をなす積極的理由如何といふ事柄でなければならぬ。而して元よりかゝる理由としては種々の事柄が擧げられて然るべきであらうとおもはれるが、私はこゝでは先づ經營經濟學の性質を決定する上から、および、従つて斯學が如何なる對象を現實科學的にもつべきか或はもち得べきかといふ點を決定する上でとの二箇の理由を擧げれば充分であらうとおもふ。

そこで、然らば經營經濟學における本質學的な指定を必要とすべき基本概念は如何なる諸概念であるかといふに、元より相當多くのものが擧げられ得るであらうとおもふけれども、先づ、斯學における最高の類領域的概念を明にすることで足りると考へると同時に、それらのうちについても特に今日まで經營經濟學において論議の種となる基本概念について語るることによつて當面的には足れりと考



へるのであつて、すなはち、本章において「經營」もしくは「經營經濟」なる概念を論じ、後章において經營もしくは經營經濟の指導原理と考へられてゐる「經濟性」の概念を取扱ふ。(其他生産概念配給概念等も基本概念として重要ではあるがこゝでは取扱を省略する。)

元來、經營もしくは經營經濟の内包領域如何、經營經濟學の對象如何といふ問題は、斯學が近代吟味に遭ふて以來擔はされて來た受難的課題であつて、現在なほ未決の問題なることは周知の通りである。この外見上ふたつの、實質的關聯上での一箇の問題に對する諸見解は、一部の人々によつておほまかに一般的經營經濟學 *die allgemeine Betriebswirtschaftslehre* の主張か、歴史的經營經濟學 *die historische Betriebswirtschaftslehre* の主張かといふふたつの對立する見解のいづれかに屬せしめられるごとく言はれてゐるかに見えるが、實は、この問題の解明はいま少しく立入つて扱はねばならぬ必要がある。蓋し、諸學者それぞれの主張にはそれぞれ異なる理由が伴ふからその理由の相異によつて必しも簡單にこれをいづれかの主張に所屬せしめることが一種の強制に陥る處があるからである。

おもふに、この問題は、究局においては、經營乃至經營經濟の概念とその外延領域を繞ぐる一聯の問題と、經營經濟學の現實科學的對象論上の問題との交渉場面に拉し來つて解決せらるべきものであるけれども、便宜上一應上述の如き二箇の問題に分ちて解明することとし、そのうちの後者、すな

はち、斯學の現實科學的對象論については別にこれを後章において稍詳述しやうと欲するから、本章では、その前者たる經營乃至經營經濟の概念とその外延領域とについて述べやうと欲する。

## 第二節 諸「經營」觀の紹介と批評

先づ「經營」と「經營經濟」とは諸學者によつて概念上同義に解せられてゐるか、と云へば必しも然うではない。或る人々は兩概念を同義と解し、他の人々は異なる概念と觀てゐる。由つて本節では先づ「經營」概念のみについて吟味を行ひ、次節において兩概念の異同を論じ、さらに後節において「經營經濟」の意義を明にする。

### 一 經營—生産單位説の紹介と批評

經營概念に關する諸學者の代表的意見の引照とそれらの批評については古林教授の有益な論文があるが、氏の該論文における企圖と私の以下の記述における意圖との間には必しも一致を見ないからこゝで氏の論文を引照することを姑く止め、以下多少の諸説を引用し批評することゝしたい。

さて、先づ第一に、經營をもつて生産單位體と解する諸見解を擧げやう。

經營をもつて生産單位と解する考は、最も古くから存してゐた考であり、今日ではもはやこの考を

- 1) 生産の概念については拙稿 生産の概念と經濟性 經營經濟研究 第七册参照。  
配給概念については 福田敬太郎教授 市場配給における賣買。國民經濟雜誌 第五十九卷 第三號参照。
- 2) 例へば池内信行教授 理論科學としての經營經濟學「會計」第三十一卷 第三號、第五號第三十三卷 第一號特に第三十三卷第一號十四頁の如きはその意を見得るであらう。

3) 古林教授 經營概念の規定について 經營經濟研究 第七册。  
なほ、佐々木吉郎教授 經營概念に就いての一考察、經營經濟研究 第五册の参照を望む。



維持し難しとなし、何らかの意味の經濟單位説へ轉向を示すものと、なほこの考をその舊義そのまゝにおいて支持せむとするものと、舊義を生かしつゝたゞこれを新しく解釋せむとするものとのおよそ三種の傾向が存する。従つて本項では後二者の見解が示される譯である。

従つて、こゝに前もつて注意すべきことは、等しく生産單位とする人々と云ふも、範疇上では本質的相違として對立すべきふたつの見解の存することである。すなはち、經營の本質を技術的（自然科学的性質における）なるものとみる考と、經營をそれ自體技術的單位とし乍ら、その技術的生產性の經濟的方面をもつて、その意義（Bedeutung）とする考とが存し、等しくこゝで經營生産單位説の中に含ましめたとは云へ、かゝる技術的範疇の經營説と、經濟的範疇の經營説とは、範疇的區別としては本質的區別として、或る意味においては元よりこれらを同一説中に並述さるべきものではないのである。従つて、以下紹介するであらう諸學者の見解も、この點から次の如くまづ區別所屬せしめる必要を感ずる。

經營  技術的生產單位説	
池内教授	中西教授
ゾムバルト	メレロウイツ
リッター	ゲルハルト
ラッセル	ハイム
ホフマイン	ゾムバルト

（第一版）

經營  經濟的生產單位説	
馬場教授	リーマン

然しながら、右のやうな本質的區別があるけれども、經濟的生產單位説と雖もその生産性自體は技術的部面の活動に屬し、その價值進出がかゝる技術的生產性によつて決定せられるものと考へられてゐる限り、技術的生產單位説と大した相異を持つものではない。のみならず、反對に、技術的生產單位説においてもまたかゝる單位自體が問題となるのではなく、その價值的方面が問題となるのであるから、この限りから云へば、それら二説をひとしく經營||生産單位説中に論じても敢て差支なかるべしとおもはれるのである。但し、上掲の所屬表に照して以下述ぶる個々の學者の主として重くみる點を忘れてはならないことは勿論必要である。

さて、かくて經營をもつて生産單位と解する諸説についてであるが、云ふ迄もなく、生産單位自體は經濟單位内部における一過程的單位であつて經濟單位そのものではないから、生産單位説と經濟單位説とは相一致するものではない。（尤も、増地教授の如く經營が生産單位なるか經濟單位すなはち單獨經濟なるかの不明なる考のごときはこゝでは姑く觸れないでおく。）

經營をもつて生産單位、すなはち、非獨立經濟單位となす人々の代表的なものは、ゾムバルト（但し D r modern Kapitalismus の第一版に限る）、リーマン、リーガー、ゾエルハイム、メレロウイツ、

4) 増地教授 經營經濟學 第三章第一節、第二節參照。



馬場教授、中西教授、池内教授等を擧げることが出来やう。尤もニックリツシユ教授のごときも、元來は、これに屬する一人であつて、氏によれば經營とは作業體における人、特に人の團體であり、「工場において機械、工具、原料を整へて彼らの目的を共同して實現せむと努力しつゝある人々の團體」簡言して工場協同體 *Werkstattegemeinschaft* が經營であつたのであるが、併乍らこの考は後に明かに氏一流の經營協同體説 *Betriebsgemeinschaft* として、遂に、經濟たる企業任務のうちに上昇し國民經濟的生産に偉大な規範を擔ふ思想にまで昇化するところの特殊の經營概念の故にこゝには深く述べないでおく。<sup>5)</sup>

ゾムバルトはその「近世資本主義論」第一版において云ふ。經營とは作業協同體 *Werkgemeinschaft* であり、經濟とは價值形成協同體 *Verwertungsgemeinschaft* である。經濟と經營とを區別することは經濟學を正當に理解するために自分にとつて極めて重要である<sup>6)</sup>と。

氏によれば、一定の經濟單位體——その本質はそのものゝ經濟行爲の究局目的の何たるかによつて特徴づくのであつて、例へば營利經濟すなはち企業のごとく、——が存立するためには労働過程が有效的に結果することが必要であり、しかもこのことは労働過程が計畫的な秩序づけられた過程として構成されるといふ豫想のもとにおいてのみ可能である、然るにかゝる目的のためには一の作業を成就するために一定の方法に従つて労働せしめるやう労働諸力が一つの統一意志によつて統制せられねばならぬ、かくてそこに統一的に秩序づけられたる労働過程が成立し、またその規制的反復のためにそこに一定の組織が設定されなければならぬ、この組織を經營と名付けやうと欲すると。<sup>7)</sup>

5) H. Nicklisch, *Wirtschaftliche Betriebslehre*, 6. Aufl. S. 36; S. 53, 54.  
 Nicklisch, *Profitlehre?* Derselbe, *Betriebswirtschaft*, 7. Aufl. S. 6'f.  
 6) W. Sombart, *Der moderne Kapitalismus*, I. Aufl. 1902, S. 5, 6.  
 7) Sombart, *Ibid.* S. 5, 195 ff.

かやうにして經營とは組織づけられたる作業協同體であり、これに對して、資本主義社會における特殊の經濟單位が資本主義的企業たるの故に、それにおいては作業協同體たる經營は價值増殖協同體たる企業に對しつゝこれに組織づけられる。

經營と企業とを特質づけるこの考はマルクスの労働過程 *Arbeitsprozess* と價值増殖過程 *Verwertungsprozess* との區別から示唆を受けたと説かれてゐるが、注目すべきことは氏のこの考が今日まで久しく若干の經營經濟學者によつて維持されてゐる點でありそれらについてはいづれ後述するであらう。なほゾムバルトのこの間の見解については阪西由藏教授企業理論一四八頁以下、中西寅雄教授經營經濟學八〇、八一頁をも参照せらむことを望む。

レーマンも、經營をもつて生産單位と解し、企業を財政單位としてこの二者を一の經營經濟 *Betriebswirtschaft* に統括してゐる。但し、氏は生産單位をさらに取引業務 *Geschäft* と作業 *Werk* に分ちこの作業をもつてまた經營とする、とゝもになほ財政單位と生産單位たる經營とを統括する經營經濟をもまた經營と呼んでゐるのである。すなはち、

8) 福田博士 國民經濟講話 大正十四年刊 一一〇九頁以下。





が氏のシエーマであるが、<sup>9)</sup>氏の經營概念の中核はやはり生産單位としての經營に存するとともに、<sup>10)</sup>生産單位としての經營の中核がまた作業 Werk に存すると見得るであらう。何故なら、レーマンにありては、第一に、非經營經濟には生産單位が缺如してゐるからであり、<sup>11)</sup>第二に、氏が經營經濟經營なる考に到達したのは氏の「一般經營經濟學」に至つてであつて、その以前における氏が生産單位をもつて經營としつゝ、財政單位たる企業とともにそれらが經營經濟學の對象であるとしてゐたこ

9) M. R. Lehmann, Allgemeine Betriebswirtschaftslehre, S. 46-50.  
このシエーマにほゞ相似たるものはライトナーのそれである。  
F. Leitner, Privatwirtschaftslehre der Unternehmung 4. Aufl. S. 240, Anm.  
10) この點は氏が經濟性を説くところに徴してかく云ひ得るであらう。  
Lehmann, Ibid. 160 ff.  
11) Lehmann, Ibid. S. 33-37.

とが對象としての明確さを缺き、對象上での兩者の關係が不明であつて、氏の「企業も生産單位としては經營であり、經營も財政單位としては企業である」といふ説明のごときも氏の經濟性の説述内容とも合致せず、かくて企業は經營經濟學の對象ではないのかといふやうな批難が入る得るからそのやうな困難から免れるためには經營經濟と等置せざるを得なくなつたのであらうからである。かやうな結果から氏はその後著において前掲のシエーマ中、經營經濟學は經營經濟經營を對象とし、その構成的一面が經營(生産單位)であり他の構成的一面が企業(財政單位)であるとする。<sup>14)</sup>但し氏において企業は營利目的をもつ財政單位に限定されてゐるが、<sup>15)</sup>財政單位が企業の本質的内實であるならば何故營利目的をもつものに限るかもまた一つの不審であらねばならぬ。<sup>15)</sup>兎も角もかくて氏において經營經濟が經營たり得るのはそれが生産單位であるためであるといふことは誤なき如くである。(なほレーマンの二單位説については經濟性の項参照)。<sup>17)</sup>リーガーによれば、「經營と企業とを同義概念として使用することは如何にしても許し難い、蓋し兩者は同一の平面に屬せず、經營は具形體であるが企業は根源的に一つの經濟的理念 イデー)である。經營は苟くも人が地上に生棲する限りつねに存したしまた存するであらうが、企業はこれに反してその出現が時間的に限られてゐる」として經營の超歴史時代性を説くとともに、經營が單に技術的な基礎にすぎず、技術的組織と設備である、だから經營一般はそれ自體何ら經濟的事象でも大きく

12) Lehmann, Betrieb u. Unternehmung und das Wesen ihrer Wirtschaftlichkeit, Zeitschrift für Betriebswirtschaft, 1926, S. 266.  
13) Lehmann, Allgemeine Betriebswirtschaftslehre, S. 162-164.  
14) Lehmann, Ibid. S. 36.  
15) Lehmann, Ibid. S. 40.  
16) 古林教授 前掲論文 三七頁足欄参照。  
17) なほこの點に關するレーマンの説については、古林教授上掲の論文以外に佐々木吉郎教授エム、エル、レーマンの經營經濟學 經營經濟研究 第九冊参照。



もなく經濟することの手段であり、道具であるが何らそれ自體經濟することではない。<sup>19)</sup>そしてかゝる技術的組織設備なる經營の内實が生産に存することは氏の言葉……: ohne Geld, ohne Einkommen kann kein Betrieb auf die Dauer bestehen, kann keine Produktion aufrecht erhalten werden.<sup>20)</sup>——によつても明かであらう。

かくて氏は經營の經濟的イデーによる被包統性の故に經營經濟學なる名と實とを否定するところの氏の明確な私經濟學 Privatwirtschaftslehre となるのであるが、こゝではたゞ經營概念自體についてのみ述べる止める。<sup>21)</sup>

ゾエルハイムもまたリーガーと同様に「經營とは技術的労働單位を云ひ、企業は經濟的労働單位もしくは市場經濟的に構成された労働單位である。」<sup>22)</sup>要するに經營とは運轉および原料の形状的空間的變化を結果しやうとする活動で、簡言して、經營は生産活動または用役給付(例へば販賣業の配給の如き)がその本領である。<sup>23)</sup>

氏の經營概念は狹義の生産のみならずレーマンのごとく明に販賣業務のごときを含み結局技術的操作であるがこれを生産單位説中に包括することはレーマンと同様に不可なきに考へられる。蓋し、氏をまた經營生産説に屬せしめる理由は、氏が「個別經濟は技術的に觀察される限り經營であり、自由交通經濟的營利組織として眺められたものが企業である」<sup>24)</sup>から、「經營經濟とは單に經營

18) W. Rieger, Einführung in die Privatwirtschaftslehre, S. 39.

19) Rieger, Ibid. S. 40, 41.

20) Rieger, Ibid. S. 31.

21) リーガーについては 佐々木教授 經營概念に就いての一考察 經營經濟研究 第五册。中西教授 リーガー教授の私經濟學 同上 第九册参照。

22) F. Sölheim, Zur Methodologie und Systematik der Einzelwirtschaftslehre, Archiv d.F. b. F. u. L., 1927, S. 57.

23) Sölheim, Ibid. S. 5, 8.

24) Sölheim, Ibid. S. 58.

の經濟であつて従つて企業の一部門でしかなく、<sup>25)</sup>然るに「個別經濟は經營經濟と企業經濟との兩概念を包括する」<sup>26)</sup>と言へるところからそれが察せられるからである。尤も氏のかゝる立言は經營經濟と企業經濟との關係、特に經營經濟と企業經濟との企業に對する被統攝性を不明ならしめ、われわれから見れば、すでに企業經濟と云へば、經營經濟を自らに統括するものであるから、企業について經營經濟と企業經濟とを分つことは不條理と云はねばならず、この點、レーマンの説の方が優れるとなさざるを得ないが——但しレーマンの説を私が是認するのではない——兎も角かくて氏は經營經濟學を廢し企業經濟學をも棄て、氏の個別經濟學 Einzelwirtschaftslehre が主張せられるに至つたのである。

メレロウィッツはその著書の第一版冒頭において、「經營とは計畫的、組織的作業設備である。經營は經營することの場所として作業場 Werkstatt である。經營組織とは作業場組織、すなはち、經營行程の組織である。それ故に經營とは何らか技術的なもので、給付造出の方法は原始的なものでもまた複雑なものでもあり得る。」<sup>27)</sup>として、その技術性からそのもの自體の超歴史性を説いてゐる。この考は、氏の著書の修訂第二版(一九三二)において可なり變化してゐることをわれわれは附言せねばならないが、<sup>28)</sup>そして實はかゝる變化——思想發展——がゾムバルト等のそれとともに私において問題とせらるゝのであるけれどもいまはたゞ氏の思想の過程において第一版のごとき考が存したと

25) Sölheim, Ibid. S. 61.

26) Solheim, Ibid. S. 61.

27) K. Mellerowicz, Allgemeine Betriebswirtschaftslehre der Unternehmung, 1. Aufl. 1929, S. 5.

28) Mellerowicz, Allgemeine Betriebswirtschaftslehre, 2. Aufl. 1932, S. 5 ff  
大家一朗教授譯 經營經濟學總論 二頁以下。



いふことをこゝで指摘するに止める。

馬場敬治教授は、經營經濟學なるかわりに經營學または産業經營學なる名稱を採られ、その對象は産業體であるが、かゝる産業體は、レーマンと等しく生産單位——（經營體）——と財務單位（企業體）との統一體である。<sup>29)</sup>かゝる産業體が經營學の對象となるためには斯學に獨特の問題的根據を必要とし、すなはち、斯學が經營學と認識對象を異にする所以を教授はその問題の根據に求め、産業體が組織の問題（支配の問題）——單なる組織の問題に非ずして企業家（又は其他の經營者）が目的とせる一定方向の「價值の流」を目指して支配せらるゝ人間労働の組織の問題——と、價值の流の問題——單なる「價值の流の問題」に非ずして、企業家（又は、其他の經營者）の支配の下に在る組織に於ける價值の流の問題——との統一されたものとして觀らるゝ限り斯學の基本問題となるともにかゝるものとしての産業體が斯學の對象であるとする。<sup>30)</sup>併し、經營體が經營體たるのは生産單位たるためであつて、<sup>31)</sup>營利目的を有する財務單位たる企業體若くは營利目的と並んで他の目的をも有する財務單位たる準企業體と、經營體との統一物を、それぞれ産業體若くは準産業體とせらるゝ。但し教授は事業における人による人の支配なる活動、特に經營と呼び、これと組織としての經營體とを區別してゐられるが、要するに生産單位經營説たることは疑ないところである。<sup>32)</sup>

（この點から産業體を對象とする斯學を産業學或は産業體學とした方が誤解を招かないといふ議論

も起るのであるが、私も教授が次々に眞摯な大作を公にせられその大系が發展するのを見て、概念特に經營價值のそれなどが讀者に解し易かるべきを望む意味において教授に一考を希望する次第である）。

中西寅雄教授は言はれる。「人間は使用價值としての商品の生産に於ては、一定の合目的な、生産的な活動をなし、一定の労働要具を通じて、一定の労働對象に働きかける。この労働過程に於ける諸要素の統一的な單位體が經營で」あり、「この過程に於ける組織體たる經營は一つの技術的な範疇である」として、これに對せしめられる「企業の本質的な點は、單に企業が、經營の使用價值生産の技術的單位體に對立して、價值生産の經濟的單位體たることにある。」「従つて經營と企業との對立は、經營と經濟との對立に外ならぬ。經營と企業とは一つの對立的統一物の兩側面に過ぎず、經營と企業とが異ると云ふ場合に於ては、この對立的な側面を問題とし、經營と企業とが同一である」と云ふ場合に於てはこの對立的な側面の統一物を問題とする」と。<sup>33)</sup>かくして教授はゾムバルトの前掲書の第一版の説に組せられる。<sup>34)</sup>教授が經營自體をもつて自然的範疇としながら、それと企業との、一つの對立的統一物を斯學の對象とするといふ點において教授の經營經濟學の歴史性と、もにかゝる統一物のモメントとしての經營が歴史的な一定の規定を受けたものとして經營の社會的範疇性を窺ひ得るのではあるが、このことは氏における經營の生産單位性を毫も傷けるものではない。

33) 古林教授 前掲論文 三九、四〇頁  
 34) 中西教授 經營經濟學 昭和六年 六八頁。  
 35) 中西教授 前掲書 六九、七〇頁。  
 36) 中西教授 前掲書 八一頁。

29) 馬場敬治教授 産業經營理論 昭和二年 第一章。  
 經營學方法論 昭和六年 第三章。  
 30) 馬場教授 經營學研究 第四篇 特に二一一—二一三頁。  
 經營學の基礎的諸問題 参照。  
 31) 馬場教授。經營學の基礎的諸問題 二二四頁。  
 32) 馬場教授 經營學の基礎的諸問題 昭和九年 第三篇  
 同教授 工業統制 四二二頁以下。



(因に教授は、「經營と企業とは一つの對立的統一物の兩側面に過ぎず」と言はれたが、しかし、實はこの統一物自身が企業ではなかつたか。何故なら教授にありては「經營經濟學の對象としての經營經濟は企業又は營利經濟を意味することは當然である」<sup>37)</sup>から、同時に企業が統一物の一側面であるといふことは矛盾であると言はなければならぬ。この點レーマンのシェーマの方がその企業概念の當否は別として合理的であるとおもふ。(但、本章終了後氏の「經營費用論」の出版を見、それには意見の變更を眺め得るか如くであることは殆く確信に堪る。)

池内教授もまた中西教授と同意見である。「資本主義的生産の事實關聯の説明から吾々は次のことを知り得る、すなはち資本家は商品の生産にあつて、一定の合目的な、生産的な活動をなし、一定の労働要具を通じて、一定の労働對象(原料)に働きかける。この労働行程における諸要素の統一的な組み合わせが云はゆる經營である。……企業と經營との根本的な相違は、企業が價值生産の組織であるに對して經營が使用價值生産のための組織であるといふ點にある」<sup>38)</sup>と。但し、教授においては「今日における經營は、原則として營利を目的とするものである。そしてこの營利を追求する經營、これが企業なのである」<sup>39)</sup>といふのであるから、折角指定した企業に對立する經營概念がいつの間にか企業とすり替へられてゐる。一體氏の概念において營利を目的とする經營とは何か。それは企業が營利目的體であるから、それにおける經營が營利目的に方向づけられてゐる(orientieren)に過ぎないのではないか。果して「營利を追求する經營、これが企業である」ならば企業と經營と

37) 中西教授 前掲書 二五、二六頁

38) 池内信行教授 經營經濟學の對象 會計 第三十一卷第三號 三一頁。

39) 同前。

は畢竟同一物に歸着するのではないか。ともあれ教授が經營を使用價值生産の組織であるといふ主張を一應すなほに受入れておかう。

増地教授については、氏を生産單位説に屬せしむべきか、それとも生産經濟説に屬せしむべきか一寸迷ふのであつて、すなはち氏は一方で紡績工場や、製鐵工場や、消費經濟たる海軍に隸屬する生産單位「海軍工廠」——それはその老大家の故に特別會計を立て、はるが如何なる意味にても獨立の生産經濟ではない——のごときを經營、すなはち、氏の經營經濟とせられつゝ、<sup>40)</sup>他方では獨立の生産經濟が經營(すなはち氏の經營經濟)なりとせられてゐるからである。がこの混雜は、恐らく氏の單獨經濟そのもの、概念に混雜があるからで、一方で、親會社子會社の二つのものをも經濟的<sup>41)</sup>には一箇の單獨經濟と見られてゐる氏の立場からは、海軍と海軍工廠とが、また、紡績會社とその一工場とが夫々二箇の單獨經濟なりとは如何にしても爲し能はないところであらうから、その最近著(改訂經營要論)の文言に従つて生産單位説から一應除外しておかう。<sup>42)</sup>

二

以上、經營を生産單位と解する諸學者の意見を紹介したが、まだ生産單位説を採る經營經濟學者は相當に多く、社會經濟學者に至つては殆んど全くこれに屬するであらう、が、われ／＼として以上<sup>43)</sup>の諸主張で先づ充分であるとおもふ。

40) 増地教授 經營經濟學 七五、八一、八二頁参照。

41) 増地教授 改訂經營要論 二三頁。

42) 佐々木教授 前掲論文 九〇頁参照。

1) ジーパー、ホフマン、上田博士、阪西由藤博士、福田博士、クライングエヒター、フィリツボグキツチ、フックス、アモン、ゴツトル、アドルフ・ウエバー等々。



さて、次にこれらの諸生産單位説の批評に移らう。先づ第一に、右の諸説のごとく經營が生産單位として、然らば生産單位が何故に經營なるか、何故に生産單位が經營たらざる可からざるか、換言して、生産單位なる内實を除外して經營が存し能はないか、すなはち、生産單位が經營であるといふ積極的根據如何と云へば實はかゝるものは與へられてゐないのである。そこに事實上與へられたものは、たゞゾムバルトの第一版の説乃至社會經濟學者(國民經濟學者)の通説が踏襲されたか、または、獨逸並にわが國における日常的常識語の用法が單に科學的に採用せられたに過ぎないことを知る。中に就き、中西教授のごときマルクスの二過程に基礎をおく説の如きが最も説明上巧妙なるものではあるが、これとてマルクスが労働過程の單位のみを經營とするといふ主張も理由も與へたのではないから、一の巧妙なる説明方法でしかない。嘗て古林教授がレーマン、馬場増地諸教授等の經營生産單位説を引用し批評された際にも、氏は、「生産單位をもつて經營となす根據づけの論旨を吟味した結果は、却つて經營の特質を生産に求むることの重要でないことが示され、經營の本質的特徴はむしろ、「外の點にこれを求むべきものであることが明にされたと言はれてゐる。<sup>2)</sup>

第二に、經營生産單位説者のうちにこの説を固持し能はなかつたといふ事實そのものからみて、この説の積極性が主張者自身の自己否定に遭つてゐるといふ點においてこの説が弱點をもつ。ゾムバルトはその第一版における經營生産單位説を第二版以後において自ら次々に破壊してゐる。

ゾムバルト自身は前掲書の第二版において經營について言ふ「よりよきことは、一つの上位概念『經營』を構成しこの經營概念中に經濟(管理)經營を作業經營から區別することである。 Besser ist es, einen Oberbegriff Betrieb zu bilden und innerhalb dieses Betriebsbegriffes : einen Wirtschafts- (oder Verwaltungs-)betrieb von den Werkbetrieben zu unterscheiden. <sup>3)</sup> として、新たななる上位概念としての經營概念を認め、その裡に經濟(又は管理)經營——阪西氏はこの經濟經營を以て、「或は價值増殖經營」として居られる。<sup>4)</sup>——と、作業經營とを下位的な種概念として包括して居る。さらに、ゾムバルトはその「高度資本主義時代の經濟生活」に於ては、作業經營(Werkbetriebe)、第一階の經濟經營(Wirtschaftsbetriebe erster Ordnung)、高次階の經濟經營(財務經營) Wirtschaftsbetriebe höherer Ordnung(Finanzbetriebe)といふ風に、その經營概念を擴張して居る。<sup>5)</sup>のみならず、氏は同書の最後の部分に於て、將來の經濟生活を豫想し、營利主義 Erwerbsprinzip に代るべき欲求充足主義 Bedarfdeckungsprinzip を特徴とせる計劃經濟 Planwirtschaft 時代に於て現るべき經營を豫期して居られることさえ明かであらう。<sup>6)</sup> 學者は、ソ氏の第一回の經營概念のみ問題として擧げるが、ソ氏がその後、度々經營の概念を改修發展して居ることを述べる學者はないやうで、唯、私の知る限りでは阪西氏と中西氏とがこれを云つてゐられるが、氏らもなほ第二回第三回の改修に就ては何らの記述もない。

中西教授はソ氏の第一回の改説を評されて畢竟改悪たとし、「彼はマルクスに暗示されたに止つてマルクスを理解し得なかつた」と批難されるが、ソ氏自身ではそれが Besser だと考へたのであつた。

3) Sombart, Der moderne Kapitalismus, 2. Aufl.—5. Abdruck, 1924, I. Band I. Hälfte, Einleitung—1. Kapitel 特に S. 12.  
 4) 阪西由蔵氏 企業理論 一五一頁。  
 5) Sombart, Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus, 2. Halbband, 1927, S. 516.  
 6) Sombart, ibid. S. 1015.  
 7) 中西教授 前掲書 八一、八二頁。

2) 古林教授 經營概念の規定について 經營經濟研究 第七冊 四二頁 参照。  
 佐々木教授 前掲論文 九九頁をも参照。



蓋し、ゾ氏がマルクスを理解しなかつたかどうかは別として少くとも遂に賛成し得なかつたに違いないから。

これが生産單位説自己脱出者の一人である。次になほこの脱出組の一人にレーマンがあることは前に述べた通りであつて、氏は經營||生産單位の上へ、これと財務單位とを合して一體をなしたものにほなほ經營といふ命辭を露骨に採用した。<sup>8)</sup>

かゝる脱出者が出たといふことは、畢竟するに、經營が生産單位であるといふ積極的根據が氏らにおいて見出し得なかつたがためではなからうか。

第三に、リーガー、ゾエルハイム等を除き、經營學もしくは經營經濟學の名稱を奉ずる諸學者が、生産單位をもつて經營となしつゝ、經營學もしくは經營經濟學の對象が、經營すなはち生産單位ではなくて或は企業であつたり、生産經濟であつたり、營利經濟であつたり、産業體である點にこの説は弱點をもつてゐる。何故、企業經濟學であり、生産經濟學であり、營利經濟學であり、産業學であり能はないか。その實體がかゝるものであり乍ら、何故に經營學もしくは經營經濟學と稱せざるを得ないのであるか。このことは、些細に見えて實は重大なるものを含蓄してゐると私はおもふ。

つまり、その對象は企業であり、生産經濟であり、營利經濟であり、もしくは産業體であり乍ら、それらが經營學もしくは經營經濟學と呼ばなければならぬのは、それらの對象がすべて生産單位を

共通にもつてゐるからだといふごとき幼稚な理由ではなくて、實は、それら企業なり、生産經濟なり、營利經濟なり、産業體なりが、一定の見地または嚮導原理から考察されるがためにのみ、經營學乃至經營經濟學と稱することが適當であり、もしくは、稱せざるを得ないのであるまいか。さうだとすると——そう考へねば外に理由的な考へ方が實はないのであるが——、問題たる經營なる概念はもはや全く生産單位たることを輕視して、ものゝ見方乃至嚮導原理の表現物として考へる外はないことゝなる。

前段の私の主張を理由づけるために若干の例を示さう。

元來、經營經濟學者が經營經濟 Betriebswirtschaft といふとき、それは如何に説明せられてゐるか。ニククリツシュ教授は語る。「Gegenstand der Betriebswirtschaftslehre ist das Leben der Einheiten der Wirtschaft, die Betrieb heissen」<sup>9)</sup> すなはち、こゝでは明かに氏の經濟的經營學の第六版とは異つて、經濟單位そのものが經營と云はれてゐる。而してすでに經營すなはち單位體(經濟單位體)の經濟を經營經濟 Betriebswirtschaft と呼ばれる以上、それはもはや生産單位あるから經營經濟ではなくして、經濟單位の一定見方が加つたものであるから經營であり、經營經濟である譯である。さすれば、經濟の一定見方もしくは一定の見地からせられたものが經營經濟であると解釋されざるを得ない譯で、私が第一章において經濟の社會的見地の加つたものが社會經濟であり、經濟の經營的——こゝに

9) Nicklisch, Die Betriebswirtschaft, 1. Lieferung 1929, S. 6.

8) Lehmann, Ibid., S. 46-50



經營的とは目的論的とでも云はるべきもので斷じて生産單位的など考へらるべきものではない——見地の加つたものが經營經濟であると主張した理由が茲に存する。リーガーは「企業は——具象的に見たる場合——包括的概念であり、それは經營に指導的イデー、すなはち、營利努力の加つたものを包捲する」<sup>10)</sup>と。たゞ彼は經營を技術的なものと解するが故に經營經濟學の名稱を廢し、私經濟學でもつて營利經濟企業にその私的見地を加へたのであつた。然るにわれわれにあつては、經營が生産單位たるべき積極的理由を認めないの故に、經濟に一定の見地を擔はしめることによつて、經營乃至經營經濟と呼ぶとするのではないか。増地教授のごときは、「經營を單獨經濟の一種と解釋する結果、技術上の組織たる經營と區別する爲め、經營經濟 Betriebswirtschaft と呼ぶを可とするであらう」<sup>11)</sup>と言ふてゐられるが、蓋し、素朴な説明であらう。獨逸の學者が「經營の經濟」die Wirtschaft des Betriebes を「經營經濟」Betriebswirtschaft と呼ぶのもこの類である。

以上を要するに、經營生産單位説は、自らを棄てつゝ漸次經濟的なものへと上昇し擴大しつゝ何ものかを捲きつけて mit etwas unwickeln 來たことをわれわれは感知する。それは、一定の經濟單位を、一定の見地にてつゝむといふことである。經營經濟とは「經營をもつ經濟」でもなければ、「生産單位をもつ經濟」でもない、實に經營經濟とは、經濟そのものに一定の見地もしくは態度の加へられたものとして解せざるを得なかつたであらうといふのが私のこの限りでの主張である。

10) Rieger, Ibid. S. 40.

11) 増地教授 改訂經營要論 一二、一三頁。

## 二 經營生産經濟説の紹介と批評

すでに經營生産單位説を批評したわれわれは、次で問題とする經營生産經濟説以下、「經營」そのものゝ名辭のもとで考へられた諸説等の批評を比較的容易になし得るであらうと考へる。先づ、本項では經營生産經濟説を紹介し次にそれが批評を行ふであらう。

先づ、ニツクリツシユ教授はこの派に屬せしむべき偉大な饒將であらうかとも考へられるとにも、然らずして、經營生産單位説ともまた考へ得られる。何故に然るか。さて、教授がその著の第六版において經營を生産單位と説いたが、第七版すなはち *Die Betriebswirtschaft, die 7. Auflage der wirtschaftlichen Betriebslehre* においては經營を經濟單位と解せしことはすでに前に述べた。ところが經濟單位の一種である企業は教授によつて如何に見られてゐるか、「この言葉のうちにはつねに消費者としての人間と生産者としての人間との不和が横つてゐる、そしてかゝる不和の克服はその最深の意義である、あらゆる危険をもつこの克服はそれが成効されると否とに拘らず、つねに生命的權利的問題をもつて彼らを脅かすのである。」このやうな企業觀、否、經濟社會觀が氏の經營經濟學を社會任務的な規範的な性質へと導き上げてゆくのである。

教授による經營經濟學の對象たる經濟單位すなはち經營とは生産經濟に限るか。氏は云ふ、「この際、價值が生産されるそうした種類の個別經濟のみならず、家計もまた經營と見られてゐる。元來

1) Nicklisch, Die wirtschaftliche Betriebslehre, 6. Aufl. S. 37.



經濟なるものは經營においてなければ營まれ得ないものであるから、その限りから經營生活なるものは經濟生活である。<sup>2)</sup> この意味では經濟が對象であるが、しかし、經營が問題となるのは、蓋し經濟生活の「全過程は人間の欲望とその充足との間に横はる空隙の架橋を意味してゐる。この架橋は經營の形において行はれ、しかもかゝる架橋こそこの構成體(經營)の生活の目的と意味である。すなはち、人間は經營を通してこの架橋を行ふのである。<sup>3)</sup>」然らば消費經濟が斯學の對象となるのは氏においては、消費經濟は自己の價值調達手段を獲るため「誰か他人のための價值生産に協働する方法によつて行はれる」<sup>4)</sup>からであり、すなはち、氏の經營協同體 *Betriebsgemeinschaft* の特殊の任務のうちに、換言して、生産經濟の過程のうちに生産者の經濟ととも消費者の經濟がともに包まれて關聯的に對象とならねばならぬからである。

然らば生産經濟たる企業が企業家の營利のために行はれるといふ世の通常の考は教授によつて如何に解されてゐるか。勿論教授も經營における營利性の存在を否定するものではない。しかし乍ら、「經濟における爾餘の全過程、例へば營利による貨幣資本の蓄積のごときは、すべて經營本來の主要過程に拘束されており、それらは、各個人にとつて自己自身の満足が同様に經濟者全體の満足となるやうな一つの關聯そのものゝうちで行はれるのである。<sup>5)</sup>」元より營利過程が經營本來の任務たる主要過程を乗越へることがあるとも、そして經濟はかゝる行爲より影響は受けはするが氏によれ

2)3)4) Nicklisch, Die Betriebswirtschaft, 7. Aufl. d. w. Betriebslehre, S. 6.  
5) Nicklisch, Ibid. S. 6, 7.

ば「かゝる事象とその過程 (Vorstufe) とはもはや經濟の範圍から脱越したものであり、「それは經濟に何ら固有なものではなく、もしくは、經濟に何ら固有な關係から來たものではない」<sup>6)</sup>のである。要するに教授においては「収益性は經濟性の基礎から發生せねばならぬ」<sup>7)</sup>ととも、「經濟性の問題は彼自身總體經濟の中に鈎着してゐる」<sup>8)</sup>のである。かゝる考をもつ教授の經營經濟學が生來的に (von Natur aus) 全體への志向性 *Richtung aufs Ganze* を内在せしめ、その吸引的上層部において一の信念論 *Gesinnungslehre* であり氏の斯學が規範的經營經濟學 *normative Betriebswirtschaftslehre* である所以である。<sup>9)</sup>

さて、かやうにして教授の經營經濟學は消費經濟を對象とすることを拒否してゐない、否教授自ら對象たり得ると云ふ。しかし、その仕方についてみるならば、われは、やはり經營すなはち生産經濟のものとして取扱はれてゐるのであつて、たゞその中で消費者たるべき人々の欲望充足が信念的に考慮せられてゐるだけである。蓋し教授は、經營すなはち生産經濟において消費者の「經濟せむとする欲望が充たされるならば、本源的欲望の充足が確保せられてゐるものとせば」<sup>10)</sup>として、かゝる確保を生産經濟のうちに期待してゐられるからであり、生産經濟と並んで消費經濟が對象とせられてゐるのでないからである。かくのごとく、生産者の欲望充足と消費者のそれとを共にそれ自體として擔ふところの特殊の規範的任務の生産經濟が經營であり、生産經濟である限りそのやう

6) Nicklisch, Ibid. S. 6, 7.  
7)8) Nicklisch, Profitlehre ? 1934, S. 8.  
9) Nicklisch, Ibid. S. 7.  
上林貞治郎氏 ニツクリツシユ 「利潤論？」 經營研究 第四卷第三號。  
10) Nicklisch, Die Betriebswirtschaft, 7. Aufl. d. w. B., S. 19.



な任務を擔ひ得ると考へられてゐるのであるが、かくして經營經濟學はかゝるものを對象とするといふ點において教授もまた一種の經營生産經濟説に屬するものである。たゞ然し乍ら、われ／＼がかやうな經營||生産經濟説を批評するとならば、第一にわれ／＼は經營がかゝる任務をつくしつゝあるか、もしくは、つくし得る現實的可能性がありやといふ問題とゞもに、第二に教授の經營經濟學の基底となる史觀そのもの、批判からその經營經濟觀に及ばねばならないであらうから、そしてかゝる仕事はこゝではたすよりも後段の別章（經營經濟學の對象を取扱ふ場所）にゆづることがより適當だと考へるから教授の經營觀の特殊性の故にこゝでは差控へやうとおもふ。

だがこゝで必要な限りの批評を行ふならば、教授の生産經濟||企業といふものが經營（||經營經濟）として斯學の對象となる根據は、それが生産人や生産人の團體たるがためでもなく、また單なる生産經濟たるためでもない。かゝる生産經濟が經營（經營經濟）たるのは、一つにそれが經濟性を企圖するものと觀られてゐる限りで、換言して、經濟性の嚮導原理の見地から眺められたるものたる限りで經營であり得るといふことは、前に引用したところによつて明でなければならぬ。すなはち、教授に従へば、經濟性を追求する限り經濟單位は經營であり、經濟性を追求するものとして眺められてゐる限りにおいて經營經濟學の對象となるのである。しかも追求される經濟性の成果の分配に與るべき限りにおいて生産者自身の經濟も消費者としての經濟も、ともどもに斯學の對象としてそのうちに包含さ

11) Nicklisch, Die wirtschaftliche Betriebslehre, 6. Aufl. S. 36.

れ得る譯である。してみれば、經營または經營經濟がそれとして在り得るのは、何ら他の理由からではなくて、實に一に目的追求——こゝでは經濟性——の見地乃至それに對する態度に懸ると見なければならぬことを知る。消費經濟もまたその成果に與り得べきが故に經濟性を追求し、その限りで斯學の對象の掙内に屬する。

増地教授は消費經濟を除外する意味において極めて明白な經營||生産經濟説に屬する一人である。次にその主張を聽かうと欲する。

教授は述べられる。「經營經濟學の對象は經營經濟（經營）である」<sup>12)</sup>。「卑見によれば、經營經濟とは經濟性を目標とする生産經濟である」<sup>13)</sup>。「この「經營經濟は一箇の單獨經濟（個別經濟） Einzelwirtschaft である」とゞもに、それはまた同時に「生産經濟 Produktionswirtschaft である」<sup>13)</sup>。

では何故に、教授においては生産經濟以外の消費經濟が經營經濟たり能はないのであるか、この問題につき教授に従へば、「單獨經濟は其の目的に從つて二種となる」——（肩點引用者）——消費經濟 Konsumwirtschaf と生産經濟とがそれである。然るに消費經濟が經營（經營經濟）たり得ず從つて經營經濟學の對象たり得ないで、生産經濟のみが經營（經營經濟）たり得、それが單獨經濟的觀察を加へられるとき斯學の對象となり得る根據は、教授に従ふと、すべて「經營經濟は經濟性 Wirtschaftlichkeit を目標とする」ものであるが、「經濟性は生産經濟のみが目標となし得るものであり」

12) 増地教授 改訂經營要論 一一頁。

13) 同上 一三頁。



これに反して、消費經濟は經濟性を目標となし得ないものであるから、經濟性を目標とし得る生産經濟のみが經營經濟となり、消費經濟は經營經濟ではあり得ないと言ふにある。<sup>15)</sup>

そこでこれが批評に移るが、こゝでも經營經濟(經營)が經營經濟たり得るのは、それが元々生産經濟たるがためではなくして、一つに全くそのものが經濟性を志向しそれを嚮導原理としてゐるものと觀られた限りにおいてそれが經營經濟たり得るのであるといふ點である。何故なら、消費經濟もそれが經濟性を追求するものたる限り經營經濟たり得るであらうからである。従つて經濟單位はそれが經濟性を志向する以上そして志向するものとして觀られたる限り經營經濟たり得ると言はねばならぬ。すなはち、經營經濟學の對象たる經營經濟は、一定の見地から眺められるが故に、然るのであるといふことである。

かくの如くして、教授は消費經濟に經濟性追求を否認することによつて、結局、經營經濟||生産經濟説を主張される。然らば、消費經濟は經濟性を追求しないものであらうか、或はまた、經濟性を追求し能はないものであらうか。この點を決することによつて教授の經營經濟||生産經濟説がさらに別の方向において批評されねならぬ。

教授は云はれる、「生産經濟は、原則として、生産活動の結果たる給付が投じたる費用を償ふに足るべきことを期待するものである。即ち生産經濟は所謂經濟原則に従つて運営されなければならない」<sup>15)</sup>

14) 同上 一三——一六頁參照。

——肩點引用者——と。つまり、教授は經濟性の實現される領域を生産活動にのみおいてゐられることが判る。この限りからは經營は生産經濟のみであるといふやうに見える。然るに、然らば經濟性なるものは教授において消費經濟に原理上許し能はないかと云へば必しも然うではない。何故なら「消費經濟に於いては、構成員の欲望充足が測定不能であり、費用との比較が出来ないのみならず、屢反經濟的活動も行はれる」<sup>16)</sup>と。これに仍つてみれば、教授の否認根據は二項に分つて考へられる。一は測定不能従つて比較不能といふ理由であり、二は消費經濟に反經濟的行動の存在することが理由となつてゐる如くである。

そこで先づ第一の點、すなはち、測定不能従つて比較不能の理由について問題としやう。教授においては消費經濟はたとひ經濟性を追求してゐても、その測定が不能であるからそれが經濟性とはなり得ないといふ考が支配しており、かくて測定不能なるものは經濟性でないといふ結論を下さざるを得ない。すなはち、經濟性とその測定の可能性すなはち計算の可能性といふことは不可分の關係において考へられてゐるのであつて、この經濟性と計算可能性との不可分關係は、教授の論理において必然的に經濟性と生産經濟との不可分關係を要求する。

ところで、經濟性をその計算可能性のもとにのみ認める考には私見に異論があるがそれはこゝでは述べないでおき、たゞこの消費經濟經濟性の測定不能説に對しては、古林教授が消費經濟における經

15) 増地教授 前掲書 一四頁。

16) 同上 一五頁。



濟性もまた測定可能であると主張されてゐることだけを附記しておく。<sup>17)</sup>

より重要な點は、私見によれば、もともと増地教授の消費經濟の概念には大きな誤解が含まれてゐる。教授は消費經濟の欲望充足と言はれることにおいて何か使用價値が胃腹を満足せしめたり、使用價値がわれ／＼に費消されることにおける充足感のごときことを考へられてゐることである。このことは、多少面倒ではあるが、教授の次の言説によつて明にせられるであらう。教授は言はれる――

「例へば或家庭に於てロース肉を食べて居つた。然るに同じ栄養價値があるといふので、高價なるロース肉を廢して安價なる鰯を食べることとした。そして其の家庭ではロース肉よりも鰯の方が値段が安いから經濟的であるといふかも知れない。しかし私の考へる所では、これは果して眞に經濟的なる行爲といひ得るであらうか。けれどロース肉によつて得られる満足と鰯によつて得られる満足とが全然同一であるとはいひ得ないからである。兩者によつて得られる結果が同一であるか否かは不明である。其の結果を計量する標準がない。ロース肉によつて得たる食慾の満足と鰯によつて得たる食慾の満足を比較して見る衡はないのである。或は一部の學者のいはれるやうに何カロリーの熱量といふことを標準として兩者を計することは可能であるかもしれない。たしかに一定量のロース肉は何カロリーの熱量を發生し、一定量の鰯は何カロリーの熱量を發生せしむるといふことを科學的に證明し得るであらう。しかし其の證明が出来たとしても猶一方が他方より經濟的であるとはいひ得ないのである。何故なれば我々の家庭に於ける食物の消費は單に身體中に於けるエネルギーの發生を唯一の目的とするものでないからである。若し人間が單に生理的存在であるとするならば、エネルギーの發生を唯一の目的であるとする見解が正しいかも知れない。しかし人間は果して單なる生理的存在に止まるものであらうか。人間の消費經濟

17) 古林教授 經營概念の從について 經營經濟研究 第七冊、四一、四二頁

は食物の攝取によつて單に一定量の熱量の發生をのみ期待するものであらうか。食物の攝取は人間生活の維持發展の爲に行ふものであり、一定の食物が果して如何程此のより大なる目的の達成の爲に貢獻したか否かは不明である。即ち此の場合に於ける消費の結果は到底計算的に把握し得ないものである。

人或は、同一の材料、例へばロース肉一斤が一圓五十錢で得られる場合と一圓四十錢で得られる場合とがあり、後者は前者に比して經濟的であるといひ得るではないかと反問するかも知れない。しかし此の場合に於ける牛肉の買入は未だ猶物資の準備行爲であつて、消費經濟の本來の目的たる物資の充用行爲ではないのである。牛肉を買入れることではなく、それを食へることが消費經濟の目的とする所である。而も此の牛肉を食へた結果は、假令それが化學的物理的に同一の性質を備へてゐる場合にも、猶同一であると斷定することは出来ない。其の場合の結果は計算的に把握することは出来ないのである<sup>18)</sup>。(肩点引用者)

右の如く、教授は消費經濟における欲望充足といふことを、何か精神的、感覺的、生理的營養的な満足に解せられておることが明である。しかし、經濟學――それは社會科學と一般に考へられておる――が、消費經濟といふものをさやうに解してゐるであらうか。また、解して宜しいであらうか。

(古林教授もまたかゝる事柄を認めつゝ、經濟性の測定可能性を主張せられてゐるやうであるがこの點同教授にも御考慮を願ひたい。)

私見によれば、そのやうな意味の欲望充足はもはや經濟の範圍に屬せない。そのやうな範圍はもはや生理學の問題であるか營養學の問題であるか趣味論の範圍かに没入する。社會科學たる經濟學の入

18) 増地教授 商業經營 昭和七年 一二、一三頁。  
19) 古林教授 前掲論文 同前箇所参照。



り込み得ない領域である。かくて、元來教授が消費經濟に經濟性を否認せられたのは、教授が消費經濟の意義をば經濟の領域外にまで押出され、心理現象などの如き非經濟領域のうちに消費經濟行為を見やうとせられてゐるからであつて、それは宛も欲望は經濟を發足せしめるものではあるけれども欲望自體は前經濟的心理事態として何ら經濟的の大きさではないと同様に、その心理的充足も後經濟的領域として何ら經濟事象ではあり得ないのである。されば、教授が消費經濟に經濟性を否認せられるのは一に全く、經濟外的な領域で經濟性を見やうとせられる一種の無駄なる企てに起因する結果としか考へられない。

元來、生産經濟と消費經濟とを分つところの本質的に經濟的な區別は、一定の經濟が究局的に消費(技術的消費)に對つて方向づけられてゐる(Orientieren)ものであるか、それとも、それが市場もしくは貨幣利益——その限りで生活經濟的利益でないところの——へ對つて方向づけられてゐるものであるか、の相異に本くのである。消費經濟の場合、その經濟たる最後の範圍は消費財(使用價值)の獲得をもつて終るのである。だから、例へば料理店から購入される味噌汁は、家庭で造られた同質同量のそれの方が、家庭では労働や設備の原價が通常積極的に加算されないことなどから一般的には經濟的であると考へられてゐるだけである。が、だからといつて料理店から味噌汁を購ふことが強ちに反經濟性であるでもない。蓋し、かゝる買入れられた使用價值のもつ價值とその獲得に要した價值との對比

が經濟性の一問題であるとともに、家庭における味噌汁の作出を止して料理店から購ふことが結局不經濟であるといふ理由から所得の購買力に影響するといふ限りでこれがまた消費經濟の一の問題たり得るからである。味噌汁を作出するといふ使用價值の生産そのものは料理店と家庭とにおいて同一の行為であつても、前者においてはそれが生産と言はれ後者において消費と呼ばれるのは、かゝる活動の究局的な方向づけ(Orientierung)が異なるからである。生産と消費とが使用價值の造出といふ點でそのこと自體が同一事象であることから、マーシャル教授はこれをともしに生産と呼び、所謂生産をば氏が積極的の生産といひ所謂消費を消極的の生産と名付けてゐられるが、これ同一事象が方向づけによつて意味を異にするも事象そのものが同一たることを言はれたものである。要するに、消費經濟における消費とは、唇にゆく一瞬前の姿の使用價值がその獲得(購買獲得並に購買獲得を経た後における造出獲得の双方を含む)された瞬間におけるそのものゝ價值とそれに要した費用價值との對照における經濟活動のその部分である。もし、かくてより經濟性的に獲得された財が放置もしくは不注意によつて例へば腐敗するとせばそれはもはや經濟外的な事象であることは、食したる食物の感覺的満足の問題がもはや經濟外的なと同様である。人が獲得されたものを例へば腐敗せしむることを不經濟と云ふのは、犠牲價值が無獲得と同一結果に終るか、或は、その再獲得が所得の購買力に影響するからである。また再獲得せざる場合にはかくて人は欲望不充足のまゝで我慢するといふことが苦痛であるか

20) A. Marshall, Principles of Economy, 8th Ed. 1927, p. 63-64.  
 拙稿 生産の概念と經濟性 經營經濟研究 第七册 八一頁。



ら、經濟といふものがかゝる經濟外的な自然的過程によつても規制せられるからである。

ニツクリツシュ教授は言ふ——「經濟的なものが確保されてゐる限り、「消費それ自体はもはやわれ／＼の對象に屬せず。その限界は唇と杯の縁との間に存する。何故なら、杯竝にそれに中味を満たしそれを引寄せる行爲——消費前の瞬間迄の過程——といふ、かゝるすべての給付はいまだなほ經濟に屬する」と。<sup>21)</sup>蓋し消費前の過程に<sup>21)</sup>いまだ屬するものは帶價的たり得べきからであらう。

以上は、教授の經濟性否認理由の第一點をなす測定不能従つて比較不能説について批評したものであるが、次は第二點たる消費經濟の反經濟的行動の存在が經濟性否認の理由たり得るかどうかを問題としやう。

蓋し「反經濟的」なる内容は「非經濟的」内容ではないのであるから、「反經濟的行動」とは低經濟性行動の意と解せざるを得ぬ。しかし低經濟性行動はなにも消費經濟にのみ限られた事柄ではないのである。教授自らもまた、「生産經濟は、原則として、「經濟原則的結果を「期待する」とか、「經濟原則に従つて運営されなければならない」とかの理念をば生産經濟にのみ擔はされてゐる。然らば消費經濟もまた本來はかゝる理念のもとに行動せなければならぬのではないか。家計學が家計の低經濟性の故に研究されてゐるが、特に國民の生活緊張が低經濟性の克服を理念とすることは、生産經濟の低經濟性克服の理念と理論上同一である。この點でも經營Ⅱ生産經濟説は破れざるを得ぬ。

21) Nicklisch, Ibid. S. 19.

22) 増地教授 改訂經營要論 一四頁。

かくてわれ／＼は増地教授の消費經濟は經濟外的な範圍に脱出せること、竝に、その故にこそ、それにおける經濟性が測定不能であつたのだといふことが判明した。従つて、消費經濟は經濟たる限りでその經濟性が測定可能であるといふべきであり。その然る限りにおいて消費經濟も經營（經營經濟）たり得べき筈であつて、經營Ⅱ生産經濟説は破れざるを得ぬ。

要之、教授の經營Ⅱ生産經濟説においてもまた、經濟が一定の見地に本いて觀らるゝ限り、經營經濟となり得、生産經濟がこの點を離れた何らか他の理由で經營經濟たるのではないことが明にせられたであらう。

村本教授もまた經營Ⅱ生産經濟説に屬する一人であらうとおもふ。教授によれば、「經營學の對象は經營である」<sup>23)</sup>經營は經濟單位すなはち個別經濟であるが、個別經濟はすべて經營學の對象となり得るのではない。「個別經濟は、そこに於て經濟原則の作用する姿の如何により、所謂經營を以て名辭し得るものと然らざるものとに分ち得」<sup>24)</sup>「經營」となし得るものは、個別經濟のうちから、先づ合理主義（その内容は合目的性、合計畫性、合計算性）を追求するとともにこれと不可分的にそれが生産經濟たるところのものを區別して、これを經營と解さるゝ如くである。<sup>25)</sup>

元來教授の緻密なる思索と行論とはニツクリツシュ教授とも、斯學界特殊の双壁的存在であるだけに著者もその意を充分解握し得てゐるか自ら危ぶむものであるが、尙かに按ずるに、教授の經營

23) 村本教授 經營學對象再論 經營經濟研究 第五册 二九頁。

24) 村本教授 經營學原論 三八—三九頁。

同 教授 前掲論文 三〇頁。

25) 同 教授 前掲書 第二章、特に七二頁。



の本質においては獨特の見解が包蔵されてゐることであることは確であらう、すなはち、教授と古林教授との應酬<sup>25)</sup>についてこれを察すれば、教授は世の一般學者と異り、經營の規定において單にその本質的特徴(特質)のみをもつて直に本質と解せられず、その本質的特徴(特質)を具備化してゐるものにおいて、始めてその本質を示さるゝごとくである。換言すれば、經營の本質的特徴は合理主義の追求であるが、これをその特殊の仕方において追求してゐる具體物は生産經濟であり、生産經濟の外にない認められるから、それ故に、經營の本質は、生産經濟以外の經濟には露はれるものでない。すなはち、本質的特徴とそれを具體化してゐるものが不可分的一體的に見られたものが經營の本質である譯である。<sup>27)</sup>

この主張は、本質は現象形態においてどなければ實存せずとする點において一の魅力をもつとにも長所である。通常、本質と現象形態とは一應別箇に規定せられてゐるが、この主張ではそれらが統一的具體的に指定せられてゐる。がそれ故にまたこの主張を維持せむとする限り、經營の本質の規定は現象形態の實態變化とにも變改されざるを得ないといふ點で一の短所をもつ。本質規定は歴史的事實的にのみ維持せられるのである。併しこのやうな短所は歴史性を強調する人々に共通なものであつて、教授と應酬せらるゝ古林教授にありてもまた、一方で、經營の特質を「目的活動、意思活動」とせられつゝ、他方、その歴史性の故に「個別資本に於ける剩餘獲得の目的活動である」とせられて

26) 古林教授 經營概念の規定について 經營經濟研究 第七册。  
村本教授 經營學原論 第二章第五節。  
27) 村本教授 經營學原論 同前所。

ゐる。すなはち、かゝる特質的なるものが歴史形態において把握されるときそれが、經營の本質として規定せられてゐるのである。<sup>28)</sup>

へされば、村本教授において生産經濟でなければ經營と解せられない理由は、生産經濟には「そこに於て經濟原則の作用する姿の如何により」<sup>29)</sup>特殊の經濟原則が認められるとせられるが故であるらしく、生産經濟ではその經濟性(經濟原則、教授の合理主義)は「經營がその活動の爲に費したるところと、その活動の成果(収入又はそれと假定することを得るもの)との對比比率に於て示さるべき」であるが、これに對して消費經濟では「右の比率を求むることが不可能であるか、或は不可能でないにしても、生産經營と同一なる範疇を以て統一することは不可能であるから經營學の對象中から除外せらるべきこと」を主張されてゐる。<sup>30)</sup>

これによつて見れば、消費經濟が少くとも經營學の對象としての經營たり得ないのは、必しもその經濟性の測定不可能の故にといふのではなく、従つてまた必しも比率を求むることが不可能であるためでもなく、究局、消費經濟と生産經濟とはその合理主義の追求の仕方と内容とによつて同一範疇をもつて目すること能はないからとの理由に歸着する。

かくて問題は生産經濟的合理主義は然らざるもの例へば消費經濟的合理主義とはどふ異ふかといふこととなる。そしてこの問題を明にするためには教授における獨特の生産概念を持出さねばなら

28) 古林教授 前掲論文 五二一五五頁。四八、四九頁。  
29) 村本教授 前掲書 三八頁以下。  
30) 村本教授 經營學對象再論 二九、三〇頁。



ぬ。すなはち、教授において生産は單に物能作出といふ技術的生產に止らずその生産物が買手たる相手方に渡ることによつて效用を發生しこゝに相手方の欲望を充足するものとして受取られたことが、すなはち效用完成が、生産である。而して、教授においては、彼が引渡す效用と、その效用が欲望を充足する度合すなはち價值と、この充足の度合に應じて支拂はれる價格との三者が正比例的であることともに、生産經濟そのものからこれをみればこの受取らるゝもしくは受取られ得べき價格（效果）と費消したるところ（價格）とが一定の比率すなはち  $G'/G$  なるに反して、消費經濟は  $W'/G$  を追求するからである、と云はるゝ如くである。<sup>31)</sup> 然るに、生産經濟のかくの如き經濟性の特殊の内容とその他に渡つて關係を充實完成する合理主義の作用は、これを消費經濟に見出すことは出来ないから、従つて、生産經濟の特殊の合理主義の故にこれのみが經營となり得るとせらるゝ如くである。

以上の紹介は或は私の未熟の故に或は教授の眞意を誤解してゐるやも測られぬが、私にはさやうに解せられるのである。

果して然るとせば、この説について私の疑問とするところは第一に次の點にある。すなはち、買手たる相手方は勿論效用なく従つて價值なきものに價格を支拂はざることは明であるとしても、この效用と價值と價格とが正比例的であるといふことは如何にして知り得るか。おもふに、こゝに效用とは相手方に引渡されその人の欲望充足の對象となれる使用價值性であり、こゝに價值とはかゝる使用價

31) 村本教授 前掲書 第二章第五節特に九〇頁以下。及び、同書二九頁。

値性の彼にとつての評價の高さとして主觀的評價度合であるが、<sup>32)</sup> しかもこの價值はかく充足の度合でありつゝ、それはまた同時に彼が支拂ふ貨幣量すなはち價格において定まるとせられてゐる。<sup>33)</sup> 然るに、通常の考に従へば、價格は綜合經濟の影響の下に決まるから買手の充足度合のみで定まることは困難であり、従つて、外部的影響も手傳つて出來た價格が買手の主觀的價值を規定する上にもはたらくこととなるし、また、買手としてはその充足度合高く従つて價值高きに拘らずなるだけ低き價格を支拂はうと欲するであらうから、かくてこの場合の價值と價格とは正比例的であるかどうかは疑しくなる。と同時に、心理的評價であるこの場合の價值と經濟的貨幣量である價格との間には共通尺度 *Kommensurabilität* を缺くから比例關係の測定は困難となる。尤も、教授は必しも測定の可能性を要件とはせられてゐないから、<sup>34)</sup> この點では不可ないかに見ゆるが、しかし測定の不能なるところ比例關係の設定が客觀的に出來ないといふことになりはしないか。

併し乍らかゝる疑問あるに拘らず、私は教授の説には經營學的なものゝ考へ方として他に見られない獨特の優れた點の存することを見逃すわけにはゆかぬ。かゝる經營學的なものゝ考へ方の浸徹といふことは、身自ら深く經營學的な思索に沈潜して來た人々でなければ理解し得ない點で、私はこの點において非常な尊敬を感じる。蓋し、かゝる考へ方は世に殆んど存しないからである。すなはち、可然的に云へば、買手が高き價格を支拂ふといふことは引渡される價值すなはち主觀的使用價值高き管

32) 前掲書 八七、八八頁参照。

33) 前掲書 九一頁。

34) 村本教授 前掲論文 三〇頁。



の故であり、このためには效用すなはち使用價值性の高きものを造出することが生産經濟の任務となり、この任務をよりよくつくり出すことが生産經濟の社會性（教授の謂ゆる適合關係もしくは善の實現）の實現であるとともに利潤は正しき利潤としてかゝる社會性の反映物でもある。だからかやうな相互共存的對映關係なくして生産經濟の經營政策乃至任務を語つてはならないとともに生産經濟の經營性の特殊性を強調せられる所以でもある。たゞこの考には規範的な論理的條理をもつて現實的なものを掩はむとする點において反對もあり、教授が倫理派乃至規範學派の一人と目せられてゐる譯でもあるが、經營の社會性を出来るだけ條理的に明かにせられやうとする良心において熱情の逆しるところ到底冷やかなる現實論者をもつて終止し得ないものあるを見受くる、とともに、この思想は Merchandising policy として深き暗示をもつ。だから、計算の測定可能性のときは、この根幹的經營態度の前には敢て重大な分歧點とはならないのではないか、蓋し合理主義とは實はこの根幹的經營態度そのものゝ如くに見受けられるからである。

以上は教授の説に對する第一の疑問點であつたが、私の第二の疑問は次の點にあり、そしてこのことの方が經營生産經濟説の批評としてより重要である。すなはち、以上述べたところよりして察せられるごとく、生産經濟が經營學の對象として經營たり得るのは、その根幹的態度をもつて任務的に生産經濟が消費經濟を掩はむとするが故であり、かゝる意味における合理主義が實は生産經濟の特徴

であつて、消費經濟にはかゝる特徴が認められない故であるといふごとくに察せられる。然るに私見によれば、生産經濟のかゝる社會的、合理的態度はそれが生産經濟によつてまさにもたるべき態度であるにしても、また、現にもちつゝある態度であるとするとも、價格の決定は綜合經濟的影響を受けざるを得ないから教授における效用、價值、價格の正比例的關係は紊されるし、また、一定の使用價值性すなはち效用について、生産經濟のうちには現實的にはなるだけ高き價格を、消費經濟はこれに反してなるだけ低き價格を追求するから社會的合理主義は脅かされるとおもふ。のみならず、これを積極的に云へば、消費經濟の經濟生活はその所得によつて先づその極大を制限され、さらに、購入財の價格によつてその消費の豊富さの高さに影響を受ける。だから生産經濟の立場から翻つて、これを消費經濟の立場から云へば、消費經濟の社會的合理主義といふものもまた消費經濟の立場そのものからは主張せられ得る譯であつて、すなはち、教授における效用、價值、價格の關係は消費經濟の側からもまた合理主義的に、すなはち、正比例的でなければならぬ要求が生ずる。さすれば、生産經濟も消費經濟も對等的、同權利的であり、異るところはたゞ資本主義經濟社會そのものゝ性質から、生産經濟の方が勢力的により多く決定者的である點だけとなる。往々、經營學は第一次的に生産經濟を、第二次的に消費經濟を對象とするといふ説は、おそらくこの資本主義社會に特有の勢力關係の相違より來たものであらうが、この勢力關係の故にこそ消費經濟主體の意欲が關心を喚び起されるのではあ



るまいか。經營學が經濟の「目的活動、意志活動」に着目するといふのは、元來その深き根源においては人間の經濟的意欲に發足するものであつて、生産と消費とが主體的に分離したる歴史社會においてはそれが生産經濟者の意欲であるとともにまた消費經濟者の意欲  $W/G$  としても妥當する。しかも、かゝる歴史社會における勢力關係が生産經濟に決定者の地位を與へ易いといふ事實から、却つて消費經濟者の意欲、従つてその目的活動の事實關係の認識がまたそのものゝ立場から關心を高めても然るべきで、これを拒否することが不穩當ではないかとおもふ。それ故に私見はこの點において教授の見解と對照をなす。私見と雖も、かゝる歴史社會における實踐の社會性がより強く生産經濟に負はさるべきであることは充分これを認めるが、その故に經營はたゞ生産經濟的なもののみ妥當するといふ見解に對立する。

### 三 經營＝營利經濟（企業）説の紹介と批評

古林喜樂教授は經營＝資本制營利經濟説を主張せらる。教授の主張はその論文「經營概念の規定について」<sup>1)</sup>において見らるゝが、その要旨をかい摘むと、次の如くである。

教授によれば、經營は、「一方に於ては、綜合經濟現象に對する特質」の點でその「目的活動・意思活動たる點に於いて」、同時に「他方に於ては、その歴史性を、價值關係・資本の支配的地位・流通

1) 經營經濟研究 第七冊。

關係に對する外部的交渉に於いて求むべき」である。<sup>2)</sup>すなはち、經濟における「目的活動」は、第一に、使用價值の生産・支配にあらはれるのではなく「その目的は價值の支配にある・即ち價值の剩餘をつくること」にあり、第二に、「その目的活動に於ては、資本が支配的地位を占めてあらはれる」のであるとともに、第三に、かくて資本主義經營は「流通過程の法則の支配をうけ、又この過程に支配力を及ぼす點に」その特殊な活動方面をもつ、つまりその目的活動が經濟過程の全體にはたらくのではなくその活動によつて統制されない部分を残すといふ限りで經營の目的活動は經濟過程中の部分的なそれである。以上を要約して教授は云はれる「資本主義經營は、資本の運用によつて剩餘をうることを目標とする全經濟過程中に於ける部分的な目的活動である。より簡潔に云へば、個別資本に於ける剩餘獲得の目的活動」<sup>3)</sup>が經營學或は經營經濟學の研究對象としての經營或は經營經濟の概念である。そこで先づ第一に注意すべきことは、教授においては一般的には經營は資本主義經營のみに限るといふ意味は存在せず、蓋し「資本主義經營」と云ふかぎり非資本主義經營も存し得る筈である。要點は教授において經營學が歴史科學として把握される限り、歴史性の要求から、資本主義經營がかゝる性質の科學の對象としての經營と規定されたのであると見ざるを得ぬ。しかし、かゝる規定においては、資本主義營利經濟の經營のみが何故に經營となり、その他の經營が經營學的經營となり得ないか。<sup>4)</sup>この理由は教授においては「吾々の研究が現實の經營即ち資本主義經營である限りはそう云ふ具

2) 古林教授 經營概念の規定について、特に五二頁。

3) 前掲論文 五二一五五頁。

4) これに就ては Schönflug の批判も一考さるべきであらう。F. Schönflug, Der Erkenntnisgegenstand der Betriebswirtschaftslehre, 1. Abschnitt.



體的な社會的な規定をうけた經營の本質が求められなければならぬ」からである。けれども、資本主義社會において非資本主義的經營として見られてゐる中小商工業なども現に歐米においてもわが國においても經營學者が研究の對象としてゐるではないか。然るに教授の規定からはかゝるものゝ研究は經營學の研究から排除されたるやうにさえ解せられる。中小商工業やわが國の農業などは「現實の經營」ではないかに見ゆる。私見によれば、教授が歴史社會を *idealtypisch* に把握せられた資本主義經營の流通過程中の目的活動を正しく把握せられてゐる鋭敏なことには感服するが、その餘り非資本主義的經營に地位を認められなさすぎる點に同意し得ない。蓋し、經營學はこゝでもその深き根源性においては人間の經濟的意欲に發足する。中小農商工業もかゝる歴史時代にあればこそ困厄しその意欲の被壓が社會的な重大性をもつに至る。のみならず、かゝる生活經濟的營業の困厄は、資本主義經營に對しても購買力を拒否するし、また、國民經濟的問題をも惹起する。

否、さらに全面的に云へば、資本主義社會といふ歴史時代なればこそ、中小經營における人々の意欲が問題化し、家計者の意欲が阻まれて重大化するのではないか。經營學的研究は教授によつても「目的活動」的研究なることから、それら經濟者の目的活動を研究對象とすることがかゝる歴史社會の故に却つて必要であるとも云へないだらうか。しかもすでに經營學的研究が「目的活動」的研究なる以上、その目的は根源的にはそれら經濟者の「意欲」からこれを闡明せなければならぬであらう。

5) 前掲論文 四八頁。

歴史的社會の故にこそ、或る意欲は促進され他の意欲は抑壓さる。經營學的研究はそれら意欲を重大と認め、その故にそれぞれの「目的活動」が或ものは促進的であり或ものは被抑的である説明をばそれぞれその意欲者の立場、目的者の立場に即しつゝ闡明しやうとするものではないかとおもふ。かくて、經營學の權利をばたゞ資本主義經營にのみ認めむとする見解にはその優れた半面があるにも拘らず私見はそれに全的に賛成し能はなし。<sup>註</sup>

#### 四 經營=個別經濟説の紹介と批評

メレロウィツ教授はその著の第二版において第一版の説を改修し、「吾々は經營を經營經濟と同義に解する。それは事實、多くの經營が存してゐるのであるけれども、こゝではたゞ一種、經濟經營 (Wirtschaftsbetrieb) 即ち、經營經濟 (Betriebswirtschaft) のみが觀察の對象たるからである」と<sup>1)</sup>。然し乍ら教授は經營をかく云ひ乍らも、未だなほこれを何らか技術的に考へやうとする傾向を残す。「經營は原始的なものにせよ、複雑なものにせよ、仕事の計畫的なる繼續遂行であり、組織された作業實行である。技術は作業實行の過程……を決定する。經營技術は二種類のものである。」「作業場技術 (工藝者技術) と管理技術 (商人的技術) とである。」「經營に於ける經濟は、何を、幾何、何時買ふか、生産するか、如何なる價格、如何なる條件でこれを賣るかを指令する。經濟は又經

註 經營=營利經濟(企業)一般説は、實質上、多數の學者の採用するところである。經營=生産經濟説に屬する殆んどすべての學者は、實質上、經營=營利經濟説論者であることは、茲に注意しておく必要がある。以上ではたゞ古林教授をもつて營利經濟説を代表せしめたこととした。

1) Mellerowicz, 2. Aufl. S. 5.  
大塚一朗教授譯本 二頁。



營の仕度及び設備のための手段を調達する」<sup>2)</sup>といふ。

尤も、教授は經營の經濟的目標乃至理念をその巻頭第一に示して「經濟とは、現存する欲望の充足を目的として財貨を調達することである。經濟は生計及び營利のためにする配慮である」<sup>3)</sup>と規定するが、經營の技術的性質の重視はかくて覆はれるものではない。

次に經營經濟學の對象たる經營は何であるか。「單に生産經營、および管理經營のみではなく、なほ家計經營がある譯である。科學的經營經濟學は最後のものをも同様に取扱はねばならぬ。たゞ、今日では家計の經營經濟學については、協同組合經濟の經營經濟學及び共同經濟の經營經濟學についてと同様に、殆んど手が着けられてゐないから、次に示す編成はたゞ營利經濟を包括するにとどまる」<sup>4)</sup>と云ふ。

かくのごとく教授は經營＝個別經濟説を採る。しかし、かやうな個別經濟説の由つて來るところは、一面、經營を技術的な性質とする教授の臭味、従つて、それが經濟の各種類のものに適用可能であるとおもふ潜在意識と、他面、家計もまた生計的經濟であるといふ觀念とが相互に觀念的に結び付いたものにならぬと見ることが適當であつて、經營の合經濟的技術性を抜いては觀念せられなかつたところであらうとおもはれるのである。そこには、家計經濟が經濟者としての意欲の必然性から經營經濟的觀點を自ら要求し出すところの何らの根據も示されてゐないし、また、斯學がこれを對象とし

- 2) Mellerowicz, Ibid. S. 6.  
大塚教授 前掲書 三、四頁。  
3) Mellerowicz, Ibid. S. 5.  
大塚教授 前掲書 一頁。  
4) Mellerowicz, Ibid. S. 14, 15.  
大塚教授 前掲書 一七頁。

なければならぬ必然性を見出すことは出來ないのである。

なほ教授が協同組合や共同經濟を單獨經濟の如く考へてゐられるらしいが、私見はそれに疑問をもつことを附言しておきたい。

平井教授によれば、「經營とは經濟單位一般である」<sup>5)</sup>、「消費經濟も亦、經營學の對象となる」<sup>6)</sup>。「經營經濟的國家學」すなはち財政學も従つてまた「存すべき事を信ずる」<sup>7)</sup>と。要するに教授において「經營」措定の原理となるものは、それが「獨立の經濟單位をなすや否やを考ふべきである」といふことで、「均しく經濟目的達成の爲めに經濟性を對象としつゝ經濟せらるゝものは」經營として把握され得るといふにあるが如くである。<sup>8)</sup>

その主張の結果においてはほゞ私見と同様である。しかしそれはその根據において必しも同一ではない。蓋し、たゞそれらがともに獨立の經濟單位であり、「均しく經濟目的達成の爲めに經濟性」を追求するといはれても、かゝるものをすべて經營學の對象となすを要すべき必然性の根據が充分示されてゐない、とおもふ。生が學問を要求するに至るところのそのためにそれを對象とした學問が生ぜざるを得ざるところの生の要求を、生哲學的基礎において、か、社會學的に、經濟社會組織的にか、これを證明しなければ未だ充分それを肯定することは出來ないであらう。また、獨立の經濟單位における獨立とは如何なるものを指さるか、今日の國民經濟的單位は一つの獨立性をもつと考

- 5) 平井教授 經營學入門 一六頁以下。  
6) 同 上 二一五頁以下、特に二三三四頁。  
7) 同 上 二三三頁。  
8) 同 上 二一三、二一四頁。



へられるが、これもまた經營學的對象性をもち得るか否か、すべてこれらは經營學的思惟において生の根據から論じて始めて明となるところであらうとおもはれる。

佐々木吉郎教授によれば、經營經濟學の研究の出發點となる處の「經營」は、「經營する事」の本體であり、「技術的な『經營』にあらずして、經濟的に把握せられた處の『經營』である。即ち、『經營する事の本體』が「經濟的に把握せられる處の本質が、經營經濟學の意味する『經營』であり、又なければならぬ」と。然るに教授によれば、「意思性のもは總て經營なりと見る」ことには同意せられず、「經營」の規定には「所謂アトミジレンを要素とするが故に、經營は單獨經濟に關するものである」とこれを限定してゐられる<sup>1)</sup>。勿論、教授は「意思經濟を認め」られ、「その意思が族長家族の意思であるか、共產主義的乃至社會主義的社會の意思であるか、將又資本主義的社會に於ける意思であるかは問ふ處ではない」。「故に意思經濟は、例へば企業の經濟に見るが如く、所謂單獨經濟ともなれば、又、社會主義のもとに於ける社會經濟ともなる」と。従つて、教授によればアトミジレン（原子體化、分子體化）の要素の故に「經營は單獨經濟」に限られるのである<sup>2)</sup>。

先づ、讀者の誤解を避くるために上に引用した教授の「單獨經濟」に對照せられた「社會經濟」といふ言葉は、われ／＼の謂ふ意味の「社會經濟」と全くその意義を異にするといふことを注意せねばならぬ。われ／＼においては、「社會經濟」とは單獨經濟の綜合によつて出來上る綜合經濟をその自

1) 佐々木教授 經營概念の規定について 經營經濟研究 第五册 一〇四、一〇七頁。  
2) 同 教授 前掲論文 一〇四頁。  
3) 同 教授 經濟科學體系に於ける經營經濟學の地位に關するレーマン氏の所論（其の五）明大商學論叢 第八卷第三號 九三頁以下。

然的統一物といふ立場において見るが故に「社會經濟」と呼ばれるのであるが、これに反して教授の場合には、經濟社會が意志によつて統一化せられ、従つてもはや單獨經濟をそのうちに部分として包括しなくなるともそれはなほ「社會經濟」と見られてゐるのである<sup>5)</sup>。併し教授のかゝる説はいま少し立入りて紹介せなければ分明でないといふに、それを紹介した後でなければその批評を行へないから、以下若干それについて教授の考を明にするであらう。

先づ教授の謂はるゝアトミジレン（分子體化？）の意味であるが、單獨經濟といふものは綜合經濟との對應概念であつて綜合經濟無ければ分子體なきが故に單獨經濟の概念は生じないといふ意味と察せられる。すなはち、單獨經濟は綜合經濟が前提せられ、アトミジレンせられて綜合經濟の構成分子として考へられるのであるから、孤立したる單獨經濟といふものは想像的であると考へられてゐる。つまり、單獨經濟は綜合經濟に包括せられることによつて單獨經濟となる。かく單獨經濟を見ることがよつて教授は國家經濟すなはち財政は、謂ゆる綜合經濟の構成分子すなはち分子體ならずと見らるゝ故に、それは單獨經濟ではなくして、綜合經濟だとせられてゐる<sup>6)</sup>。

先づこの點について私見を述べる。私見によれば財政はその公的性質にも拘らずやはりアトミジレンして考へられるのではないか。且つ、財政は、謂ゆる生産經濟または消費經濟とたとへ同列におかれなくとも、それは如何にしても綜合經濟をもつて目すべきものではないとおもふ。財政はその基

↑ 財政

5) これに似たる用語は シェーンブルクにも存する。シェ氏は計量經濟をも綜合經濟と解する (Schönpflug, Ibid. S. 132)。  
6) 佐々木教授 前掲論文 九二—九五頁。



本質的性質において強制獲得經濟であり部分的派生的には私經濟的收入主體であるが、その強制獲得經濟的方面のみについて考へるも、その収入は國民經濟内の諸個別經濟から強制獲得を行ふも、平時にありてはその需要物購入はその本質において何ら私經濟的流通と違は無い。而してこの側面における財政の行動は私經濟と同様に景氣に影響し影響され、價格に影響し影響されるのである、と私は見る。

次に、教授が、一方で意思經濟を認められながら、財政からさらに進むで、「社會主義のもとにおける社會經濟」のごときまでこれを「綜合經濟」と考へられるのは、それがアトミジレンされるものゝ綜合體とみられたゝめではあらうが、同時に教授においては他のいまひとつのもの、すなはち、「組織原理」の強調に遭へることの故に然かく認められたゝめではなからうか。

すなはち、教授は意思體説によつてのみ單獨經濟を認める立場に反對せられ云はる。「音單に意思體説にのみよるならば、國家……の財政も單獨經濟となる。けれども國家は……總體觀に基づく概念であつて個體觀に對向するものである」と。且つまた、單に「組織原理」Organisations-prinzip のみによつて經濟を見ることにも反對せられ、「單にオルガニザチオンスプリンチープによるならば、社會經濟、國民經濟、世界經濟等も亦單獨經濟でなければならぬ」と。然るに教授によれば「たゞ意思體説によるならば意思經濟のみが單獨經濟とせられ、オルガニザチオンスプリンチープによるならば意思經濟のほか自然經濟も亦單獨經濟となると云ふ相違がある。けれども、兩者のい

7) 佐々木教授 前掲論文 一〇四頁。  
8) 佐々木教授 前掲文 一〇四、五頁。

づれか一つ又は兩者の併用によつてのみ單獨經濟を定めんとするは、所謂アトミジレンを忘れたる謬見である」と云はれる。かくて教授によればアトミジレンの要素の故に、

單獨經濟(生産經濟)  
消費經濟  
綜合經濟(社會經濟)  
財政經濟

といふこととなるのである。<sup>10)</sup>

そこで私見を述べる。元より、「組織原理」のみから綜合經濟と單獨經濟とを分たむとすることが不可なることは云ふ迄もない。私は前にこの點を注意したことがある(第二章九八頁参照)。われによれば、經營を指定するためには「組織原理」よりも、根源的本質的なものは「意思原理」でなければならぬことは、平井教授の分業組織體説を批評せられた古林教授の主張と同一の理由による。すなはち、私見によれば、「意思原理」が單獨經濟か否かの選擇原理となり、「組織原理」はこれに下屬することによつて、意思的組織原理か無意思的・社會自然的組織原理かに分れる。かくて、意思的組織原理に屬するものは、生産經濟、消費經濟、國家財政、意志的國民經濟、社會主義のもとにおけるが如き社會經濟、等であり、無意思的・社會自然的組織原理に屬するものが自然的國民經濟、世界經濟、社會經濟等の綜合經濟である。

9) 同上 一〇五頁。  
10) 同上 一〇五—一〇八頁。  
11) 平井教授 經營學的考察の吟味 國民經濟雜誌 第四十八卷 第四號 五三頁以下。  
12) 古林教授 前掲論文 四三頁以下参照。



蓋し、私見によればアトミジールンなるものも相對的概念であるから、世界經濟、社會經濟の存する限り、そしてこれと對應する限り意志的國民經濟や社會主義のもとにおける統體經濟のごときもアトミジールンされたものであるからである。況して、教授が國家財政と國家とを同一物視し、ともにそれらを總體觀のもとに律せらるゝ如きは私の採り得ないところであり、そこには明かに經濟主體といふ經濟觀と國家といふ政治觀とが混線してゐることが看取せられる。蓋し、政治學的國家は人民をアトムとする主權統一的總體なるに反し、財政は經濟主體的に個體性のものであるが故にである。教授の説のごとくむば、株式會社のごときも、株主なるアトムを反對の極として構成されるといふ故に、株式會社企業もまた綜合經濟なりとみななければならぬことになりはしないだらうか。また反對に、教授によつて綜合經濟とせられた社會主義國家の經濟のごときも、世界經濟の前にはアトミジールンされて單獨經濟化しなければならなくなるのではないか。教授におけるこれらの缺點は、要するに教授が「意志原理」を本質的な第一原理とせられなかつたこと、アトミジールンを恣意的に誇張せられたために因るのではあるまいか。

元來、アトムの思想はアトムが個體として生活し乍ら全體との關聯を對極として考へられたものであり、これを強調する結果は或は無政府主義的、もしくは民約的、等々の思想原理にも引入られ、また反對に、全體強調のための思想根據（例へばシュパンのごとき、或は、農業經營の全體性への

思想のごとき、F. Aereboe, Allgemeine landwirtschaftliche Betriebslehre, 7, Aufl. 1927) にも利用せられるが、アトムを對極として全體を採用する限り全體はつねに綜合的なものと見られざるを得ぬ。この限りから教授は國家や、國家財政、社會主義的國民經濟等が總體觀としてみられたのであらうが、しかしその限り、その原理は株式會社企業にも當筋るから、アトミジールンから單獨經濟と綜合經濟とを分つことは決して一義的とはなり得ないのであらう。従つて意志原理こそが却つて明確にこの問題を決する根本的なものとならざるを得ないのである。自然的綜合經濟の存し認められる限り、經營經濟は意志原理によるアトミジールンを受けたものとしても、かゝる綜合經濟の存しなくなつた限り、意志原理は依然として存するが、アトミジールンといふものはや經營經濟を規定する上には意義をもち得なくなる。

以上、述べたところにより、教授による單獨經濟、すなはち教授が生産經濟と消費經濟以外に經營なしとせられる説——尤も教授はその舊説においては經營Ⅱ生産經濟と解せられ、新説においては經營Ⅱ生産經濟、消費經濟を認められる——は、アトミジールンの誇張のために、そしてまた、意志原理と組織原理との並列性の故に、採り得ざる理由を説明した。なほ、私の經營Ⅱ意志經濟説に對して向けられてゐる教授論文における私見への批難、すなはち「私は斯様な自然認識的な態度には賛成を表する事は出来なす。今日の科學觀からは「Seinsbegriff」によるものは今日 Geltungsbegriff に其

13) 佐々木教授 前掲明大商學論叢論文。  
14) 佐々木教授 前掲經營經濟研究論文。



の地位をゆする可きであつて、これによつてのみ私どもは個性に生きた科學の使命を果させ得るのである<sup>15)</sup>」のごときに對してもまた、私は答へなければならぬ。すなはち、私見によれば經營學は根源的に人間の意欲に根ざすと。人間の科學的要求こそ眞の意味の *Geltungsbegriff* に値する、そしてそのためにこそわれわれは意志經濟說を主張するものであると。

### 五 經營協同體説の紹介と批評

ニツクリツシュ教授を曩に經營協同體説中に擧げた私はこゝにその二重の所屬にも拘らず、ここにまた教授を經營協同體説論者としてふたゝび紹介しなければならぬのはその特異の經營概念のために他ならぬ。

蓋し、教授によれば、人々が同一共通の目的のために協同してこれを實現せむとする組織が協同體 *Gemeinschaft* であつて、人々がその經濟的欲望充足といふ共通の目的のため協同する限り、それは經營協同體——*Betriebsgemeinschaft* である<sup>1)</sup>。おもふに、教授にありては、この思想が根源的であつたがために、或時は、經營が、工場協同體 *Werkstattgemeinschaft* とし、如き生産單位のものとして示され<sup>2)</sup>、或時は、經營が生産經濟單位として現はれたり<sup>3)</sup>、そして最後には、經營が經濟單位そのものとして出現したりしたのである<sup>4)</sup>。しかも極めて變化多きこれら現象形態的出現の曖昧性にも拘ら

15) 佐々木教授 前掲明大商學論叢 一〇七頁。

1) Nicklisch, Die wirtschaftliche Betriebslehre, 6. Aufl. S. 36, 53.

„ , Die Betriebswirtschaft, 7. Aufl. 1. Lief. S. 6.

2) Nicklisch, 6. Aufl. S. 36.

3) Nicklisch, Ibid. S. 1, 36 ff.

4) Nicklisch, 7. Aufl. S. 6.

ず、教授において根源的に不變の思想は、かゝる場所がつねに人間の經濟的欲望の充足といふ共通目的の實現に對して協同せられてゐる限り、それらがひとしく經營協同體 *Betriebsgemeinschaft* であつただと解して宜いであらう。教授の第六版は、經營と企業を關聯せしめつゝ經營の特異的鮮明は曖昧で、經營が企業を掩ふのか、企業が經營の實現する場所であるのか未だ充分でなく、經營學は經營の生産性 (*Wirtschaftlichkeit*) と成果の分配問題の研究に従ふとしても、經營は、「企業における人の不和の故に」、その概念は明晰ではなかつた<sup>5)</sup>。經營概念のかゝる貧困も、つひに教授の第七版においてその本質を教授の協同體の特殊の本質と理念とにおいて闡明され、こゝに經營概念は企業概念との關係から一應解放され、その根源的な(特殊な)經濟的内容を取戻し、經濟は經營においてなれば實現されないといふごとく、かくてこの言葉を眞の意義において普遍的な個別經濟學的領域のものとする勇膽なる突撃が試みられたと云はれてゐる<sup>6)</sup>。このニツクリツシュ教授の經營概念の再生をもつてシェーンブルクは激賞的にこれを實に文化社會學的な意義 *Kultur-soziologische Bedeutung* における概念構成として、經營の本質は人間がその精神的肉體的生存の自己主張を決定するために人類の自然に對する地位を戦ひ取るにあるとさえ云ふ<sup>7)</sup>。

定に前述せし如く、ニツクリツシュは、經濟生活の全過程は人間の欲望とその充足との間に横はる空際の架橋を意味し、この架橋を擔當するものこそ經營であり、人間は經營を通して經濟を行ふので

5) Nicklisch, 6. Aufl. S. 1, 36 ff.

6) F. Schönflug, Das Methodenproblem in der Einzelwirtschaftslehre, 1933, S. 12.

7) Schönflug, Ibid. S. 12.



あると。かくて教授の着目するのはこの、經營すなはち經濟の、理念である。ニツクリツシュによれば、「人間をして本來精神的なもの *geistiges Wesen* たらしめてゐる最深の自覺 *Selbstbewusstsein* とは、良心 *Gewusstsein, Gewissen* である。この良心において人類は自己の存在性を同時に一の全體であるとともに部分である」と意識し、それによつてまたすべての物の存在性をも全體であると同時に部分である」と意識するのである。あらゆる欲望も良心からその發動を輕重づけられる。しかもこのことは人間が精神的存在なることを自ら擁護する場合に認められる事柄である」と。

「かくてこの事由を認めるとき、われは經濟の深さ *Tiefe der Wirtschaft* を掘下げていつてその極致を認識するに至る」とともに、經濟生活すなはち經營生活の依據すべきあらゆる法則は良心の助けによつて意識中に活動する。(教授の別著はこれらの組織法則 *Organisationsgesetze* に關し、經濟における目的決定、その構成、および維持に關する諸法則を取扱ふ)。かくて彼の意識の深底に最も内部的な本質(良心)がはたらいて「全體性と部分性」と同時的なることの意味の認識」と「分化・合成に對する理解」とが具はらなければ、人間が「目的實現のために協同體 *Gemeinschaft* を構成し、または、その諸欲望を充足してもつてその生存を完成せむために經濟に協働することは不可能に相違ない」と<sup>10)</sup>。

かやうにして教授は、經營を經濟への協同化體として把握せむとする。シエーンブルークはかゝる

8) Nicklisch, 7. Aufl. S. 16.

9) Nicklisch, *Weg Aufwärts! Organisation*, 2. neubea. Aufl.

10) Nicklisch, 7. Aufl. S. 16 ff.

經營概念の構成を文化社會學的價值において觀たが、さて、このやうな經營概念が經驗的、實在的 *empirisch-realistisch* でないこと、あまりに觀念主義的であることはもはや明白であらう。われはかゝる規範的概念構成の仕方に反對する。ニツクリツシュ教授は「企業には人間の不和が存在する」現實を認めつゝ、だが、經營をかくの如く規範づけたのであるが、私見は經營生活をかくの如く全體主義的・協同體的に見ることに賛成出來ない。例へば、集團によつて構成さるゝ企業は私見によればその本質は部分的な結利社會 *Gesellschaft* であり、その収益實現への手段のみが協同的 *gemeinschaftlich* であるにすぎない。従つてその分配に際するや、人々はその企業構成に参加した動機が結利性的 *gesellschaftlich* であつたことの故に、相對立的であると見る。ニツクリツシュが經濟性の向上を全體と部分、分化と合成とのうちにおける協同的なものに見出したことは正しい。しかし、最終成果の分配にまで協同體説を延長したことにはその非現實性の故に賛成し能はない。いづれこれらの詳説は第二編にその場所を約束しこゝでは短評を挿むに止めやうとおもふが、いづれにしても科學は先づ現實の存在的説明に耐へねば思想的にいかにも潤澤であらうとも學說としてはそれだけ弱いといはなければならぬ。

向井鹿松教授もまた一種の經營ニ協同體論者である。教授によると、「經營經濟」はその昔の形態においては「封鎖的家内經濟」であつたが、流通經濟時代とともに「經營經濟」は生産・消費を營む



「家族經濟」となり、これと並んでそれらの交通によつて成立した「市場經濟」を新に現出した。この「市場經濟」はすなはち「交換共同體」であるが、その後、生産と消費とが分離して今日では、「經營共同體」——すなはち生産經濟——と、「家族共同體」——すなはち消費經濟——とがそれぞれ「經營經濟」として分化し、それとともに「市場經濟」たる「交換共同體」が並存することゝなつたと説明せられる如くである。而して教授によれば、「經營」とはこの最後の時代のものゝうちの「經營共同體」を指し、今日ではこの「經營共同體」と「家族共同體」とが「經營經濟」であるとせらるゝ。<sup>11)</sup>

それ故に教授によれば、「經營」と「經營經濟」とは異なるものであり、「經營共同體 Betriebsgemeinschaft」は茲に吾人の所謂經營である<sup>12)</sup>。而して、「經營」とは特定の經濟上の目的を達せんがために統一的意思の下に行はれる各個々の經濟的活動の組織體を云ふ<sup>13)</sup>。従つて、「經營」は「特定の經濟的目的を達せんがためであるからして家族共同體は經營ではない<sup>14)</sup>」と云はれる。然らば「家族共同體」は何故「經營」でないかといふに、教授によれば「家族共同體は自然的の血族團體、生活團體であつて、單なる特定の經濟的目的のために人の創造したものではない」「家族經濟の内には經濟以外の種々の生活方面が含まれてをるからして、之を單なる經濟組織として見るのは妥當でない<sup>15)</sup>」といふにある。

- 11) 向井鹿松教授 經營經濟學總論 (商學全集) 六〇頁以下。  
 12) 同上 六一頁。  
 13) 向井教授 前掲書 六一頁。  
 14) 同上 同頁。  
 15) 同上 六二頁。

先づこゝで教授のお考に若干の私見を加ふることを許されたい。これに仍つてみると、教授が「家族經濟」すなはち「家族共同體」を「經營」と見能はないとせられる理由は、それが「消費經濟」だからといふのではなく、「家族經濟」は經濟以外の生活方面が含まれるからといふ理由に本いてゐる。しかし、通常すでに「家族經濟」といへば家族生活の經濟的方面のみを抽象するからそれが「家族經濟」と云はれるのであつて、現に教授自らも「家族經濟は之を其の内の經濟組織だけに就いて見れば經營經濟である<sup>16)</sup>」と云つてゐられるではないか。だから教授は「家族經濟」と云ひ乍らそれを「家族生活」一般と混同してゐられることが判る。それ故に、すでに教授が前に紹介したることく、「家族經濟」は「經營經濟」だとせられる以上、經濟の側面だけが抽象せられたものであることが教授において承認せらるゝを要すべく、また従つてその限り「家族經濟」も「經營經濟」である限り經濟的目的を實現するのであるからこれが何故「經營」とはなり得ないか。教授の説明は家族經濟が「經營」でないといふ理由に對して耐へ得ないことゝなる。

そこで再び「經營」そのものに關する教授の説述について筆をすゝめやう。さて、教授による「經營」が經濟上の目的達成のための統一意思的經濟活動の組織體としてさらに如何に普演せられてゐるか。

教授は説かれる。「經營共同體」と等置せられる「經營は一つの組織體で」あり、「經營の目的は

16) 向井教授 前掲書 第二頁。



特定の經濟的目的を達するにある。換言すれば何等かの方法によつて世人の欲望に對し満足を與ふる」ことが經營の目的である。「此點に於て經營の經濟的性質は存在する」<sup>17)</sup>と。然るにまた、「經營は物的要素の組織で」あつて、同時に又「人の勞働の組織體即ち勞働共同體 (Arbeitsgemeinschaft) である」<sup>18)</sup>而して「經營」はかやうな點からして、「例へば一つの織物製造會社が紡績、染色、織布の爲めにそれぞれに經營を有する」場合、かゝる「經營」は「技術上の統一體として獨立を有しつゝ」<sup>19)</sup>「又大なる經營の一部となる」と。

こゝにおいて教授の經營概念は愈々混亂して來たことを指摘せねばならぬ。前には「經營」は「經濟上の目的を達せんがため……の經濟活動の組織體」であつたが、こゝではもはやそれは「技術上の統一體として獨立」を有する組織體と化してゐる。經營は經濟の單位であるか、それとも、技術の單位であるか全く以上の限りで不明となり去つた。

この矛盾は教授が「企業と經營との區別」を説かれるに至つて益々大となる。教授に従ふと「企業は資本の利殖を直接目的とする經濟形式」であるが、「此の爲めに又必然的に特別なる組織體」「即ち經營」を必要とする。「此の故に企業は常に經營である」が、「經營は常に必しも企業ではない」。何故なら「企業は市場經濟社會にのみ存在し得る」が「經營は少しく經濟の進歩したる社會には如何なる經濟秩序の下でも必ず存在する」<sup>20)</sup>と。しかし、教授は前には「經營」は「經營共同體」で「市場經濟

17) 同上 六二頁。  
18) 同上 六四一六七頁。  
19) 同上 六七頁。  
20) 向井教授 前掲書 七三頁。

濟」の下でのみ存すると説かれたではないか。さらに云はれる「企業は常に他との接觸交渉に主を置くが、經營は其内部の組織、行動に主を置く、前者は積極的外面的であつて、後者は消極的內面的である」<sup>21)</sup>と。しかし前に教授は「企業は常に經營である」と云はれたのはこれと矛盾しはしないか。「市場經濟」下の獨立體として前に示されたものは實は企業の內面的な組織に過ぎなかつたことが判る。

さらに「企業は營利を」目的とするが、「經營は作業目的の合理的(經濟的)——こゝに經濟的とは合理主義的の意であつて經濟的内容とは限らぬ(筆者)——完成を」目的とする。<sup>22)</sup>こゝで「企業」と「經營」とは目的上喰ひ違ふ場合が考へられ、教授もこのことを肯定せられてゐる。<sup>23)</sup>にも拘らず何故「企業は常に經營である」のか。(第一編第二章参照)。

教授は「經營」が技術的單位として獨立し得ることを云はれたが、さらに進めば次にはまた「經營も企業も共に單個の經濟で」あると云はれる。<sup>24)</sup>經營と企業とがいづれも「單個の經濟」であれば二者は全く異つた別箇の經濟とならざるを得ぬ。こゝでも何故「企業は常に經營である」か。

かくて最後に教授が示されたものは、企業と經營との區別はレーマン教授の經濟性例證に倣つて、教授の企業とはレーマンの謂ゆる財政單位であり、經營とはレーマンの謂ゆる生産單位となつてゐるのである。かくては企業とはまた營利個別經濟の單なる一活動的側面となり終はる外なく、前に獨立の經濟として指定された企業はまたこゝでその獨立性を否定せられねばならぬことゝなつた。

21) 同上 七四頁。  
22) 同上 七五頁。  
23) 同上 七五頁の教授の文を看よ。  
24) 同上 七七頁。